
魔法少女リリカルなのはStrikerS Another

外神 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers Another

【Nコード】

N8624P

【作者名】

外神 恭介

【あらすじ】

現在多忙につき停止中です、ご了承ください。

少女は、絶望の中一筋の光を見た。少女は、最狂と最悪の出会いをした。少女は、ただ己の目標を実現させるべく人の道を捨てた。少年は、閉じ行く運命を切り開こうとした。そして十年の時を経た四人の少女と青年は、一つの想いを胸に新たな舞台へと上がる。

これは、海鳴市から遠く離れた場所で紡がれる、もう一つの物語。四年の時を経て憧れの人と再会した少女と、その仲間達の成長と。三人の少年少女と、対を成す三人の始まりのお話。

桜と金と白銀は、翼を広げ空へと上がる。悲しみから産み落とされた三人を、全力全開で助ける為に。ここにいていいんだよって、伝える為に。

魔法少女リリカルなのはStrikers Another、始めます。

はい、魔法少女リリカルなのはAnotherの続編の魔法少女リリカルなのはA's Anotherの続編です（ややこしい。前作を読まなきゃイミフなこと間違いなしなので、前作を読んでから読むことをオススメします。より激しさを増した中二っぷり+原作崩壊っぷりですが、なのはを、フェイトを、はやてを、ユキを、ナツキを、六課のみんなを温かく見守ってやって下さい。それだけが前原…、げふん。それだけが作者の望みです。

プロローグ（前書き）

はい、遂に始まっちゃいました。

今まで以上に色々ぶっ飛んでますがどうぞよろしく願います m

（――） m
ではござー。

プロローグ

赤。紅。朱。視界を埋め尽くす、業火の赤。
全てを壊した紅。全てを奪った朱。

平和な日常を殺した、赤。

「お父さん…。お母さん…」

見失ってしまった二人の大人を^{両親}探して、少女はただ赤い地獄を歩き続ける。瓦礫や炎のせいで既に体は煤や擦り傷だらけ、しかしそれ以上に心がボロボロだった。

「きやつ!?!」

唐突な爆発に煽られ、一つ下のフロアに投げ出された。全身を強打する痛みというのは、例え八歳の少女でなくとも遠慮したいところであろう。

「うつ…」

痛む体をどうにか起こし、周囲を見回す。投げ出されたせいか周りを業火に囲まれ、脱出すら出来ない最悪の状況。

「ひつく…、えうつ…」

理不尽な現実を否定したくて、今すぐ逃げ出したくて。少女はただ悲しみの涙を零す。長く綺麗な髪も整った顔立ちも、今は絶望の色で塗り潰されていた。

だが、現実是非情だった。

爆発の衝撃で土台を砕かれていたのか、突如床が陥没した。亀裂に沿って砕けた破片と共に、少女は闇の中へと落ちて行く。ここで死ぬのかな、なんてそんなことを考えながら、全てを諦めた少女は目を閉じた。

「翔ける、銀月」

《Drive Acceleration》

が、彼がそれを是とするはずがなかった。

「いやーあつぶね。間一髪だったな」

不意に温かな感触と浮遊感。見上げた視界に映るのは、白銀の翼を生やした十代半ばの少年。手には白銀の刀を携え、片手で少女を抱き抱えている。

《Will it be in time enough in
case of being momentarily》一瞬あれば十分間に合うだろう》

「アホ。落ちるのって怖えだろ普通」

間一髪で少女を救い上げたギリギリの状況にも関わらず、少年は銀刀と何とも気の抜けた本人（片方は刀だが）達は至って真面目だが 会話を交わし、端でそれを眺めている少女は現状を把握出来ずぼかんとしている。

「っと、こんなことしてる場合じゃなかったな。大丈夫か？」

ふと我に返った少年が少女に振り返り、確認するように優しく尋ねる。固まっていた少女もようやく再起動し、こくこくと頷いた。

「そっか」

「あ…」

少年は安堵したように少女の頭を撫で、その感触に彼女は無意識に優しい両親の姿を重ねる。少女の涙はいつの間にか止まっていた。

「確かここが二階だから…」

《Even the sky is six layers (空まで六層だな)》

全八階立ての巨大な建物を見上げ、少年が必要な計算を始める。彼以上の演算能力を持つ銀刀は手助けしない。何故なら彼を信賴しているから。如何なる状況でも的確に判断し場を切り開ける、管理局最強の主人^{マスター}を信じているから。

「瓦礫に降られても面倒だな…。纏めて斬るか」

《It might be appropriate (妥当なところだろう)》

数秒後にそう結論付けた少年に銀刀が追従し、銀色の輝きを放つ。決めた以上貫くのみ、彼らはもはや目の前^{六層の壁}の障害しか見ていない。

取り残された少女を、救う為に。

「ま、D R M使ってるしカートリッジはいらないよな。アクセル」

《G e t S e t（いつでも行ける）》

アクセルと呼ばれた銀刀に頷き、少年は得物を振りかぶる。腰溜めに構えると同時、足元に銀色の魔法陣が展開される。

世界の理を組み替え、己が望むことを叶える力。数ある世界の中でも、数える程の世界でしか使われていない力。

魔法の、力。

災厄を切り裂き、守り抜く為の力！！

「塵気一閃：！！」

《G r a v i t y Z a m b e r》

黒色のオーラを纏った銀色の力を振り抜き、少年は斬撃を真上に叩き込んだ。天井をたやすく切り裂くだけでは飽き足らず、更に肥大化し続ける刃を以て全てを断ち切っていく！！

「上手に斬れましたー、なんつって」

少女が見上げた視界には無骨な天井はもうどこにもなく、紺色の星空が広がっていて。

少女を抱えた少年は、銀色の光を纏って飛び出した。

「こちら天城執務官。八神特別捜査官どうぞ？」

『こちら八神特別捜査官。ナツキ君でないした？』

私を抱き抱えて飛翔しながら、助けてくれた少年が顔の近くにウィンドウを展開する。映ったのは少年と同年代くらいの少女で、ショートカットにした茶髪とヘアピンが特徴的だった。

「いや、女の子保護したから身元照会と医療班を頼みたいんだけど」

『なんや、またフラグ立てとるんか？』

「冗談なら後にしろ。てかフラグってなんだコラ」

ニヤニヤと尋ねる少女に対しナツキと呼ばれた少年は冷たく切り捨て、続けざまにツッコミを入れる。本心から言っている様子じゃないことから、これがこの二人なりのコミュニケーションなのだった。

『はいはい任しとき。医療班はもうちょい先の区画に待機しとるか
らそつちまで運んだってな』

「了解。はやても頑張れよ」

『うん。ほなまたな』

指示を受け頷きと共に励ましの言葉を送ったナツキさんに、はやて

と呼ばれた少女が嬉しそうに笑いウィンドウを閉じる。静寂の戻った空間に、今度は溜め息が響いた。

「やれやれ、一週間ぶりに会ったのが任務中つても泣けてくるなあ…。二人にも後で顔出さないと…」

「あの…」

一つの決意を固めながら、ぼやきながらも飛翔し続ける少年に私は怖ず怖ずと話し掛ける。悪いかな、とは思ったけど、それでもどうしても言いたかった。

「ん？どした？」

「えと…、その…」

言葉に詰まる私をキョトンと眺めながら、しかし律儀に待っていてくれるナツキさん。深呼吸と共に気持ちを落ち着け、

「…私に、魔法を教えてください」

私の願いを、告げた。

これが私、神風アスカと彼、天城ナツキの出会いだった。

「…うつわ」

慌ただしく他の魔導師が出て行った後、ゆっくりと装甲車から降り

あたいの口からそんな言葉が漏れる。目の前ではデカイ建物
この世界、ミッドチルダ最大規模の空港が業火を上げて炎上して
いた。

「こりゃひどいつすねえ…。そりゃあたいが無理矢理引つ張り出さ
れる訳だ…」

二トガンナーとかサボタージュなんて呼ばれてるあたいの力が本
当に必要なから、だからこそその強制連行。さすがにこんなのを見て
しまった以上、のびのびと昼寝なんて出来る訳がない。

「正直働くのは不本意っすけど、人命が懸かってるんじゃしゃあな
いつすね。アルニカ、ラタトスク、やるっすよ」

《Set up》

両手のブレスレットに告げると同時、あたいはバリジャケットを
纏い空へと上がる。手に握った二丁拳銃が輝き、バズーカと見紛う
サイズに変形した。

《Load Cartridge》

《Model Ice》

両のデバイスが弾丸を 特注製の青い弾丸を装填する。

凄まじく強烈な、氷の力を込めた弾丸を。

「全弾当てるっすよ…!!」

《Full Burst》

引き金を引いた瞬間、蒼い輝きが弾けた。二つの砲口から放たれた優に百を越える弾丸が、燃え盛る空港目掛けて殺到する。燃え盛る業火が鋼の暴風を焼き尽くそうとして

完全に凍結した。

まだ全エリアの数十分の一程でしかないが、あたいの弾丸が命中した地点を中心に空港が完全に凍っていた。業火を封じる氷 見る者が見れば目を疑うような光景だろう。

「ふう、寒いつすね…。薄着は失敗だったかなあ…」

動きやすさを重視した薄手のバリアジャケットから、砲台固定時の重装備仕様に切り替える。やや重くなったが寒さには変えられない。スカートなんて爆発しろ。ジャージ万歳。

「へえ。面白いじゃない」

と、アホなことを考えていると、頭上から声が聞こえた。幼さが残る高い声。少女のものだ。一体誰かと思い上空を見上げようと

「いっちょ」

正面から、声が聞こえてきた。

「ダメだよー、遠距離型が他者の接近を許しちゃ」

恐る恐る視線を戻したその先にいたのは、十代半ばの少女だった。

銀色のロングヘア、鮮やかな赤い瞳。やや低めの身長に漆黒のゴスロリドレスを纏い、左手には十字架と翼を歪めて作られたような杖を握っている。

そして何より異質な、背に生やした巨大な漆黒の翼と、こんな惨状の中にながら楽しそうな笑みを浮かべた口元。

ありとあらゆる意味でこんな場所にいるとは思えない、まるで世界から浮いているような少女だった。

「なるほど。属性魔力を込めた弾丸^{カートリッジ}、か。面白いじゃない」

少女がアルニカとラタスクを眺めて呟いた一言に、思わずあたいは息を呑む。

エレメント・カートリッジ。従来の物とは違い属性魔力を込められた特注のカートリッジで、その特性上扱いが難しいが、それを扱うあたいは七種類の属性を操れる魔導師として地上本部に登録されている。その機構^{カラクリ}を一発で見破ったこの女、只者ではない。

「あんたは…、一体…」

「そうね…。スノウとでも名乗っておこうかしら」

あたいの絞り出した言葉に対し、ふざけた言葉を返す少女スノウ。SNOW^{スノウ}。即ち雪。雪…、ゆき…、ユキ…、っ!?

「まさか…、天城ユキ!？」

「ダメだなあ。こういう時は本名がわかってても突っ込まないのがマナーでしょ？」

曰く、百年先の技術を先取りした少女。曰く、歩く万魔図書館。曰く、固有結界保持者。曰く、測定不能のランクEX。

曰く、管理局最狂。

そんな化物みたいな存在が…、目の前の少女だとしても言うのか!?

「それ、マトモな方法じゃ使えないよね。自作?」

「ええ、まあ…」

興味津々に尋ねてくるユキさん　　もといスノウにぼそぼそと答える。あまり芳しくない答えだったのか、少女はむーと唸りながら杖を上げた。

「ネームレス、黙らせるわよ」

少女が呟いた瞬間、足元に漆黒の魔法陣が広がる。あたいの扱うミッド式　　八芒星を孕んだ円形でも、ましてやベルカ式　　頂点に円を抱き、内に剣十字を孕む逆三角形でもない。

それは、今まで誰も見たことがないような異質な魔法陣だった。頂点に円を抱いた三角形を基点に、囲むように配置された逆五角形。その頂点にも円が描かれ、その全てを囲んで更に円。円周から翼をあしらった模様が六つ展開され、見る者に畏怖と恐怖、神々しさを与える歪な魔法陣。彼女が編み出した、あらゆる魔法体系の利点を組み合わせた最高の、そして最強の魔法体系。彼女と兄、その親友にしか扱えない汎用性の低過ぎるその魔法。

天城式、その魔法陣。

「永久に凍てつく悠久なる凍土　　凍てつく地獄の名の下に
夢幻の眠りと安寧の闇を与えよ　　」

彼女が詠唱を始めた瞬間、世界が震えた。魔法陣から漏れ出した凍気が空気中の水蒸気を凍らせ、パラパラと雹が降り始める。本来、魔法陣から魔力が漏れ出すという現象は、魔力結合が未熟な魔導師が起こすもの。それは修業不足の証で、劣等生のレッテルを張られることもザラだ。

だが、彼女の場合は違う。何故なら

「凍えて眠れ　　」

そうやって魔力を逃がさなければ、あまりに膨大な魔力が弾けてしまうから！！

「　　コキユートス！！」

彼女が杖　　ストレージデバイス・ネームレスを振り下ろした瞬間、全てが凍った。炎上していた建物は氷のオブジェへと早変わりし、業火さえも揺らめきがそのままの形で瞬間冷凍されている。彼女が凍らせた範囲は、全体の五分の一にも及んでいた。

「んー、もーちよつと出力上げた方がよかったかなー」

全体の五分の一程度しか凍結させていないが、それはまだ取り残された人達の救出が確認されていないから。全力を出せば空港どころか半径数キロが氷の街になるであろうことは、彼女の不満げな口調からも窺える。

これが、EXの本気。

「ま、後ははやてにも頼めば行けるかな……。っと」

と、ぶつぶつ呟いていたスノウがおもむろに、あたしのデバイスを掻っ攫った。そのまま杖を宙に突き刺すと同時、周囲にコンソールが展開される。まるでキーボードを全包围に置いているかのようなうだ。

「え、ちょ……」

「ちょっと待つて。…………ん、出来た」

思わず呆気にとられるあたいを無視し、どこからともなく引つ張り出したコードをデバイスに繋いで何やら始めるスノウ。僅か数十秒程で作業を終えたと思ったら、二丁の銃を放り投げて来たので慌ててキャッチする。

「出力倍くらいに上げといたから、それで手伝ってちょうだい」

「は、はあ……」

どうやらあの短時間で構造を書き換え強化したようだ。数多ある通り名は決して伊達や酔狂ではないらしい。

神。

何故かそんな言葉が、自然と頭に浮かんだ。

「さ、後五分の四。避難の済んだブロックからガンガン凍らせてくわよ」

「…はい」

促すスノウに頷き、あたいは再びアルニカとラタトスクを構え直す。魔力伝達効率が上がった相棒デバイスと共に、人々を蹂躪する赤い悪魔を止めるべく宙を翔けた。

これがあたいたい、鳳ソラと彼女、天城ユキの出会い。全ての面倒事の始まりだった。

「あらあら、失敗したの？無限の欲望の名が泣くわよ？」
アンリミテッド・デザイア

薄暗いラボの中、一際高い位置に設置された椅子に腰掛け、私は眼下に佇む青年を見下ろす。紺色のスーツに白衣を着た青年はあらかじめ私の挑発に対し、薄ら笑いを浮かべることで答えた。

「まあそう言うな。元々レリックのようなエネルギー結晶体はとても不安定なものなんだ。そうそう上手く行ってしまうては面白いな
い」

「待たされる方の身にもなって欲しいわね。淑女レディを待たせていいのは彼氏だけ。おわかり？」

私がこの男といるのはあくまでとある研究の為。間違っても情など抱いていないし、六年も待たされれば聖人でもない限りさすがに苛立つだろう。

「しかし今の戦力ではまだ表立って動くことは出来んよ。その辺りの助力は期待してもいいのだろう？サクラ」

彼が私の名前を口にした瞬間、私は既に起動されたデバイス
十字架と翼を歪めて作られたような杖を顔面に突き付け、周囲を赤
紫の弾丸で取り囲んでいた。私の名前を呼んでいいのはあの子だけ。
少なくともこいつが口にしていいようなものではない。

「誰が名前で呼ぶことを許したのかしら？次はその首刎ねるわよ」

「これは失礼。ではなんと？」

命の危機に瀕しているにも関わらず、眼前の青年は顔色一つ変えな
い。人形のくせに…、いや、人形だからこそ、なのだろう。自分の
欲望に忠実で、それ以外はなにもかもがどうでもいいのだ。彼にと
っては。

「そうね…。ハルでいいわ」

桜は春に咲くもの。そんな単純な理由からセンスも何もない偽名を
作りそれを告げる。まあ、一時のものだし別に構いはしない。

「了解したよ。よろしく、ハル」

「精々もつと成果を上げることね。スカリエッティ」

握手を求め手を差し出す青年 スカリエッティを無視し、私は
背を向け歩き出した。馴れ合いは不要、それを一番わかっているの
はあいつ自身。白々しいことこの上ない。

（待っていないさい、ユキ ）

記憶の中に眠る少女 かつての研究仲間の顔を思い出し、私は拳を握りしめる。

（究極の魔法をこの手にして、あなたを迎えに行くから）

そう。私にあの子しかいないのと同様に、あの子にも私しかいないのだから。

「…やれやれ、彼女にも困ったものだ」

サクラ ハルが去った先を見遣り、スカリエッティは溜め息をつく。その表情は薄い笑みを浮かべたままで、全然困っているようには見えなかったが。

「まあいい。素体はあらかじめ出来ているんだ。後は上手く調整して行けば五年もせずに完成する」

気を取り直したように呟きながら彼は僕 生体ポッドに視線を遣る。中で眠る三人を見て笑みを浮かべ、彼もその場を後にした。薄く目を開きながら、僕は左右に目を走らせる。両隣の生体ポッドには、金髪の少女達が眠っていた。いずれ僕達は、彼の欲望を満たす為だけに使われ始める。そしてその日は、決してそう遠くはないだからせめて…、二人だけでも逃がさないと。僕が、名前も存在価値もない僕が、二人を守らなければ。

（その時は 僕に力を貸してくれるかい？）

眠りの闇に落ちて行きながら、自らの内に眠るそれに問い掛ける。無言の肯定か、はたまた否定か。答えは、なかった。

救われた少女。出会った少女。そして、再会を願う少女。出会っ

ずのなかった彼女達が舞台上上がった時、世界に大きな波紋が広がる。運命を狂わされ、しかしそれ乗り越えた少年と少女達が相對した時、物語はまた変わり始める。

夢。希望。欲。様々な想いは螺旋となって、新たな世界を作り出す。その先の未来を切り開くのは、強い意志と想いだから。だからまた、私達は力を手に取る。

壊れそうな世界を、また守る為に。

魔法少女リリカルなのはStrikers Another、始まります。

プロローグ（後書き）

まあ最初なんで軽めに。 え？いきなりカオス？言っちゃダメ（ry

ぼちぼち投下していく予定なんでよろしくですー。

二話までは出来てるので連日投下になるかも。

第一話「空への翼」 前編（前書き）

まさかの分割

ええ、調子乗ってたらこうなりました。反省はしてないけど後悔はしています。死亡フラグ的な意味で（オイではどーぞー）。

第一話「空への翼」 前編

小さい頃の私は、本当に弱くて泣き虫で。悲しいこととか辛いことにいつもうずくまって、ただ泣くことしか出来なくて。

「お父さん……!!お姉ちゃん……!!」

轟々と燃え盛る空港のロビーを、私は一人彷徨い続けていた。守られてばかりだった私は、こんな状況に慣れていなくて　　そもそも何事もなく育っていれば当然なのだが　　ただ泣きながら二人を探すことしか出来なかった。

と、恐怖から視野狭窄に陥っていた私は瓦礫に躓き、思いつ切り顔面から転んだ。擦りむいた膝からは血が流れ出し、全身は煤だらけだ。

「熱いよ……、痛いよ……、こんなのやだよ……、帰りたいよ……」

起き上がることも出来ずボロボロと涙を零し、ただひたすらに泣き叫ぶ。この状況から救い出してくれる、天使のような誰かを。

でも、現実是非情だった。

「誰か……、助けて……!!」

私に差し延べられた救いの手は、落下してくる天使の像という名の死だった。願った天使が死を連れてやって来るなんて、皮肉にも程があるだろう。息を呑んだ私は目を閉じ現世に別れを告げ

「よかった……、間に合った……」

ようとして、その声を聞いた。

「助けに来たよ……!!」

恐る恐る顔を上げた先には、桜色のリングに縛られ宙に浮く天使の像。

そして純白の衣を纏い、背に桜色の翼を持つ一人の天使の姿。

「よく頑張ったね、もう大丈夫だよ。安全な場所まで一直線だから……!!」

その天使　栗色の髪をツインテールにした少女は私を優しく抱きしめながら、そう言って安心させようと頭を撫でてくれた。温かな感触に母さんを思い出し、今までとは意味合いの違う涙が思わず込み上げて来る。

《Upward clearance confirmation .
A firing lock is cancelled (上方の
安全を確認。ファイアリングロック、解除します)》

少女の左手に握られた杖の声と共に、私を囲むようにバリアが張られた。少し離れた場所に移動した少女が天井を睨むと同時、足元に魔法陣が展開される。描かれるのは円で囲んだ八芒星、色は翼と同じ桜色。

「一撃で地上まで貫くよ……!!」

《All Right , Load Cartridge . Bust

er Set》

静かな、しかし強い意志を秘めた主人^{マスター}の声に応え、金色の弾丸を排出した杖から翼が展開される。光り輝く羽が舞う中、少女は杖を斜め上目掛けて構え、魔力を集束させていく。杖を囲むように環状魔法陣が展開、集束した魔力を一点に集中。集められた力がその限界を迎えようとした瞬間、

「デババババババ、バスタアアアアッ！！」

桜色の閃光が、弾けた。

少女の放った砲撃が一筋の光となって、固い天井を撃ち貫いたのだと気付いた時には、既に私は彼女に抱き抱えられ星空を舞っていた。

「こちら教導隊01、エントランスホール内の要救助者、女の子一名を救助しました」

「ありがとうございます。さすがは航空魔導師のエース・オブ・エースですね」

「西側の救護隊に引き渡した後、すぐに救助活動を続行しますね」

「お願いします」

炎の中から助け出してもらって、連れ出してもらった広い夜空。冷たい風が優しく、抱きしめてくれる腕が温かくて。助けてくれたあの人は、強くて、優しく、かっこよくて。泣いてばかりで何も出来ない自分が情けなくて。

だから、私は

「…バル、スバル!!」

「…え？」

と、過去の回想から引き戻され、思わず私は周囲をキョロキョロと見回す。背後に振り返った先には、一人の少女がいた。オレンジの髪をツインテールにした十六歳の少女、同期のティアナ・ランスタ―だ。

「どうしたの？ぼーっとして」

「ううん、なんでもない」

アンカーガン 自身のデバイスである拳銃を弄りながら問い掛けてくるパートナーに答え、私もアップを始めた。念入りに準備体操をし、体を解したところでシャドーボクシング。基礎の基礎から一つずつ確かめるように、正確に素早く打ち込んでいく。

「ただでさえおんぼろローラー使ってるのに本人までダメになっちゃ笑えないわよ」

「ひどいよティア。ちゃんと油もさして来たから大丈夫だって」

私の履いているローラーを一瞥しながらのセリフに反論しながら、ワンセット終えた私はティアに近付く。ちょうどデバイスの調整が完了したようで、小さなディスプレイを展開する。そこに表示されたデジタル時計、分と秒がゼロになった瞬間

『おはようございます。魔導師試験の受験者さん二名、揃ってるみ

たいですね。』

宙に大きなディスプレイが展開し、二人の少女が映し出された。今喋った方は青みを帯びた長い銀髪に、濃い青の瞳。分割されたもう半分に映っている少女は銀色のロングヘアに赤い瞳。どちらも陸士部隊制服である茶色いスーツを着ていることから、今回の試験官であることが窺えた。

『確認するぞ。時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士。保有している魔導師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないな?』

「はいっ!!」

「間違いありません」

試験前のお約束として私とティアの情報について確認するもう片方の少女の声に、二人共元氣よく答える。やや緊張して声が硬くなっているのが自分でもわかった。大丈夫、きっと動いているうちに自然体になれる。だから落ち着け、スバル。

『…照会完了。本日の試験官を務めるリインフォース二等空尉だ。よろしく頼む』

『同じくリインフォース? シヴァイ 空曹長です。よろしくですよー』

「「よろしく願います!!」」

一通りの前振りのな確認を終え、試験官である二人、リインフォー

ス二等空尉とリインフォース？空曹長に二人揃って敬礼。同じ名前なのがややこしいしちょっと気になったけど、いよいよ本番が始まる。

私はあの時、生まれて初めて、心から思ったんだ。泣いてるだけなもの、何も出来ないのも、もう嫌だって。

強くなるんだ、って。

スバルとティアナが試験を受ける会場である、臨海第八空港近接廃棄都市街。その上空を飛ぶ一機のヘリに、二人の少女が乗っていた。

「お、早速始まってる。リイン達もちゃんと試験官してるし大丈夫そうだな」

全開にしたハッチから身を乗り出して眼下を見遣りそう呟くのは、茶色のショートカットに赤と黄のヘアピンを付け、リインフォース達と同じ茶色いスーツを着た少女。時空管理局二等陸佐、八神はやてだ。自らの家族である銀髪の少女達の仕事ぶりに頬を緩め、ニコニコと微笑んでいる。

「はやて、ドア全開だと危ないよ。モニターでも見られるんだから」

と、奥の座席に座ったもう一人の少女が、苦笑いと共にそう言った。腰まで伸ばした金髪の先端を黒いリボンで縛り、黒いスーツを着た彼女はフェイト・テストロツサ・ハラウン。はやてと同じ年の十九歳で、時空管理局本局執務官という役職に就いている。

「はい」

十年來の幼馴染である少女に窘められ、はやては笑みと共にハッチを閉めた。同時にフェイトが宙にディスプレイを展開し、暗さを取り戻した室内に明かりを点す。

「この二人が、はやての見付けた子達だね」

「うん、二人共なかなか伸び代がありそうなええ子達や」

二人がディスプレイに映し出された少女達　青いショートカットの少女とオレンジのツインテールの少女を見遣りながら、二人の情報が記載されたデータに目を通していく。

「…へえ、いい目してるじゃん。二人共」

と、ザッと流し読みしている二人の背後から、一人の青年が顔を出した。

「え、な、ナツキ君!？」

「よう。十日振りだな」

あわてふためくはやてをよそに、その青年が二人の正面に回って来た。跳ねた漆黒の髪と同色の瞳、フェイトのものと同じ黒いスーツを着た彼は天城ナツキ。格好からわかるように時空管理局本局執務官だ。

「試験終わったのがついさっきでさ。ギリギリだったからワープして来た」

ワープ。その一言で二人は頷きと共に納得した。重力を操る彼はその特性上空間に干渉することが出来る為、転移とは違った空間跳躍が可能なのだ。魔法陣が展開される転移魔法ならまだしも、空間跳躍ではさすがに二人でも気付けない。さっきまで二人しかいなかったへりの中に急に彼が現れたのも納得出来る。

「お兄ちゃん、久しぶり」

「おう、元気そうで何より」

義理の兄妹にして恋人でもあるフェイトの言葉に、ナツキは頭を撫でながら笑顔で答える。たったそれだけで満面の笑顔を浮かべるフェイトに苦笑するはやての陰から、一人の少女が現れた。膝近くまで伸ばした黒髪に黒い和服、結んだ端が腰まで届く程の赤いリボンを付けた八歳くらいの少女。ナツキの使い魔である龍神、ミサオだ。

「主よ、とりあえず座らぬか？ なんだかんだで結構疲れておるのじやが」

「さっきまでめっちゃはしゃいでただろうが。まあいいけど」

試験官として先程まで戦っていた少女のセリフに苦笑いしながら頷くと同時に、ミサオの背後にいたもう一人の少女に手招きする。一部を括った腰まである朱色の髪が特徴的な少女。手に握った串から焼鳥をぱくつく彼女は神風アス力。四年前の空港火災でナツキに命を救われ、その折に両親を亡くし彼に引き取られた少女だ。

「アス力も久しぶり〜。三日振りやな」

ミサオの隣、はやての正面に座ったアス力に声を掛けると、お辞儀

と共に焼鳥を差し出して来た。口下手な彼女なりの微笑ましいコミユニケーションに頬を緩ませ、五人で仲良く焼鳥を食べる。

「で、ナツキ君。結果は？」

「言うまでもないだろ？文句なしで合格、見事『七人目』に抜擢だ」

はやての問いに試験結果　神風アスカの適性試験の結果を告げ、ナツキはアスカの頭を撫でる。本人もブイサインで答え、はやては満足そうに頷いた。

「アスカ、おめでとう」

「…ナツ兄やフェイトが、色々教えてくれたから。四年間、ずっと」

労いの言葉を掛けるフェイト　アスカの魔法の先生に頭を下げ、感謝の想いを告げるアスカ。家族みたいな関係でもきちんとそう言える辺り、しっかりと育てられたことが窺える。

「あれ、でも『八人目』は？確か隣の会場でユキちゃんとシオンちゃんて担当してへんかったっけ？」

「あいつなら終わった瞬間帰った。能力は高いんだよなあ…、やる気ないのに…」

ふと、はやてがこの場にいない三人　十年来の幼馴染二人と受験者がいないことを不信に思い尋ねるが、ナツキは溜め息と共に事の顛末を告げる。受験者である『八人目』　蒼い髪の少女の脱力した姿を思い返し、納得したように苦笑するはやて。確かにあの少女なら、さつさと試験を終わらせて即帰宅くらいやりかねない。

「で、今日の試験の様子を見て、行けそうなら正式に引き抜くんだっけ？」

「直接の判断はなのはちゃんにお任せしてるけどな。部隊に入つたらなのはちゃんの直接の部下で、教え子になる訳やからな」

気を取り直したナツキの質問に、はやては頷きながらウィンドウを展開する。それを見て納得したナツキは宙を仰ぎながら、この試験をどこかで見ているもう一人の彼女に思いを馳せた。

《There is no life response within the range. There is no dangerous object either. Check off the course was finished (範囲内に生命反応、危険物の反応はありません。コースチェック、終了です)》

「ん。ありがとう、レイジングハート」

広い空き部屋でウィンドウを展開し、一通りのチェックを済ませた胸元の相棒が声を上げた。礼と共に答えながら、私は更に複数のウィンドウを開き状況を整理していく。

「観察用のサーチャーと、障害用のオートスフィアも設置完了。私達は全体を見てようか」

《Yes, My Master》

無人の部屋に二人の声がこだまする中、私達は画面を注視する。はやてちゃんが見込んだ二人の力…、見せて貰おうかな。

『二人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。あ、もちろん破壊しちゃダメなダミーターゲットもありますからね？』

『妨害攻撃に注意しつつ、全てのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指すのがこの試験の概要だ。何か質問はあるか？』

複数展開されたウィンドウがスライドショーの如く動き、試験の大きな流れが説明された。質問は特にないが、念の為にティアナに目配せする。

「…ありません」

「ありません！！」

しばし思考の後そう結論付けたらしく、スバルもそれに追随する。ティアがないと思ったなら、私はそれを全力で支援する。コンビ故の、無条件の信頼。とか言つと、ティアは照れて反論するだろうけど、なんて考えがスバルの頭を過ぎった。

『では、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ』

リインフォース達のウィンドウが消えると同時、信号機を模したウィンドウが出現した。右端の一つが消失すると共に電子音が響き、

二人揃って息を呑む。

「レディ……」

二つ。ティアナの掛け声と共に前傾姿勢を取り、互いにいつでも飛び出せるようにする。全身に力を込め、最初からトップスピードを出せるように。

そして三つ目が消え、STARTの文字が浮かび上がった。

「「ゴーツー!!」」

それとほぼ同時に二人が叫び、全力で駆け出した。試験の開始を受けて、所変わってヘリ内にもわかにざわめき出す。今後を担う魔導師達、その力量を見極めんと画面を注視する。

ティアナがアンカーガンのツマミを捻り引き金を引くと同時、下部に取り付けられた射出口からワイヤー付きの弾丸が発射される。廃ビルの上部に食い込んだ弾丸はオレンジ色の輝きと共に魔法陣を展開、その身を固定する。

「スバル!!」

「うんっ!!」

ティアナとスバルが二人三脚のように互いの腰を抱きしめると同時、アンカーガンの引き金を引く。

瞬間、二人が飛んだ。

否、正確には違う。射出したワイヤーがアンカーガンに巻き取られ

ているのだ。空を飛べない、陸戦魔導師だからこそこのアイディアは、飛べない故の移動の遅さという弱点をカバーしていた。

「中のターゲットは、私が潰してくる！！」

「手早くね」

「オッケー！！」

コンビ故の短時間で作戦会議を済ませ、ティアナがスバルをビル内に思いつ切り放り込む。スバルは両手で顔を守りつつ、窓ガラスを割ってビル内に侵入した。

その音に反応したスフィアがバリアを展開しつつ、侵入者たるスバルを迎撃。青いレーザーを雨のように叩き込む。

だが、それに当たってくれる程スバルは甘くない。ローラーを生かした機動力でレーザーをかわし、勢いそのままに壁を疾走する。かつて自らを救ってくれた白い天使に憧れ、四年の歳月を修業に費やして来た少女の力は、そんな曲芸染みた行動を可能にしていた。

壁を蹴って跳躍すると同時、勢いの乗った左拳をスフィアに叩き込む。爆砕するそれに目もくれず、遠心力を生かし右の後ろ回し蹴りでもう一体を破壊。爆煙を切り裂きながら離れたもう一体目掛けて駆け出す。

スフィアもレーザーを放ち応戦するが、速いが故にその動きは直線的。四年前ならいざ知らず、今のスバルに当たるようなものではない。

「ロードカートリッジ！！」

スバルが叫ぶと同時、右手に装備されたナツクル　リボルバーナツクルの機構が動いた。カバーがスライドし弾丸が装填され、撃

鉄のような音を響かせる。

「リボルバアアアア！」

拳を握りしめると呼応するように、ナツクルのギア　　ナツクル
スピナーが動き始めた。二つのそれは互いに逆向きに回転し主人の
思いに応え、敵を撃ち貫く力となる！！

「シューウウウツッ！！」

振りかぶった拳を眼前に叩き込むと同時、青い光が弾丸となって大
気を切り裂き、スフィアを一撃で粉碎した。見た目近接戦しか出来
なさそうな彼女だが、飛び道具の一つや二つくらい持っている！！
右手を振って攻撃の余韻を振り払い、スバルは階下目掛けて駆け出
した。彼女がビルから脱出するまでに両の指では利かない程の爆音
が響き渡ったのは、もはや言うまでもないだろう。

一方スバルと別れビルの屋上にいたティアナも、己のやるべきこと
と向かい合っていた。隣に建っているビルの窓から見えるターゲット
トを数え、撃墜に必要なだけの魔力を練り上げていく。

（落ち着いて、冷静に）

その一言を頭に染み渡らせ、足元に魔法陣を展開する。八芒星を孕
んだ円　　ミッド式の魔法陣が、銃口に魔力を集束させていく。
破壊に十分なだけの魔力を確認したら、後は引き金をひたすらに引
いていく。百発百中、全弾命中、そんな言葉すら生温い程に、彼女
の弾丸は迅速かつ正確にターゲットを撃ち抜いていく。

全てのターゲットを破壊後、新たな気配を感知。破壊したことで今まで陰にいた新たなターゲットが窓際に移動して来たのだと気付いた瞬間、既にティアナは銃口を向けていた。ミスショット狙いであるうダミーに当てないように、標的たるターゲットを全て破壊していく。

今度こそ全ての破壊を確認したティアナは、再度駆け出し屋上から身を投げ出した。風を切る感触に僅かな心地好さを覚えながら、再びワイヤー付きの弾丸を射出する。歩道橋に食い込んだワイヤーの巻き取りを途中でやめることで、振り子のように長距離を一気に移動。スバルも大概な身のこなしだが、ティアナも負けてはいない。バックする寸前で弾丸を抜いて無事着地、ワイヤーを巻き取りながら三度駆け出す。

「いいタイム!!」

「当然!!」

途中で合流したパートナーと数言交わし、次のエリア目掛けて加速した。

「ん、いいコンビだね」

「せやけど、まだまだ難関は続くよ」

二人の健闘ぶりをフェイトが素直に称えるが、はやてはニヤリと笑って水を差す。がしかし、今回はかりははやてと同意見だ。

「特にこいつが出て来ると、受験者の半分以上が脱落することにな

る最終関門。大型オートスフィア」

そう言つて俺が展開したのは、球体の大型スフィア。パツと見ただけでも大人と同じくらいの大きさをしており、温い攻撃なら一発や二発では落とせないであろうことは想像に難くない。

「今の二人のスキルだと防御も回避も難しい、中距離自動攻撃型の狙撃スフィア、か」

「…私なら、勝てる」

「むにゃむにゃ…。おお…、空飛ぶパフェじゃ…」

「どうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所やな」

四者四様の反応を見せる少女達　誰とは言わないが約一名は寝ているが　を見遣りながら、俺は再びモニターに視線を戻した。

第一話「空への翼」 前編（後書き）

うん、CM部分で区切ってますので後味悪い終わりかもですね。ごめんなさい。

後編は明日投稿しますのでよろしくです。

第一話「空への翼」 後編（前書き）

はい後編です。

前置きはめんどげフンゲフンなので抜きで（オイ
ではどーぞー

第一話「空への翼」 後編

瓦礫の陰に隠れて攻撃をやり過ごしながら、あたしは相手の隙を窺う。スフィアも所詮プログラム。複数同時に攻撃されていても、それらの隙が重なる瞬間は存在する。これはあくまで試験であって、クリア不可能な無理難題ではないのだから。

射撃がやんだ僅かな静寂を察知し、あたしは引き金を引いた。三連続で放たれた弾丸がスフィアを破壊したのを確認しつつ、物陰に隠れ銃身を開く。ワイヤー射出用を除いた二つの銃口からカートリッジを排出後、ポーチから取り出した新たなカートリッジをセット。その所用時間僅か二秒。何度も繰り返して来た補給作業なのだから、体が自然と覚えている。ある意味出来て当然のアルゴリズムだ。

「うおおおおっ!!」

向こうのスバルもレーザーの雨をかわしつつ、瓦礫を踏み台にして宙に舞う。当然レーザーで迎撃されるが加速を付けた右拳でそれを相殺。崩したバランスを別の壁を蹴ることで立て直し、距離を詰めつつ右足を振るう。サッカーボールのように吹き飛ばされ爆発するスフィアを見届けながら、スバルは悠々と合流した。

「よし、全部クリア」

「この先は？」

「このまま上。上がったら最初に集中砲火が来るわ。オプティックハイド使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺。やるわよ」

小休憩しながら互いにカートリッジを装填、次の戦局と作戦を手早

く伝える。難関とも言えるエリアだが、対策くらい考えて来た。あたしとスバルなら、やれるはず。

「了解!!」

スバルの頼もしい返事に頷き、あたしは天井に空いた穴を見遣る。そこに上がれば集中砲火を受けることは間違いない。なら…、

廃棄街の中心にある、高速道路のようにも見える立体道路。そこに設置されたスフィア達は、プログラムに従い周辺を索敵していた。残り時間から察するに、受験者は間もなくやって来る。センサーレベルを最大に上げ、警戒を怠らず探索

来た。

天井にワイヤー付きの弾丸が食い込み、オレンジ色の魔法陣が展開される。飛べない陸戦魔導師なら、そうやって上がって来るしかない。ワイヤーの巻き取り音を聞きながら、スフィアはエネルギーをチャージ。上がって来た瞬間を狙い、集中砲火を叩き込むべく機を窺う。

瞬間、視界にワイヤー以外の物体を捉えた。

移動中なのを鑑みて、狙いをやや上方にセット。連携の取れた攻撃で、受験者を穿つべくレーザーを発射する。

が、レーザーが穿った先にあったのは人体ではなく銃身だった。ティアナのデバイス 唯一の武器と言えるアンカーガンである。

だが、持ち主は上がって来ない。

フェイトとはやて、アスカはそれを見て疑問を抱くが、別々の地点にいるはずのナツキと彼女は、申し合わせたようにニヤリと笑う。まるで、この状況を予見していたかのように。

『5!!4!!』

と、ナツキが映し出した別の映像に、不可解な現象が起きていた。何もいない地面が火花と僅かな煙を上げ、スフィア達目掛けて移動しているのだ。

まるで、ローラーが何かを使っているかのように。

『3!!』

そのまま火花が消えた瞬間、スフィアの一つが爆砕。再度の火花を上げ加速すると同時、透化魔法の解けたスバルがいきなり出現する。なんのことはない、別地点から回り込み、背後から奇襲を仕掛けたのだ。

『2!!』

遅れてスフィアも事態を理解、慌てて振り向き迎撃するが、スバルには当たらない。必要最低限の攻撃を防ぎつつ、カートリッジを口―ド。爆発的に増した魔力を右手に集束させ、

『1!!』

跳躍する!!

「ゼロ!!」

瞬間、スバルの反対側。スフィアを挟撃するようにして、ティアナの姿が浮かび上がる。足元には魔法陣、宙には三つの魔力スフィア。デバイスがなくとも、簡単な魔法ならば扱える。ナツキや彼女なら、そのくらいのことは可能だ。

「クロスファイアアアアア!!」

ティアナが右手を振りかぶると同時、^{スフィア}光球が輝きを増す。端から見てもわかる。これから撃つ、ということだ。

「リボルバアアアア!!」

タイミングを合わせるように、スバルも左手を添えた右手を突き出す。カートリッジにより得た大量の魔力で、一発の弾丸を生成する。

「シューウウウウツツ!!」

二人の声がシンクロした瞬間、四つの弾丸が同時に放たれた。青き光とオレンジの閃光がスフィアを穿ち、一瞬で敵を全滅させる。

「なるほど…。確かにこれは伸び代がありそうだね」

「そやる?」

それをモニターで見守っていたフェイトが納得したように呟き、その二人を見繕って来たはやてが自慢げに同意する。そんな二人に苦笑しつつ、ナツキはモニターに視線を戻した。

「残るは最終関門か…。どう来る？二人共」

「イエーイ！！ナイスだよティア、一発で決まったね！！」

「ま、あんだだけ時間があればね」

攻撃して来ないタイプのターゲットを破壊しながら浮かれたように言うスバルに答えながら、あたしはアンカーガンを拾い上げる。ワイヤーを巻き取りながら状態チェック。うん、問題なさそう。

「普段はマルチショットの命中率あんま高くないのに。ティアはやっぱ本番に強いなあ」

「うっさいわよ。さっさと片付けて、次に」

なおもはしゃぐスバルを一喝すべく振り返った瞬間、あたしの視界に在ってはならないモノが映った。先程破壊したスフィアのから立ち上る煙の陰、桜色のバリアを纏ったそれは…！！

「スバル防御！！」

叫ぶと同時にダッシュ、スバルをレーザーの射線から間髪退かず。そのまま狙いを逸らすべく駆け出し銃口をスフィアに向け

「がつ！？」

ようとして、瓦礫によって生じた段差に躓き思いつ切り転ぶ。迂闊

だった…、廃棄街なんだから足元が不安定でもおかしくないのに…！！

スバルが心配そうな声を上げる中、転がりながらレーザーをかわし、膝立ちになって弾丸を発射。流れ弾で観察用のスフィアを巻き添えにしつつも辛うじてターゲットを破壊。しばしの静寂を取り戻した。

「…ん、なんや？」

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだったけど…」

不意にノイズと共に何も映さなくなった一つのモニターを見遣りながら、フェイトとはやてが首を傾げる。別地点の彼女もそれに気付いたようで、ウィンドウを操作しながら現状把握に努める。

「トラブルかなあ…。リインフォースさん、リイン、一応様子を見に行くね」

『はいです。お願いします』

『気を付けてな』

一応試験官の二人に声を掛け、ウィンドウを消し窓から空を仰ぐ。もし大変なトラブルが起きたのならば、迅速に駆け付けられないといけない。ない。

《Am I set up? (私もセットアップしますか?)》

「そうだね。念の為お願い」

《All Right・Barrier Jacket stand
ding up》

相棒の問いに何が起きるかわからない故そう答え、彼女は桜色の光を纏った。

「ティアっ!!」

「騒がないで。なんでもないから」

慌てて駆け寄って来たスバルに答え、ティアナがよろよろと立ち上がる。危なっかしいその様子から、足に相当の激痛が走っているであろうことは想像に難くない。

「ティア…、ゴメン、油断してた」

「あたしの不注意よ。あんたに謝られると反ってムカつくわ。走るのは無理そうね…。最終関門は抜けられない。あたしが離れた位置からサポートするわ。そしたら、あんた一人でゴールに行ける」

悔悟の念に囚われるスバルの謝罪をバツサリ切り捨て、ティアナは冷静に状況を分析する。その末に叩き出した結論は、スバルにとつてあまりにも残酷過ぎる答えだった。

「ティア!!」

「っさい!! 次の受験の時は、あたし一人で受けるっつってんのよ

「!!」

「次って…、半年後だよ!？」

「迷惑な足手まといがいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよ。わかつたらさつさと…」

半年。その遅れが将来的にどれだけの損失を生み出すか。それを毎日必死に頑張っているティアナが知らない訳がない。強気で素直じゃない相棒の言葉に思わず涙が込み上げて来る。

「ほら早く!!」

「ティア。私、前に言ったよね。弱くて情けなくて、誰かに助けて貰いっぱなしな自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入った。魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助の仕事に就いた」

知ってるわよ。聞きたくもないのに何度も聞かされたんだから。そう言って脈絡のない話を始めたスバルに、不審げな目を向けるティアナ。ティアナとはずっとコンビだったから、彼女がどんな夢を見ているか、魔導師ランクのアップと昇進にどれくらい一生懸命かもよく知っている。だから、だからこそ、

「こんなところで、私の目の前で、ティアの夢をちよつとでも蹟かせるのなんてやだ!! 一人で行くのなんて、絶対やだ!!」

「じゃあどうすんのよ!? 走れないバックスを抱えて、残りちよつとの時間でどうやってゴールすんのよ!?」

駄々をこねるスバルに対し、ティアナが遂にキレた。動けない自分を庇って、五分足らずで最後まで辿り着ける訳がない。そう告げるティアナの瞳には、諦めの色が見て取れた。だが、

「裏技……。反則取られちゃうかもしれないし、ちゃんと出来るかもわからないけど、上手く行けば二人でゴール出来る……！」

「……ホント？」

スバルの言に僅かな希望を抱いたティアナが尋ねるが、当の本人は自信なさ気にぼそぼそと、ちよつと難しいとか、ティアナにも無理してもらうとか、よく考えるとやっぱり無茶などと言い始め、そんな様子を見ているティアナの苛立ちゲージは限界を越えた。

「だあああああつ……！イライラする……！ぐちぐち言っても、どうせあんたは自分の我が儘を通すんでしょ！？どうせあたしは、あんたの我が儘に付き合わされるんでしょ！？だったらはっきり言いなさいよ」

スバルに掴み掛かりながら、煮え切らない態度を一喝するティアナ。策があるのなら、可能性があるのなら、やるだけの価値はある。口ではなんのканの言っているても、スバルのことを信じているから。

「二人でやれば、きっと出来る。信じて、ティア」

スバルの真っ直ぐな瞳と言葉に頷き、ティアナは時計を表示させる。残り時間三分四十秒。あまり余裕はない。二人は顔を見合わせ、作戦を話し始めた。

「…あ、出て来た」

サーチャーが破壊されてからしばらく動きがなかったのだが、ようやくティアナが出て来た。トラブルかと思いき緊張していた機内も、少し落ち着いてきた空気に包まれる。

ティアナは一心不乱にゴール目指して駆けているが、それがやすやすと許すはずもなく。最終関門大型オートスフィアが、遂に動き始めた。双眼鏡のようなスコープでティアナをロックオン。放たれた青いレーザーが窓ガラスを突き破り、ティアナ標的目掛けて突っ走る。

ティアナはそれを見上げ表情を厳しくしたものの、無視して加速。レーザーが着弾し、青い爆発と共に爆音を奏でた。

「直撃!？」

「まさか。違う」

はやての言葉をナツキが笑みと共に否定し、画面を見るように促す。そこには相変わらず走り続けている、傷一つないティアナの姿があった。再度ティアナをスコープに捉えたスフィアがレーザーを放つが、ティアナはそれを必要最低限の動きで避けつつ、ひたすら前へと進んでいく。

「高速回避…? いや、ちやうな」

「あの子…、ティアナは罠」

「というとは…」

無傷のティアナを不審に思ったはやての言葉をフェイトが遮り、は

やてがもう一つの可能性に思い当たる。そう、それはレーザーの一発がティアナに直撃した瞬間、彼女の姿が消えた。同時に近くの物陰から、有り得ないことに二人のティアナが駆け出す。フェイクシルエツト 単体、或いは複数の幻影を発生させる高位幻術魔法。攻撃が直撃すると消えてしまうが、肉眼や簡易センサー類では見抜けない精度を誇るティアナの十八番魔法だ。

『これ無茶苦茶魔力食うのよ…。あんまり長く持たないんだから…、一撃で決めなさいよ…。でないと、二人で落第なんだから…』

『うん!!』

物陰に隠れ幻影のコントロールに集中するティアナの念話を受け、ビルの屋上に立つスバルは静かに頷く。足元には既にベル力式内に剣十字を孕み、頂点に円を抱いた三角形の魔法陣を展開している。

私は空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃もない。出来るのは全力で走ることと、クロスレンジ接近戦の一発だけ。だけど、決めたんだ。あの人みたいに、強くなるって。誰かを、何かを、守れる自分になるって。

「ウイングッ、ロオオオオドッ!!」

絶叫と共に右拳を足元に叩き付けた瞬間、魔法陣をスタート地点に青い光が矢となって空を翔けた。環状魔法陣のようなデザインが成されたそれは一筋の道となり、大型オートスフィアの陣取るビルの壁に突き刺さる。

そのままスバルはクラウチングスタートの姿勢になり、ローラーを全開で回す。一瞬で乗り込み、一撃で仕留める。その為に必要な速度を得る為、限界までギアを上げていく!!

「行つくぞおおおおおっ！！」

右拳を振りかぶってカートリッジをロードした瞬間、スバルが消えた。全力全開でウイングロードを駆け抜け、

「でええええあああああっ！！」

ビルに右拳を叩き込むっ！！

破碎した瓦礫を弾き飛ばし爆煙を切り裂き、全身のバネを使い加速した剛碗^{ナックル}を全力でぶつける！！

が、直前で桜色のバリアが展開され、渾身の一撃は僅か数センチのところで阻まれた。

「うっうっおおおおあああああっ！！」

だが、ここで引く訳にはいかない。届かないなら、貫けばいい。あの人みたいに、あの人みたいに、全てを撃ち抜く力を！！

カートリッジを二発ロードし、バリアに指を食い込ませていく。圧力は面より点の方が強い。拳がダメでも、指ならば。

貫いた！！

スバルはそのままバリアを掴み、ひきちぎるようにして粉碎する。桜色の破片が舞い散る中、一瞬の隙を捉えたスフィアのスコープから青いレーザーが放たれた。

咄嗟にスバルは両手をクロスさせ防御。勢いそのままにバク転し、後ろに下がり距離を取る。

スバルは体勢を立て直すが、先の爆煙のせいでスフィアは未だ攻撃してこない。隙を見て取ったスバルは足元にベルカ式魔法陣を展開、

カートリッジを二発ロード。

「一撃、必倒おおっ!!」

両手で練り上げた魔力スフィアを環状魔法陣と共に左手の先にセツト。右拳にも環状魔法陣を纏い、ナツクルスピナーを回転させ魔力を集束させていく。

あの人への憧れから自力で編み出した、近距離特化の砲撃魔法。今のスバルが放てる、最高の攻撃魔法。その名は

「デイバイイイイン、バスタアアアアアッ!!」

あの人と、同じ。

リボルバーナツクルア

右拳を光球に叩き付けた瞬間、青い光が魔力の奔流となって突っ走った。それは竜巻の如く一直線に宙を翔け、最終関門と謳われる大型オートスフィアを貫通、爆砕させる。

『やった!?!』

『なんとか…』

荒い息を整えながら、ティアナの問いに答えるスバル。約束通り一撃で片付けたとはいえ、消耗が激しいし時間もあまりない。

『残り、あと一分ちよい!!スバル!!』

『うんっ!!』

急かす声に頷きながら、スバルは相棒ティアナを拾うべく駆け出した。

試験会場である廃棄街の高速道路、その最奥に二人の少女の姿があった。通過確認用と思われるゲートの傍に青みを帯びた銀髪の少女が、近くの崩れたビルの屋上に銀髪の少女が立っている。

「……………あつ、来たですね？」

「…そのようだな」

青みを帯びた銀髪の方　　リインフォース？の呟きに答え、リインフォース　　もう一方の少女が道路の先に視線をやる。ティアナを背負ったスバルが火花を散らす程のスピードを出して、こちら目掛けて全力疾走していた。

「あと何秒！？」

「…十六秒！！まだ間に合う！！」

スバルに答えると共にティアナがアンカーガンの引き金を引く。ゴール前に設置された最後のターゲットをオレンジ色の弾丸が穿ち、リインフォース？が満足そうに頷く。

「うむ。ターゲット、オールクリアだな」

「魔力…、全開っ！！」

リインフォースが呟く中、スバルは叫びと共に全ての魔力をローラーに回し加速。もはや炎上レベルの火花を散らしながら、全速力で

ゴールを目指す。

「ちょ、スバル！！止まる時のこと考えてるんでしょっねえ！？」

「え！？………ああっ！！」

「嘘！？」

ティアナに指摘されたスバルが数秒の思考の後、その問題点にぶつかってしまふ。そう、あまりにも焦り過ぎた故に、止まる時のことを全く考えていなかったのだ。かなりの速度が乗っている以上、止まるにもそれなりの距離をオーバーランしなければならぬが、ゲートから十メートルも進めばそこは瓦礫の山だ。このまま激突すれば、大怪我どころでは済まない。

「あ、なんかちょいやバですう」

遠くから見守っていたリインフォース？も、騒ぎ始めた二人に何やら不穏なものを感じたようだ。リインフォースも屋上から飛び降り移動するが、既に二人はゲートをギリギリのタイムで通過していた。今の二人の速度は乗用車にも劣らない。減速が間に合わない以上、二人は騒ぎながら激突を待つしか出来ない。

「んー、アクティブガード…、ホールディングネットもかな」

《Active Guard with Holding Net》

「グラビティフォール…、で十分か。アクセル」

《Gravity Fall》

が、それを見守っていた人物が二人。白き少女と黒き少年が、別々の場所で同じ目的の為に言葉を紡ぐ。スバルとティアナが激突する瞬間、桜色と銀色の光が弾けた。

フェイトとはやてが上空から心配げに見守る中、輝きが薄れ徐々に状況が明らかになっていく。

六角形と長方形を足して割ったような形に六個のミッド式魔法陣が展開され、その間に桜色の網が発生している。更に中心に白のベルカ式魔法陣が展開し、木の枝のような緩衝材が十本程生えている。スバルは網に、ティアナは緩衝材に、それぞれしっかりと受け止められていた。

「もおおおお！二人共、危険行為で減点ですう！！」

そんな中、柔らかき支柱を設置した張本人である試験官、リインフ
緩衝材
オース？が空から舞い降りた。金の剣十字が描かれた蒼い魔導書を右手に携え可愛い声で説教をするが、スバルとティアナには聞こえていない。何故なら

「ちっさ…」

リインフオース？の身長がとても小さく、僅か30センチ程であったからだ。今までは映像越しだから気付かなかったが右手の魔導書もしっかりとミニチュアサイズで、間近で見るとまるで人形のようにだ。

「全くもう！！」

「にやはは、まあまあ」

一通り言い終え気が鎮まったのを見計らったように、タイミングよくこの場にいない者の声が割り込んで来る。四人揃って見上げた先には

「ちよつとビックリしたけど、無事でよかった。とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

純白の衣を纏い、栗色の髪をツインテールに結び、左手に杖を携えた少女だった。天使のよう、とはその場にいた全員が抱いた感想であらう。

「リインフォースさん、リインの付き添いありがとうございます」

「大したことはない。先代として二代目にはしっかりして欲しいしな」

スバルとティアナを宙に浮かせ安全な体勢にしつつ、少女はリインフォースに頭を下げる。銀髪の少女は笑みと共に、気にするなと答えを返した。

「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官出来てたよ」

「わあい！！ありがとうございます、なのはさん！！」

反対側に浮かぶリイン　リインフォース？にも劣いの言葉を掛けると、彼女は外見相応に無邪気に喜んだ。微笑ましい光景に笑みを零し、なのはと呼ばれた少女　高町なのははバリアジャケツトを解除。本局航空部隊のものである白と青を基調としたスーツ姿へと戻る。

「まあ、細かいことは後回しにして。ランスター二等陸士」

「あ、はい!!」

唐突な登場に二人がぼかんとしている中、名前を呼ばれたティアナが慌てて返事をする。こんな状況で呼ばれると思っていなかったのだろう。声がやや裏返っていたのはある意味当然かもしれない。

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで」

「あ、治療なら私がやるですよ」

「あ、えと、すみません」

なのはの言葉を遮り、眼前まで飛んで来たリインに押されるように頷くティアナ。苦労を掛けさせまいとするその姿に、なのはも思わず笑みを零す。

「なのは…、さん…?」

「うん?」

「あ、いえ、あの!!高町教導官!!一等空尉!!」

思わず呆然と彼女の名を呟いたスバルは急に反応を返され、敬礼と共に慌てて呼び方を変える。一般人だった四年前ならいざ知らず、今の彼女は目上の同僚なのだ。口の利き方には気を付けないといけない。

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから。四年ぶりかなあ…」。

背え伸びたね、スバル」

「えと、あの、あの…」

が、そんな思惑を僅か一言で打ち壊され、思わず言葉に詰まる。覚えていてくれた。その言葉が脳内を反響し、上手く考えが纏められずぐちゃぐちゃになっていく。

「また会えて嬉しいよ」

なのは頬を緩め、そつとスバルの頭を撫でる。それが、スバルの限界だった。再会の嬉しさに込み上げて来た涙を、感情のままにボロボロと零す。なのはに優しく見守られる中、スバルはしばらく泣き続けた。

「…ありや、手伝うまでもなかったか」

近くのビルの屋上で風を受けながら彼　天城ナツキはそう呟く。途中でヘリから空間跳躍した彼は二人が激突する寸前に周辺の重力を増加させ、速度を大幅に落としたのだ。なのはのアクティブガー
ド　低速の爆風による速度減衰魔法と同じように。二人が無傷で済んだのはなのはとリン達のお陰でもあるが、彼の功績もかなりのウェイトを占めていると言っても過言ではないだろう。

ま、落ち着いたら顔出すか、と結論付け、彼は眼下の五人を見守った。四年ぶりに再会した二人を見て、十年前の自分と実妹の姿をそこに重ねながら。

「…さてなのはちゃん的に二人はどやる？合格かな？」

「ふふっ、どうだろうね？」

上空でそれらの様子を見守りつつ、はやてとフェイトが笑みを漏らす。どうだろうとは言っても、彼女の性格を鑑みれば答えはおのずとわかる。これから色々と本格的に動き出していくんだなあと思いながら、はやてはパイロットに降下するよう指示を出した。

第一話「空への翼」 後編（後書き）

はい、ようやく一話終わりました。長いね！w
しかし残念なことに二話はもっと長（自重

第二話「機動六課」 前編（前書き）

さて二話。遂にあの二人がご対面。∴ドウナルノヤラ（オイではどーぞ！）。

第二話「機動六課」 前編

「私のこと…、覚えててくれたんだ」

四年ぶりの恩人との再会に涙ぐむスバルに微笑み、なのはが嬉しそうにそう呟く。それだけの時間が経ってもなお、自分のことを覚えていてくれた。そのことが素直に嬉しく思える。

「あの、覚えてるっていうか、私、ずっと、なのはさんに憧れてて…」

「嬉しいなあ」

自分に憧れて、四年前の少女がこんなところまで来てくれた。それは決して簡単に手に入れることの出来ない、プライスレスで真っ直ぐな思い。だからこそスバルの思いが伝わって来て、思わず自分まで涙ぐみそうになる。

「バスター見て、ちょっとビックリしたよ」

「ああっ！！す、すみません勝手に…」

「ふふふ…。いいよ、そんなの」

自分が教えた訳でもないのに同名の技　　ディバインバスターを使ったことを指摘すると、スバルは恐縮したように頭を下げる。そんな真面目さに苦笑いしつつも、四年の空白を埋めるように言葉を交わしていく。

「ランスター二等陸士は、なのはさんのことご存知です？」

「あ、はい。知ってます」

スバルとその憧れの魔導師の会話をティアナが見守っていると、彼女の足を治療中だったリインから声が掛けられた。質問に対し脳内のデータベースを漁り、彼女についての情報を集めていく。

「本局武装隊の、エース・オブ・エース。航空戦技教導隊の、若手No.1。高町なのは一等空尉、ですよ」

「はいです」

「そこにこう付け加えるべきだな。『管理局一のバカップル』って」

ティアナの答えに誇らしげに胸を張りながら肯定するリインに、新たな人物から声が掛けられる。隣のビルの屋上から飛び降り軽々と着地した、漆黒の髪とスーツが特徴的な青年だ。

「あ、ナツキさん」

「よ、久しぶりだな。試験官お疲れ様」

リインに片手を上げながら答える彼　天城ナツキは苦笑しながら、あれこれ話すのはとスバルを見遣る。その顔は大事なものを取られたようにも、逆に嬉しそうにも見えた。

「あの…、あなたは…？」

「ん？ああ、俺は…」

「あああああ！！」

ティアナその表情に疑問を抱き問い掛け、ナツキは快く答えようとするも、なのはの叫び声で中断させられる。何事かと全員がなのはに視線を移すと、

「ナツキ君久しぶりいいいいっ！！」

ダッシュと共にそんな発言をしたのはが、飛び込むようにしてナツキに抱き着いていった。事情を知っているリン二人はまた始まったかと苦笑するが、訳のわからないスバルとティアナは置いてきぼり状態だ。

「つと、危ねえだろなのは」

「だって十日ぶりだもん！！いつ帰って来たの！？」

「今朝。そのまま書類纏めたりアスカの試験官してたから顔出せなくてさ」

危なげなく受け止めながらも窺めるナツキを無茶苦茶な理論で言い負かしつつ、目を輝かせながら尋ねるのは。ダメだこりやと苦笑しながらも質問に答え、他者を寄せ付けない二人だけの空間が展開されたような気がした。少なくともスバルとティアナは。

「あの、あの人は…？」

「ああ…」

なのはのあまりの変わりようにぽつんと置いてかれていたスバルが、青年の正体を知べくリインフォースに尋ねる。先程までのなのはとのやり取りを見ていた為すぐ納得し、彼女は十年來の友人について説明し始めた。

「天城ナツキ執務官。超難関試験である執務官試験を一発合格し、様々な事件を解決に導いた歴代最高クラスの執務官。十年前に全滅した天才一族、天城家の生き残りで、Sランクの龍神を使い魔に持つSS+ランク魔導師。そして…、高町の恋人だ」

「え…、ええええっ!？」

世界どこか次元が違っんじゃないかとさえ思えるハイレベルな経歴、その最後に付加された一言にスバルは飛び上がる程に驚いた。なのはさんの恋人。彼女に救われた身からすれば幸せになって欲しい為、ある意味一大事である。

「なななななのはさんって、つつっ付き合ってたんですか!？」

「知らなかったのか?他にもう一人の執務官とも付き合っているせいか、全男子の敵なんて言われたりもしているがな」

「二股っ!？」

相手は最悪だった。なのはさんという者がおりながら二股。全男子どころか全人類の敵だ。万死に値する、と言っても今なら誰も責めないと思う。でもなのはさんがそんな男に引っ掛かるはずないし、と考えると頭の中がごちゃごちゃになってくる。

「まあ、そこは色々事情があつてな。世間一般で言う軽い二股では

なく、真剣に二人と向き合っている。当の高町達は問題ないそうだし、あまり突っ込まない方がいいぞ」

「は、はあ…」

スバルのそんな困惑した視線に言葉不足を自覚したのか、リインフォースが補足説明を行う。いまいち事情が理解出来ないながらも、スバルは一応頷いておいた。

視線を戻せば、恋人だというナツキと楽しそうに言葉を交わすなのは姿。付き合いが浅いどころか一回会っただけの自分が、人の恋愛にどうこう言えるとは思わないけど。それでも幸せそうな彼女の顔を見たら、なんとなく納得している自分がいた。

「いいなあ…。私もお兄ちゃんに抱き着きたい…」

所変わってヘリ内。もう一人の執務官こと、フェイトがモニターに映る兄と親友を見て不満そうな声を漏らす。能動的に抱き着くのと、受動的に撫でられるのでは後者の方が嬉しいような気もするが、触らぬ神に祟りなし。は yet は苦笑いと共に、親友のぼやきをスルーすることにした。

「でもあの二人…、知り合いなの？」

「あれやよ、ほら。四年前の、四人が私の演習先に遊びに来てくれた時の空港火災」

「ああ…、災害救助の手伝いをした時？」

気を取り直しなのはとスバルについての疑問を口にしたフェイトに、事情を知っているはやてが具体的に答える。言われてフェイトも記憶を漁り、そんなことがあったなあと思い出す。

「そう。スバルはなのはちゃんが助けた要救助者の一人。ちなみに、フェイトちゃんはスバルのお姉ちゃんを助けてるんよ。言うまでもなくアス力はナツキ君に助けられてるけどな」

「…ん」

はやての解説に付け加えられた一言に、アス力が嬉しそうに頷く。いくら助けた縁があるとはいえ、両親を亡くした当時八歳の少女を引き取るような出来た人間なんてそうそういない。十年前の自分と、いい四年前のアスカといい、お兄ちゃんには拾い癖でもあるのかなあなんてフェイトは考えるが、その兄にベタ惚れしている時点で説得力は皆無である。…って、スバルのお姉ちゃん？

「そうなの？女の子を助けたのはよく覚えてるけど…」

「それぞれ、その子や。今は二人揃って管理局員。部隊は別なんやけどね」

そうなんだと頷きながら、降下し始めたヘリの窓から眼下を見遣る。こちらに気付き笑みと共に手を振ってきたナツキとなのはに手を振り返して答えつつ、フェイトはスバルへと視線を移す。突如現れたヘリに呆然としつつも、私の姿を確認して慌てて敬礼するスバル。そっか。そういえば、確かに似てるかな。そんなことを思いながら、私もスバルに敬礼を返した。

四年前、ミッドの臨海地区。ある危険な密輸物が原因で起こった空港での火災は、あっという間に全体に広がって。近隣の陸上部隊と航空隊も緊急召集される、大事件になってしまった。

「203、405、東側に展開して下さい！！魔導師陣で防壁張って、燃料タンクの防御を！！それとナツキ君、さっきの女の子の身元照会完了したよ！！名前は神風アスカ、ご両親がいるはずだから見付け次第連絡を！！ユキちゃんは西の第25ブロックで消火に当たって！！」

『了解！！』

『オツケー！！』

指揮官用トラックの上で大量のウィンドウを展開し、矢継ぎ早に指示を飛ばしながら高戦力の親友二人に別指示を送る茶髪の少女。本局制服である青いスーツを着た、当時十五歳の八神はやてだ。

「はやてちゃん、ダメです！！丸つきり人手が足りないですよぉ！！」

「そやけど首都からの航空支援が来るまで、持ち堪えるしかないんだよ。頑張ろ」

「はい…」

陸上部隊で指揮官研修をしていたはやては、前線指示で作戦に参加して。休暇を利用して、はやての所に遊びに来ていた私とお兄ちゃん、なのはにユキも、救助に参加した。本当にあの時は人手不足で、

たまたま来ていた私達に頼らなければならぬ程状況は悪くて。話を聞いた瞬間飛び出したお兄ちゃんに続くように、私達も全力で空を飛んでいた。

『航空魔導師本局02、応答願います』

「はい、本局02。テストロッサ・ハラウンです」

空を飛んで空港に向かう途中、はやてではない別の指揮官から通信が入る。前線のはやては消火などのリスク回避、後衛は救出状況の確認などの指示を担当しているのだ。今の声は後衛の指揮官。つまり

『八番ゲート付近に要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないです。お願い出来ますか？』

《Route retrieval end. It arrive
s within two minutes (ルート検索終了。二
分以内に到着します)》

「すぐ向かいます」

通信を聞き終えた瞬間バルディッシュデバイスが検索を開始、現在地点からの最短ルートを特定する。親友設計の優秀なデバイスに感謝しながら、フエイトは八番ゲート目掛けて加速した。

「そのまま南へ!!」

「はやてちゃん、応援部隊の指揮官さん到着です!!」

一方、前線でも新たな動きがあった。指示に奮起するはやての元に、リインと共に一人の男性　　陸士部隊の茶色いスーツを着た、壮年の男性が駆け寄って来る。

「すまんな、遅くなった」

「いえ。陸士部隊で研修中の本局特別捜査官、八神はやて一等陸尉です。臨時で応援部隊の指揮を任されています」

「陸上警備隊、108部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

敬礼と共に互いの自己紹介を済ませ、はやてはしばし思考。人手不足のこの状況と、今の自分を省みる。…よし。

「ナカジマ三佐、部隊指揮をお願いしてよろしいでしょうか？」

「ああ…、お前さんも魔導師か？」

「広域型なんです。空から消火の手伝いを…」

結論を下しゲンヤへと指揮権の移動を提案、納得したように頷く彼にシユベルトクロイツを見せながら、その根拠を示す。と、

『はやてちゃん、指示のあった女の子一人、無事救出！！名前はスバル・ナカジマ、さつき無事に救護隊に渡したんだけど、お姉ちゃんがまだ中にいるんだって！！』

「了解！！私もすぐ空に上がるよ！！」

『了解！！』

はやての言葉を遮るように、一つのウィンドウが展開された。黒い夜空と炎の赤を背景に飛翔する、栗色の髪をツインテールにして純白のバリアジャケットを身に纏った一人の少女。十年來の親友

高町なのはだ。後衛から指示を受けた子の保護と懸案事項の報告を受け、答えを返すと共にウィンドウが消える。救出は着々と進んでいるようだ。

「ナカジマ…？」

「家の娘だ。二人で部隊に遊びに来る予定だった」

聞き覚えのある名前にリインが呟きを漏らし、ナカジマ三佐の答えに表情を歪ませるはやて。タイミングが悪いとしか言いようがないが、なのはが迅速に救助してくれただけマシか。

「ではナカジマ三佐、後の指揮をお願いします。リイン、しっかりな。説明が終わったら上で私と合流や！！」

「はいです！！」

この事故を最小限に抑えると改めて決意し、ゲンヤとリインに数言残したはやては駆け出した。右手に握った金の剣十字　そこからは違セッう世界にいるリインフォースの声を聞いた気がして、はやては短く起動を宣言。全身が純白の光に包まれ羽が舞うようにして光が剥がれ落ちた瞬間、騎士甲冑に身を包んだはやてが現れる。袖がなく裾の短い黒のワンピースの上から、白くて丈の短いジャケットを羽織り腰のバイザーから前開きの黒いロングスカートを装着。頭には白いベレー帽、右手には剣十字の意匠が成された杖。六年前と変わらないデザインの、しかしはやてだけの騎士甲冑。

「最初から全開で行くよ……!!」

呟きと同時に背中から、巨大な純白の二枚翼が展開。かつて親友が生み出した、周囲の魔力を吸収し術者に取り込ませる、天使の如き巨大な翼。

理を狂わすモノ、D R M。

起動を確認し地を蹴った瞬間、はやての姿が二人の視界から消失する。その翼は飾りにあらず、見た目通り羽ばたきによる加速が可能だ。暗い夜空に純白の羽が舞い散る中、ゲンヤとリインは指揮車の中へと移動した。

空港内、八番ゲート。そこに三人の女性が取り残されていた。藍紫色のバリアで火や瓦礫の被害こそ免れているが、煙ばかりはそうもいかない。ドーム状であるバリアはその性質上、外から密閉され攻撃を防ぐことになるが、全てをシャットアウト出来る訳ではない。空気や重力などまで排除してしまえば、長時間展開していた場合内側の人間に危害が及ぶからだ。酸素など必要なものだけ取り込むバリアも作れないことはないが、この状況では余程の熟練者でない限り厳しい注文だろう。

徐々に内部の空気も濁り始め、女性達は激しくむせ返る。仮にここから出ても四方は瓦礫と炎に囲まれ、脱出する手立てはない。このまま座して死を待つしかないのかと彼女達が絶望した時

希望の光
金色の雷が、瓦礫を吹き飛ばした。

「管理局です！！もう大丈夫ですから！！」

《Defenser Plus》

青いコートとミニスカートを基調とした軍服のようなバリアジャケットを身に纏い、白いマントを羽織って黒い斧を携えた少女
フェイトが三人の前に現れ金色のドームを展開。煙を除外し新鮮な空気を取り入れるバリアのお陰で、三人の咳も少しずつ治まってくる。

「すぐに安全な場所までお連れします」

「あ、あの……！魔導師の女の子がこのバリアを張ってくれて……、それから妹を探しに行くってあつちに……！！」

三人を避難させるべく思考を巡らすフェイトに、一人の女性がとんでもない爆弾発言を投下した。こんな状況でどこにいるかもわからない妹を探しに？自殺行為以外の何物でもない。早く探しに行かなければならないが、三人を放っていく訳にもいかない。冷静に考えれば三人を避難させてから探しに行くべきだが、もしその間に女の子が危険な目にあったら？そんな板挟みに囚われ、フェイトが自問と自答のループに陥りそうになった瞬間

漆黒と白銀の煌めきが、瓦礫を再度吹き飛ばした。

「……ありや、フェイト？」

慌てて振り返ったフェイトの視界に映ったのは、漆黒のコートを身に纏い手に巨大な銀刀を携えた、久しぶりに会う最愛の兄の姿だった。一週間ぶりの再会にしては、ムードもへったくれもあったもの

ではなかったが。

「お、お兄ちゃん!？」

「炎と瓦礫の中で再会とはなんともまあ…。で、あっちがどうかした？」

驚愕し言葉を漏らすフェイトに苦笑いと共に答え、彼女の視線の先 エントランスホールに通じる道へと目を向けるナツキ。迷いの原因を一発で特定されたことにつるたえながら、フェイトは事情を説明した。

「…いいよ、行つて来い。こっちは俺が引き受ける」

「え、でも…」

「一人ずつ抱えてくんじゃ効率悪いだろ？俺が空間跳躍で纏めて避難させるから、お前はそっちに向かつてくれ」

「…うん、ありがとう」

聞き終えて即答したナツキに反論しようとするも、正論と笑顔で押し切られてしまい礼を述べる。重力 引いては空間に干渉出来る彼の力は応用の幅が広く、このような状況では非情に役に立つ。兄の言葉を信頼して、フェイトは女の子の搜索に向かうことにした。

「キス一回でチャラにしてやるよ」

「もう!!お兄ちゃんってば!!」

救護隊の待機地点に通じる漆黒のゲートを生成しながら、振り返ったナツキがふとそんな言葉を漏らす。こんな状況に似合わない、いや、こんな状況だからこそフェイトの負担を和らげようと放たれた冗談わかっていても思わず顔を赤くし、照れながら反論したフェイトは全速力で飛び去っていった。

夜の闇に包まれた、吹き抜けのエントランスホール。その最上階の欄干を支えに、瓦礫だらけの通路を歩く一人の少女がいた。先程の三人にバリアを張り妹を探すと言って行方をくらませた、魔導師の女の子である。

「スバル…、返事して…。お姉ちゃんが…、すぐ助けに行くから…」

度々起こる爆風の煽りを受けながらも、少女は必死に妹を探し続ける。あれだけのバリアを維持させるには、十三歳の少女にはかなりの消耗を強いる。そんな状態でマトモに動ける訳もなく、少女は半ば柵に寄り掛かるようにして移動していた。

が、突如として床が崩れた。度重なる爆発で内部構造が破壊されていたのか、バラバラに碎けながら少女と共に落下していく。少女が死を覚悟し目を閉じた瞬間

《S o n i c M o v e》

金色の閃光が宙を翔け、少女をギリギリのところまで拾い上げながら再び舞い上がる。彼女を探して飛んで来た、フェイト・テストアロツサ・ハラウンその人だ。

「危なかった…。お兄ちゃんに後でお礼言わないと…。キスくらい

するべきかな…？」

間一髪間に合ったことに安堵の息をつきながら、来るのを後押ししてくれた兄になんと言うべきか思考を巡らせるフェイト。時間が経つ程顔が赤くなつていくのは、天然なのかマイペースなのか。少なくとも助けられた少女は、訳もわからずぽかんとすることしか出来なかった。

「…あ、ごめんね。遅くなつて。もう大丈夫だよ」

しばらくして現世に帰って来たのか、フェイトは安心させるように少女を抱きしめる。その温かさ故か無意識に、少女はそこに母の姿を重ねていた。

「妹さん、名前は？どっちに行つたかとかわかる？」

「あの、エントランスホールの方ではぐれてしまつて…。名前はスバル・ナカジマ、十一歳です」

『こちら通信本部。スバル・ナカジマ、十一歳の女の子。既に救出されています。救出者は高町教導官で、怪我もありません』

少女の懸案事項である妹について尋ねながら、脱出するべく再度加速するフェイト。少女は我に返つたのか矢継ぎ早に手がかりを述べ、それを聞いていた通信本部が救護隊に照会。無事を確認し救出時の映像と共に少女の眼前にウィンドウを展開する。同じ妹として姉^兄の心配する気持ちはよくわかる為、無事なことにフェイトは安堵の息をつく。

「スバル…、よかった…」

「了解。こっちは今お姉さんを保護。お名前は？」

「あ…、ギンガ。ギンガ・ナカジマ。陸士候補生十三歳です」

ホツとして脱力する少女に身元を尋ね、返って来た情報を通信本部に送信。要救助者も残り僅かなことを確認し、フェイトは気合いを入れ直す。

「候補生か…。未来の同僚だ」

「き、恐縮です…」

腕の中の少女　ギンガとそんな言葉を交わしながら、フェイトは救護隊の待機地点目掛けて加速した。

ギンガが無事救出された頃、指揮車内ではゲンヤとリインがコンソールを高速で操作していた。被害を最小限に抑えるべく見た目も経歴も違う二人が力を合わせ、キーを叩く音で無機質な旋律を奏でていく。

「補給は？」

「あと十八分で、液剤補給車が七台到着します。首都航空部隊も、一時間以内には主力出動の予定だそうです」

ウィンドウを複数展開し、状況整理と引き継ぎを済ませていく。身内が絡んでいるにも関わらず、ゲンヤの行動は全く鈍っていない。

ベテラン、という言葉がしつくり来る人物だった。

「遅えな……。要救助者は？」

「あと十名程……。魔導師さん　　ナツキさんやなのはさん、フェイトさん達が頑張ってますからなんとか……」

「最悪の事態は回避出来そうか？」

「はいです」

「よし……。おちびの空曹さんももういいぞ。自分の上司のところに合流してやんな」

一通り聞き終え満足したのか、ゲンヤがシートに寄り掛かりながら襟元を緩めた。リインを見遣りながら、早く主人と合流するよう促す。リインの見た目は僅か30センチ程。どう見ても常識を越えた存在だ。おそらくはユニゾンデバイス　　主と融合することで真価を発揮するタイプの融合騎。ならばはやてと合流した方が、作業効率上がるはず　　ゲンヤはそう考えたのだ。

「いえ、もう少し情報を整理して、指示系統を調整してからにします」

「そつかい……。ま、助かるがな」

が、予想に反しリインは作業続行を告げた。見た目こそ幼い少女だが、真面目ないい子のようだ。どちらにせよゲンヤにとってはありがたいので頷きながら、一つのウィンドウを展開する。

そこに映し出されたのは、純白のベルカ式魔法陣を展開した夜天の

王。夜空と業火を背景によく映える白き三角形の上で、夜天の魔導書を広げ詠唱を開始する。

「灰白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ!!」

「八神一尉!!指定ブロック、避難完了です!!」

「お願いします!!」

詠唱を終えると同時、はやての周囲に薄い水色の立方体が四個生成される。タイミングよく避難も完了し、周辺の整理に当たっていた局員も開始を促す。中に人はいない。なら、全力で!!

「了解!!来よ、氷結の息吹!!アーテム・デス・アイセス!!」

はやてがシュベルトクロイツを振り下ろした瞬間、応えるかのように動き出した立方体が燃え盛る空港に突撃していく。着弾点から放射状に氷の輝きが広がっていき、円の中は完全に凍結されていく。アーテム・デス・アイセス。圧縮した気化氷結魔法を撃ち込むことで、着弾点周辺の熱を奪い凍結させる広域魔法。無限の魔力を得たその魔法は、空港の五分の一ものエリアを凍結させていた。その光景はまるで氷塊から削り出された彫像のようで、それを見た者は場違いながらも感動を覚えたという。

「すっげえ……」

「これが…、オーバーSランク魔導師の力…」

無論先程整理に当たっていた局員も同様で、寒さに震えながらも目の前の光景とそれを生み出した人物に感嘆の溜め息を漏らす。

「巻き添えゴメンなー？私一人やと、どうも調整が下手で…」

「あ、いえ！！」

「次の凍結可能ブロックを探します！！」

はやての気遣いに恐縮しつつも局員達が再び動き出した瞬間、遠方に数十からなる光の動きが見えた。応援部隊がようやく来てくれたようだ。

「遅くなつてすまない！！現地の諸君と、臨時協力のエース達に感謝する！！後はこちらに任せてくれ！！」

「了解しました！！引き続き協力を続けますので指示をお願いします！！」

隊長格の男性と手短に言葉を交わし終え、はやてはこっそりと溜め息をつく。幸か不幸か、それに気付いた者はいなかった。

「ふう…、やっと来たか…」

「はい」

ようやく来た増援をウィンドウ越しに確認し、ゲンヤはやれやれと溜め息をつく。多少気楽になったのか、リインの声も明るくなった。

「だが、まだ油断は出来ねえ。もうちつと情報整理を頼んでいいか？」

「了解です」

散開する増援部隊を見遣りながらそんな言葉を交わしつつ、ゲンヤとリインは作業を再開した。

とあるホテルの一室。最上階に程近い部屋のベットで、五人の少女が眠っていた。直前まで仕事をしていたせいか、スーツの上着を脱いだだけという格好でグタツと寝転がっている。見る者が見ればだらしないやうな感じがするが、今の彼女達にそれを言うのは酷だろう。

『こちら現場です。火災は現在は鎮火していますが、煙は未だに立ち上っている状態です。なお現在は、時空管理局の局員によって、事件の調査と事故原因の解明が進められています。幸いにも、迅速に出動した本局、航空魔導師隊の活躍もあり、民間人に死者は出ておりません』

「んー、やっぱりなー…」

「んー…？」

備え付けのテレビからは、空港火災についてのニュースが流れていて、少女達は半ば夢見心地でそれを聞いていた。そんな中リモコンを操作し電源を消した茶髪の少女　はやてが予想通りの報道に溜め息をつき、隣に寝ていた栗色の髪の少女　なのはが何事かと尋ね返す。

「実際働いたんは、災害担当と初動の陸士部隊と、なのはちゃんと

フェイトちゃん、ユキちゃんにナツキ君ちゃん」

「にやはは……。まあ休暇中だったし……」

「民間の人達が無事だったんだし」

「匿名ヒーロー、ってことでいいんじゃない？」

はやての納得がいかないうような言葉になのはが寝返りを打ちつつ苦笑し、俯せに寝た金髪と銀髪の少女達　　フェイトとユキがそれに追従する。と、

「…なのは、せめて下をなんとかしろ。色々と危ない」

壁に寄り掛かり膝を立てて寝ていた五人目　　はやての枕で熟睡するリインを含めれば六人目か　　ナツキが顔を伏せたままのはを注意する。全員緊急出勤から帰って来たのは夜が明けてからで、クタクタで着替える余力もなく上着だけ脱いで寝ていた訳だが、なのはだけはスカートまで脱ぎシャツ一枚で眠っていたのだ。ベットから遠く離れた場所にいるとはいえ、角度的に綺麗に引き締まった太ももやオレンジ色の何かがチラチラと見えて精神的に疲れる。非常に。いくら同性の親友と恋人しかいないとはいえ警戒心というものがないのだろうか、とナツキは余計な心労が増えたことに溜め息を漏らす。

「ふえ？大丈夫だよ別に。暖房効いててあったかいから風邪引かないし」

こちらの意図とズレた答えを返してくる天然少女に呆れつつ、ナツキは視線を背けることで答えた。信頼なのか本気でわかっていない

のか。ならばこちらとしては視界になのはを入れない以外に選択肢はない。

「あんな、みんな。私、やっぱ自分の部隊を持ちたいんよ」

と、空気を読んでくれたのか単に考え事をしていたのか、身を起こしたはやてが不意にそんなことを言った。突然過ぎる発言に驚き、四人の視線が彼女に集中する。

「今回みたいな災害救助はもちろん、犯罪対策や発見されたロストログアの対策も、なんにつけミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅過ぎる。後手に回って承認ばかりの動きじゃあかんし、私も今みたいにフリーであちこち呼ばれて回ってたんじゃ、ちっとも前に進めてる感じがせえへん。少数精鋭のエキスパート部隊　それで成果を上げてったら、上の方も少しは変わるかもしれへん。でな？私がもしそんな部隊を作ることになったら、フエイトちゃん、なのはちゃん。ナツキ君にユキちゃんも、協力してくれへんかな？」

以前からそんなことを考えてはいたが、実行に移す気にはなれなかった。所詮一介の小娘の戯言だと流されるのが目に見えていたし、その気持ちに蓋をして心の奥に閉じ込めていたのだ。でもそれが決定的になったのはあの時　火災発生から遅れに遅れてやって来た本部局員を見て、その想いは再燃し更に強まっていた。唐突に述べられたそんなはやての想いに、思わず全員ぽかんとした表情を浮かべる。

「あ、もちろんみんなの都合とか、進路とかあるんはわかるんやけど…、でも…、その…」

「はやてちゃん、何を水臭い」

「小学三年生からの付き合いじゃない」

「実質あたしは便利屋扱いだから、籍はあつてないようなものだしね」

そんな四人を見て我に返ったように手を振って否定するはやてになのは呆れたように、フェイトは柔らかな笑みと共に、ユキは自らの処遇を皮肉るようにはやてに言葉を投げ掛けた。それにと言葉を繋ぎながら、ナツキもはやての方へと歩み寄って行く。

「そんな面白そうな部隊話に誘ってくれなかったら、逆に入隊嘆願しに乗り込みに行くぞ俺達は。なあ？」

ナツキが笑顔と共にはやてに告げ、三人へと振り返る。なのは達はうんうんと頷き、全員揃ってはやてに手を差し出した。

「…おおきに。ありがとうな、みんな」

親友達の温かな言葉に感激の涙を流しながらも、はやてはしっかりと四人の手を握る。こうして六年の時を共に歩んで来た幼馴染達は、一つの目標へ向けて進み始めた。

第二話「機動六課」 前編（後書き）

やっぱりこうなった！（え
なんというバカップル状態w

ていうか火災編長いwどうしてこんなに伸びたw

第二話「機動六課」 後編（前書き）

はい後編です。相変わらず長いw
ではどーぞ！。

第二話「機動六課」 後編

「…とまあそんな経緯があつて、八神二佐は新部隊設立の為に奔走」

「四年程掛かつて、やっとそのスタートを切れた。という訳や」

「部隊名は時空管理局本局、遺失物管理部『機動六課』！！」

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、主な任務は特定遺失物の捜査と保守管理だな」

ヘリで移動後とある一室に通されたスバルとティアナは、向かいのソファに座るフェイトとはやて、ラインにナツキから、四年前の空港火災から始まる新部隊設立までの流れを説明されていた。何故そんな話と思う前に、管理局最強のエース達のそんな昔話にぼかんとした表情を浮かべてしまう。

「遺失物…、ロストログアですね？」

「そう。でも広域捜査は一課から五課までが担当するから、うちは対策専門」

「そうですか…」

あまりにも壮大なスケールの話に面食らってしまったが、情報を咀嚼し終えたティアナが質問する。フェイトに返された答えに頷き、軽い質疑応答を始めた。と、

『ティア、ロストログアってなんだっけ？』

『うつさい。話し中だから後にして』

と忘れしたのかスバルは、そんなことを念話でティアナに尋ね始めた。それを冷たく一言で切り捨てられ、諦めと共に視線を前に戻すと。

「…で、スバル・ナカジマ二等陸士。それに、ティアナ・ランスタ―二等陸士」

「「はいっ!？」」

「私は、二人を機動六課のフォワードとして迎えたいと考えてる。厳しい仕事にはなるやろうけど濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやる？」

不意に名前を呼ばれ慌てて姿勢を正すと同時、とんでもない言葉がはやての口から放たれた。数秒の時間を掛けてそれを理解すると、二人の口から呆然とした声が漏れる。

「スバルは高町教導官に魔法戦を直接教われるし、執務官志望のティアナには、私やお兄ちゃんできればアドバイスとか出来ると思うんだ」

「あ、はい」

「あ、いえ、とんでもない。恐縮です…」

フェイトがにこやかに六課移籍後の利点を述べ、話を振られたスバルとティアナは慌てて言葉を返す。と、一人ソファに腰掛けず後ろ

から寄り掛かっていたナツキが、二人の背後に視線をやり首を傾げた。

「…あれ、なのは？リインフォースも？」

「えーと…、取り込み中かな？」

「ん、平気平気。大方アレだろ？試験結果」

怖ず怖ずと部屋に入って来るのはとリインフォースを迎え入れ、ソファに座らせるナツキ。試験結果の一言に、スバルとティアナの表情も硬くなる。

「二人共技術はほぼ問題なしだが、危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを越えている」

「自分やパートナーの安全だとか、試験のルールも守れない魔導師が人を守るなんて、出来ないよね」

手元のクリップボードをめくりながら放たれるリインフォースとなのはの言葉に、思わず顔を伏せる二人。確かにゴールすることに躍りになってティアナの負傷を報告せず、おまけにあのオーバーラン。下手すれば命さえ落としていたことを今更ながら痛感し、二人は激しく落ち込む。

「だから残念ながら、二人共不合格。…なんだけど」

締め括るように放たれたなのはの言葉は、しかし終わりではなかった。思わず顔を上げた二人に苦笑いしながら、再びクリップボードをパラパラとめくる。

「二人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのは反って危ないかも。というのが、私達試験官の共通見解。ということでこれ、特別講習に参加する為の申請用紙と推薦状。これを持ってって本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから」

リイン達の頷きに応え、書類と推薦状の入った封筒を差し出しながらそう告げるのは。てつきり不合格ではいおしまいだと思っていた為、スバルとティアナは封筒となのはの間で視線を彷徨わせる。

「来週から本局の厳しい先輩達にしっかりと揉まれて、安全とルールをよく学んで来よ？そうしたらBランクなんて、きっと楽勝だよ。ね？」

「……！ありがとうございます……！」

温かな言葉と共に柔らかな笑みを向けられ、スバルとティアナは揃って頭を下げる。まだチャンスがあるという喜びよりなのはが二人の為にもう一度機会を作ってくれたことが、その為に彼女が奔走してくれたことが嬉しかった。

「合格までは試験に集中したいやろ？私への返事は試験が済んでから、ってことにしようか」

「すみません！！恐れ入ります……！！」

そんな二人の様子に苦笑いしながらはやてが判断保留を持ち掛け、二人はほぼ同時に立ち上がりながら敬礼。互いに顔を見合わせ苦笑したところで、この話はお開きになった。

「あー…、なんか色々緊張したー…。不合格は残念だったけど、まあしゃあないよね」

「ま、よかったわ。再試験に引っ掛かれて」

だね、と相槌を打ちながら、スバルは隣のティアナを見遣った。芝生に寝転がりリラックスしているパートナーに、悩みの種について問い掛けてみる。

「でさ、新部隊の話。ティア、どうする？」

「ん、あんたは行きたいんでしょ？なのはさんはあんたの憧れなんだし、同じ部隊なんてすごいラッキーじゃない。あたしはどうしようかな…。遺失物管理の機動課って言ったら、普通はエキスパートとか特殊能力持ちが勢揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなところに行つてさ…、今のあたしがちゃんと働けるかどうか…」

スバルを促しておきながら、ティアナ自身は決めかねているようだ。現時点でもエース・オブ・エース（なのは）や管理局最強、管理局最速に歩くロストロギア（はやて）と言う凄まじいメンバーが揃っているのだ。並大抵の者ならその実力の壁に躊躇して、断つてしまふような話だろう。そんなことを考えながら空から視線を外すと、眼前に嫌らしい笑みを浮かべるスバルの姿があった。

「…何よ気持ち悪い」

「そんなことないよ！！ティアもちゃんと出来るって！！…って、

言って欲しいんだろー？」

眉を顰めながらのティアナの一言にスバルはどこぞのスポ根漫画のように目を輝かせ、そんなことをニヤニヤと答える。瞬間、ティアナの中で何かが切れた。ブチッと音を立てて。

「な・に・よ、それは！？言って欲しくないわよ、バカ言ってるんじゃないわよ！！」

スバルの尻を思いつ切り抓りながら、昭和の親父さんも真つ青なレベルの説教をかますティアナ。半ば涙目になりギブアップを叫ぶスバルを解放し、やれやれと溜め息一つ。…不毛である。

「ねえティア、私は知ってるよ。ティアはいつも口ではふて腐れたこと言うけど、本当は違うんだって。ナツキ執務官やフェイト執務官にも、内心ではライバル心メラメラでしょ？」

「ら、ライバル心とかそんな大それたもんじゃないけど…。知ってるでしょ、執務官はあたしの夢なんだから。勉強出来るんならしいって気持ちはあるわよ」

「だったらさ、やろうよティア」

気を取り直したスバルの半分からかうような言葉に、ティアナは否定しつつ顔を背ける。オーバースとB候補では、確かにライバル云々以前の話だろう。だが最後に付け足した言葉に、スバルはぐいっと身を乗り出す。

「私はなのはさんに色んなこと教わって、もともと強くなりた。ティアは新しい部隊で経験積んで、自分の夢を最短距離で追い

掛ける」

良いこと尽くしな入隊後のことを述べ、スバルはニヤニヤしながらそれにと一言付け足す。

「当面まだまだ二人でやつと一人前扱いなんだしさ。纏めて引き取ってくれるの嬉しいじゃん」

余計極まりない一言を。

「そ・れ・を、言うな！！目つ茶苦茶ム力つくのよ、何が悲しくてあたしはどこ行ってもあんたとコンビ扱いなのよ！？」

背中に跨がり両足でスバルの胸をロツク、頬をこれでもかと言わんばかりに引つ張りながらティアナが怒る。懲りないスバルもスバルだが、やはり不毛である。

「はっ、まあいいわ。上手くこなせばあたしの夢への短縮コース。あんたのお守りは御免だけど、まあ我慢するわ」

立ち上がりながら不機嫌そうに、そう呟くティアナ。素直じゃないパートナーの言葉に、思わず笑いが込み上げてくる。ティアナに不審げな目を向けられながらも、スバルはしばらく笑い続けた。

「あの二人は、まあ入隊確定かな」

「だろうな。にしてもなのは、嬉しそうだな？」

「二人共育て甲斐がありそうだし、時間掛けてじっくり教えられ
しね」

「ふふつ、それは確実や」

芝生で戯れるスバルとティアナを窓から見下ろしながら、言葉を交
わす三人の姿がある。あの後そのまま一緒に行動していたナツキと
なのは、はやてだ。

「新規のフォワード候補は、ナツキ君直属の二人とフェイトちゃん
直属の二人だっけ？そっちは？」

「アスカならミサオとランニング。ソラは確かユキんとこだったか
な。はやて、フェイトの方は？」

「二人共別世界。今シグナムが迎えに行ってるよ。二人と面識のあ
るエリスちゃんもな」

スバルとティアナ以外に同期となる四人について尋ねると、ナツキ
からアスカともう一人、はやてからもう二人について説明される。
アスカはナツキやなのは達と同居している為面識もあり仲もいいが、
他三人については書類で数回見た程度しかないのだ。フォワードの
教導担当のなのはとしては気になるところだろう。と、

「お兄ちゃん、なのはー、はやてー、お待たせー」

「お待たせですー」

廊下の向こうから三人の待ち人である、リインを肩に乗せたフェイ
トが駆けて来た。リインはふわりと飛び上がり、主であるはやての

肩に座り直す。ちなみにリインフォースは別命で既に外出している為、既にこの場にはいない。

「ほんなら次に会っくんは、六課の隊舎やね」

「ナツキさん達の部屋、しゅつしゅつしゅつしゅつかり作つてあるですよ」

「ん、サンキュ」

「楽しみにしてる」

はやてがしばしの別れにそう呟き、リインが得意げに両手を広げて話す。恋人であるナツキとなのはとフェイトは当然一緒に部屋の希望した為、わざわざその為に部屋を拵えてくれたのだ。そのことにナツキが笑みと共に礼を述べ、フェイトも期待に頬を緩ませる。その様子を満足げに見遣り、はやては踵を返し場を後にした。

「さて、それじゃあ隊に帰ろうかな」

「私、車で来てるから中央まで送ってくよ。お兄ちゃんは？」

「んー、俺もアスカとミサオ拾って帰るかな。運転変わる？」

「いいよ、たまには私が」

「そっか」

やがてなのは達も元の場所に帰るべく、はやて達とは逆の方へ進み始める。送り迎えを申し出るフェイトに交代を申請するもやんわりと反対され、ナツキは苦笑と共に先頭を歩き始めた。

「そういえば二人共、体調は…、平気？」

「にやはは、平気平気。全然問題なし」

「…なのははともかく、俺は至って健康体だ」

と、不意に足を止めそう尋ねるフェイトになのはは元氣らしさをアピールすべく両手をグッと握って答えるが、ナツキの一言で水泡に帰してしまふ。

「あーひどーいー!!」

「お前が言っな」

「お兄ちゃんもね」

「「うぐ…」」

そのことに頬を膨らませながら反論するも無茶しがちなことをナツキに指摘され、更にそのナツキもフェイトの言葉に口を詰まらせる。この三人のヒエラルキーが垣間見えた瞬間だった。

「…あ、ナツ兄」

「おお、主。なのはとフェイトも」

「おう。二人共お疲れ。そろそろ帰るから準備して来い」

「…わかった」

「うむっ!!」

と、外に出たところでシャツにスパッツという軽装のアスカと、いつも通りの和服姿なミサオに遭遇する。帰還の準備をナツキに促され、二人仲良く再度駆け出した。…この龍神、和服以外の着用を頑なに拒む上全く同じデザインの和服をいくつも持っている為、和服以外の姿を見たことが全くない。主のナツキでさえ。聞いた話によると姉からの贈り物なので、肌身離さず着ていたいとか。閑話休題。

「…まあ、もうあんな無茶はしないからさ。安心しろ」

「…うん」

そんな様子を見守り、安心させるように頭を撫でながらナツキが静かに呟く。手の感触に心地好さを覚えながら、フェイトも一言と共に頷いた。信じるに足る、兄の温かな優しさがあるから。

ミッドチルダの中央に位置する、複数のラインが合併したマンモス駅。そのベンチに、一人の少年が腰掛けていた。まだ十歳程であろうか、赤い髪が特徴的で、足元には円筒形の茶色いスポーツバッグ。状況から鑑みるに、どこからかやって来て誰かと待ち合わせをしているようだ。

「…あ、いたいた。おーいエリオー」

と、不意に名前を呼ばれた少年が、声をした方に目を遣る。水色の髪を伸ばし黒いスーツにコートを纏った九歳くらいの少女が、少年

目掛けて駆けて来るところだった。

「エリスさん！！お久しぶりです！！」

「久しぶり。にしても背え伸びたね。前はこーんなちっちゃかったのに」

再会の握手を交わしながらエリスと呼ばれた少女はニヤニヤと笑みを浮かべ、広げた手の平を腰辺りまで落としこのくらいとからかう。相変わらずの少女の態度に、少年の表情も少し和らいだ。

「エリス、その辺にしておけ。仮にもお前は上官だろう」

と、少女の背後からもう一人別の少女が現れ、軽い調子の少女を窘める。茶色いスーツに白いコートを纏い、ピンクの髪をポニーテールにした十九くらいの少女だ。

「えー、シグナムは堅苦し過ぎー」

「お前のように背が低い上官だと、ナメられることも多いからな」

「何をー！？言ったなー！？今度模擬戦でボコボコにしてやるー！！」

不平を漏らす少女にシグナムと呼ばれた少女は表情一つ変えず毒を吐き、シグナムより頭一つ以上低い身長少女は両手を上げて怒りをアピールする。が、

「遅れてすまない。遺失物管理部、機動六課のシグナム二等空尉だ。長旅ご苦労だったな」

「あ、はい！！私服で失礼します！！エリオ・モンディアル三等陸士です！！」

シグナムは少女を華麗にスルーし少年 エリオ・モンディアルに謝罪と名乗りを上げる。魔法の師匠とも言える少女のアウェーっぷりにぽかんとしつつも、エリオも敬礼と共に名乗り返した。

「ま、ボクは改めて言う必要もないと思うけど様式美つてことで遺失物管理部機動六課、エリス・テストロッサ執務官補佐だよ。ちゃんと修業してた？」

「はい、もちろんです」

やや不満そうな表情を浮かべながらも幼少期のフェイトにそっくりな少女 エリス・テストロッサも所属を名乗り、満面の笑顔を浮かべつつエリオの頭にぺしぺしとチョップ。ころころと表情を変え、少女に微笑み返し、エリオも頭を下げた。

「…もう一人は？」

「はい、まだ来てないみたいで…。あの、地方から出て来るとのことですので、迷ってるのかもしれませんが。探しに行ってもよろしいでしょうか？」

と、周囲を見回していたシグナムが一人足りないことに気が付きエリオに尋ねるが、残念ながら彼も所在を知らなかった。が、直後にそう繋げる真面目さを見て、思わず二人共表情を緩める。

「もちろん。ボクも手伝うよ」

「わかった。私は念の為此で待っているから頼む」

「はいっ！！」

即座に許可するエリスにシグナムも追従し、エリオも頭を下げながら駆け出す。こうして三人は、迷子搜索という初の共同任務を行うことになった。

ミッドチルダの首都高速を走る、一台の黒いスポーツカー。その中に四人の少女と、一人の青年が座っていた。…少女の中には一匹人外が混じっていたが。

「あー、ホントにこの子達なんだね、フォワード候補」

助手席に座ったのはがウィンドウを開きながら、感心したように呟きを漏らす。そこには今シグナムとエリスが迎えに行っている、フォワード候補の二人の情報が表示されていた。

「まだ子供だから、ちょっと心配なんだけどね」

「お前は過保護過ぎ。誰に似たんだ全く」

「どこからどう見てもナツキ君が原因なの」

心配そうに答えるフェイトに後部座席　　疲れたのかアスカとミサオに寄り掛かれたナツキが呆れたように呟くが、なのはに的確なカウンターを入れられ胸を押さえながらよろめくフリ。体の不自

由な実妹を介護しながら四年間も生きていた為か、十年前に出会った当初からナツキはなのはやフェイトだけでなく、年下の少女には凄まじく過保護だった。今となつては絵面的に危ないが、そこは見目の良さと優しさがカバーしている。…本人は自覚がないのかどちらも否定しているが。

「でも、能力的には全く問題なさそうだよ？」

「まあ、私の隊だし、一緒なら少しは安心かなって」

「…それはお前と違う隊の俺への当て付けか？」

「違うよ…、確かにちよつと残念だけど…」

二人の少女の穏やかな寝息をBGMにそんな会話を交わしながら、フェイトの運転する車は首都方面目掛けて疾走していった。

「ルシエさーん！！ルシエさーん！！管理局機動六課新隊員のルシエさーん！！いらっしやいませんかー！？」

やたらと広いミッドチルダの駅構内　そこで声を張り上げながら、引つ切り無しに周囲を見回し駆け回る少年がいた。無論、待ち人搜索中のエリオである。もし待ち人が気弱な性格ならこうして呼び回つていては名乗り出ることも難しいのだが、僅か十歳の少年にそれを求めるのは酷だろう。

「ルシエさーん！！」

「は、はい！！私ですー！！」

そのままエスカレーター周辺まで来た時、呼び掛けに応える声が聞こえた。慌ててそちらに振り向くと、マントとフードが合わさったような白いコートを纏った少女が重そうなバッグを抱え、エスカレーターを駆け降りて来るところだった。

「すみません、遅くなりまし…、あつ！！」

「っ！？」

重さにふらついたのか、フードで視界が狭まっていたのか。慣れない者が動く足場を駆け降りれば、足を踏み外すのは当然の理だった。

《S o n i c M o v e》

瞬間、エリオの意志に応えた右手首の腕時計がそれを告げた。黄色い輝きを纏ったエリオは人並みを縫いながら、エスカレーターの壁を反射するように蹴って駆け上がっていく。その様はまるで雷光のようだ。コンマ数秒で少女を拾い上げ、一つ上のフロアへ

「っ、わっ！？」

が、次の瞬間エリオがよろけた。魔法で高速移動する都合上、対象の重量によって魔力放出量は当然変化する。少女はエリオが見積もっていたより、ずっとずっと軽かったのだ。例えるならば、自転車^が急にジェットコースター並のスピードで動き出すようなもの。二人分をカバーするスピードが速過ぎて、エリオはバランスを崩したのだ。このままでは二人共纏めて落下してしまう。エリオはせめて少女だけは守ろうと自分が下になるよう体位を変え

《Sonic Move》

ようとした瞬間、金色の光が二人を通過。一つ上のフロアへと一瞬で跳躍する。光が消えた時そこにいたのは、エリオと少女を抱えたエリスだった。

「やれやれ、まだまだ甘いね。効果対象が増えたくらいで失敗してちゃ一人前には程遠いよ?」

「エリスさん…? どうして…」

「高いところから探そうと思って見渡してたら見えたから。ほら、あそこ」

不意に現れ窮地を救った少女は相変わらずの口調で至らぬ弟子をからかい、何故と問われたのでスタート地点　百メートル程先の時計台を指差す。つまり転んだ二人を見た瞬間、エリオと同じ魔法で百メートル先の二人を通過、落下してくる方に回り込んでから無事拾い上げたのだ。見た目こそ僅か九歳だが、そこにいるのは確実に一流の魔導師だった。

「…すごい」

「当然。ボクは一応師匠だよ?」

感嘆の溜め息を漏らすエリオに、胸を張りながら答えるエリス。言動こそ普通の少女だが、確かに彼女はエリオの師匠なのだ。

「キャラも大丈夫?」

「あ、はい。ありがとうございます。助かりました」

二人を解放したエリスは少女に目を遣り、キャロと呼ばれた少女は頭を下げる。

「…およ?」

と、エリスの視線の先、少女のバッグがもぞもぞと動き始めた。やがてそこから出て来たのは、一匹の小さな白い竜だった。

「あ、フリードもゴメンね。大丈夫だった?」

「きゅくる」

「竜の…、子供…?」

「あ、やっぱり普通はそっちだよな」

少女の声に応えるように、鳴き声と共にバサバサと翼を動かして飛び回る竜。それをエリオは呆然と、エリスは安心したように自分の主の使い魔龍が人型だからか　苦笑いを浮かべる。

「あの、すみませんでした。エリスさんとエリオ・モンディアル三等陸士…、ですよね?」

「いいのいいの。元気そうだし」

「あ、はい」

やがて向き直った少女が旧知の仲であるエリスに頭を下げ、初対面であるエリオに名前を確認する。エリスは手をひらひらと振って答え、エリオも我に返って頷いた。

「初めまして。キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。それからこの子はフリードリヒ。私の竜です」

「きゅー」

少女が思い出したようにフードを外すと、その上に竜が乗る。素顔が明らかになった桃色の髪をした十歳くらいの少女　キャロが敬礼と共に名乗りを上げ、頭から下ろした竜を抱き抱え二人に見せる。竜は再び翼を動かしながら、よろしくと言わんばかりに鳴き声を上げた。

ミッドチルダのとある都市、その一角に濁った色の結界が展開されていた。ベルカ式の結界　捉えた相手を逃がさない為の封鎖領域だ。

『ヴィータちゃん、ザフィーラ、追い込んだわ。ガジェット？型、そっちに三体』

ビルの屋上、翠色のベルカ式魔法陣を展開した一人の影がある。シヨートの金髪にイヤリング、はやてと同じ茶色いスーツに白衣を纏った二十前半くらいの女性　シャルだ。

シャルの思念通話を受けた蒼い大型の狼　ザフィーラが眼前を見遣ると同時、それが現れる。カプセルのような形をした魔導機械ガジェット　彼らの標的だ。

「おおおおあああつー!!」

ザフィーラが雄叫びを上げた瞬間、白い光が槍のように大地から突き立ちガジェットの一部を串刺し、爆散させた。逃げるようにして爆煙の中から、残り二体のガジェットが現れる。

「でえええええっ!!」

が、紅いお下げ髪をしたベルト付きの紅いコートにスパッツを着た八歳くらいの少女　　ヴィータが一瞬の隙を見て取り、己の得物である鉄槌を振りかぶりながら突貫。小柄ながらも全身のバネを活かした力強い一撃によって、二体目のガジェットがビルを突き破りながら爆発した。それを見もせずヴィータはそのまま地を蹴って飛翔、上空に逃れようとする三体目の前方に回り込む。

「アイゼン!!」

《Schwalbefliegen》

マスター

主人の声に応えた鉄槌

グラーフアイゼンが鈍い輝きを放ち、

紅い光と共に手の平大の鉄球を生成した。ヴィータがそれを宙に放り投げアイゼンの頭部を叩き付けた瞬間、紅き光を纏った鉄球が流星の如く飛翔。最後の一体を貫き爆散させた。

「片付いたか」

「シャマル、残りは？」

『残存反応…、っ！？すぐ近くに五体!!』

爆発炎上した三体目を見遣り、確認の為思念通話を飛ばすザフィーラとヴィータ。が、シャマルに返された言葉は二人が予想だにしない答えだった。

「「なっ…!？」」

二人が振り返った瞬間、ヴィータの眼前に二体、ザフィーラを囲むように三体。目のようにも見えるカプセル中央の黄色い水晶から、青いレーザーが放たれる。完全に不意を突かれた上での集中砲火。回避も防御も間に合わない。

「アクセル」

「温いわよ」

いかに見えたが、青年の声と共にヴィータの姿が消え、少女の声と共に漆黒のドームがザフィーラを覆う。天の砲火は無駄撃ちに終わり、地の攻撃は無力化された。

ガジェットが慌てて状況を確認しようと周囲をサーチすると、背後に一つの存在を捉える。フェイトのものによく似た漆黒の軍服の上から同色のコートを纏い、左腕でヴィータを抱き抱えた青年だ。右手には白銀の刀が握られており、それがこれからどう使われるのかは考えるまでもない。何故ならガジェットは 彼の仲間に手を出したのだから。

「消える」

《Gravity Zamber》

右手の刀　アクセルが漆黒の輝きを纏うと同時に、ナツキはそれを振りかぶる。神速で放たれた斬撃は一瞬で二体のガジェットを両断し、破片一つ残さず爆散させた。

「シュート!!」

「穿て!!」

同時に地上でも桜色と純白の弾丸が放たれ、ガジェットを二体破壊する。一瞬で形勢不利となったガジェットは逃げ出すように空へ逃れるが、それを蒼い弾丸が貫いた。落下し始めるガジェットを蒼い弾丸はなおも的確に穿ち続け、地表に至る頃には鉄屑の山へと早変わりしていた。

「やれやれ…。ナツキさんとユキさんが出るならあたいたいらないと思うんですけど」

狭い路地からユキとザフィーラの方へと歩いて来ながら、蒼き弾丸の射手が愚痴るように呟く。蒼いショートカットに下縁メガネ、カジュアルなデザインのバリアジャケットに漆黒のコート。両手に拳銃型デバイスを握った彼女は鳳ソラ　ナツキ達がヘリで話していた『八人目』だ。

「阿呆。これが我等ヴァイスシュヴァルツの勤めであろう」

「まあまあ、なんだかんだ言いつつもしっかりやってきてますしイリヤもその辺で」

と、空からふわりと降り立った幼少期のはやてによく似た少女　八神イリヤがソラを窘め、さっきも二十程仕留めてくれましたし

と幼少期のなのによく似た少女　高町シオンがイリヤを宥める。二人共外見は九歳程だが、管理局に十年も勤めているベテラン魔導師だ。

「ソラ、アルニカとラタスクの調子は？」

「幸か不幸か絶好調っす。働けと言わんばかりに」

ザフィーラを庇い漆黒のバリアを張った、ゴスロリドレスに漆黒のコート、左手に十字架と翼を歪めて作られた杖を握る銀髪赤目の少女　天城ユキの質問に、ソラはやれやれと溜め息混じりに両手右手のアルニカと左手のラタスクを見せびらかすように振った。

「ヴィータ、怪我ないか？」

「ああ…。悪い…。手間掛けさせて…」

「気にすんな。仲間だろ」

「…うん」

地上に降り立ちヴィータを案じるナツキに、ヴィータはばつの悪そうな表情で謝る。が、笑みと共に頭を撫でられ、少しでも表情を緩めた。子供扱いとも取れるそれを嫌がる彼女にしては珍しいことに、ナツキのそれは問題ないようだ。

「出現の頻度も数も、増えているな」

「動きも段々賢くなってきてるわ。面倒なことだね」

ガジェットの残骸を眺めながら呟くザフィーラに頷きながら、ユキが彼の背中に横座りする。危ないところを助けてもらった為かザフィーラは文句一つ言わずそのまま、その様子は忠犬という言葉を彷彿とさせる。…彼は狼だが。

「でもこれくらいならまだ、ヴァイスシュヴァルツを出さなくても私達だけで…」

「不意打ちとはいえ思いつ切りやられそうだったがな」

「うっ…」

ビルからふわりと降り立ちながらポジティブに呟くシャルだが、イリヤに先程のミスを指摘され縮こまる。こちらに合流しようとしたナツキとユキ（リーダー達）の判断はどうやら正しかったようだ

「ま、アスカやミサオもそのうち経験の為出させるから、白黒一人とお前らだけでもまだ行けるだろ」

「そうだな」

「ド新人に任せるには、ちょっと面倒な相手だけだね」

「仕方ないでしょう。今はまだ大丈夫ですが、いずれ私達だけでは手が足りなくなります」

アスカやソラ達黒を束ねるナツキがフォローするように増援しつつの現状維持を決め、ザフィーラが短くそれに答える。エリス達マテリアルを束ねる白のリーダーであるユキは溜め息混じりに呟くが、

反論するシオンの言も理に敵っている。

「その為の新部隊だもの」

シヤマルの声に全員が頷き、近々稼働を開始する新部隊に思いを馳せる。あくまで保守管理をメインにするはやて達とガジェットウァイスシュヴァルツの殲滅などを主とする白黒 二つ合わさった機動六課（新部隊）を。

「はやての表とナツキの裏

新部隊機動六課、か…」

空を見上げながら小さく呟くヴィータの言葉は、新雪のように宙に溶けて。誰の耳にも、届くことはなかった。

第二話「機動六課」 後編（後書き）

とりあえずみんな出揃った…、かな？w
無理矢理感が否めないけど（ry

第三話「集結」 前編（前書き）

はい、三話です。いよいよフォワードと問題児？が顔合わせです。
ではごーぞー。

第三話「集結」 前編

新暦75年4月。時空管理局遺失物対策部隊、機動六課隊舎。その部隊長オフィスに、三人の少女がいた。

「ふふっ このお部屋も、やっと隊長室らしくなったですね」

「そやねー。ラインのデスクも、ちょうどええのが見付かってよかったなあ」

「えへへー リンにピッタリサイズですー」

「苦勞して探した甲斐があつたな」

ミニチュアサイズのデスクとセットの椅子に腰掛けくると回っているのは、リンことラインフォース？。あまりのはしゃぎっぷりに両隣のデスクに座ったはやてとラインフォースも笑みを零す。管理局で働いていたとしても、やはりリンは年相応の少女なのだと、入室希望のブザーが鳴り、はやては外の来客を促す。

「失礼します」

「ちーっす」

「はろー」

中に入って来たのは、陸士部隊制服である茶色いスーツに着替えたなのは、フェイト、ナツキ、ユキの四人であった。

「あ、お着替え終了やな」

「四人共バッチリ似合ってるです」

「にやはは…」

「ありがと、リイン」

「天城達は窮屈そうだな」

「堅苦しいの嫌いなんだよな…」

「あたしも本局制服は着崩してたしねー」

素直に喜びを表す三人娘＋リインとは対照的に、天城兄妹は苦笑い。リインフォースにそのことを指摘され、肩を竦めることで答えた。…誰とは言わないが約一名、かつて制服を跡形もなく改造した人物もいるのだが。

「五人で同じ制服姿は、中学校の時以来やね。なんや懐かしいなあ。まあ、なのはちゃんも飛んだり跳ねたりしやすい教導隊制服でいる時間の方が多くなるかもしれへんけど」

「まあ、事務仕事とか公式の場ではこっち、ってことで」

ナツキだけ一つ年上なので五年ぶりとなる、このメンバーの同じ制服姿。なのはもどちらかと言うと動き回るのが仕事な為着る機会は少ないが、それでもやはり同じ制服というのは不思議な連帯感を生み出す。

「…さて、それじゃ改めて。本日ただいまより、天城ナツキ執務官」

「高町なのは一等空尉」

「フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官」

「天城ユキ執務官補佐兼技術開発兼肩書き多いので以下省略」

「四名共、機動六課へ出向となります。どうぞよろしく願います」

「はい、よろしくお願いします」

話が途切れたタイミングを見計らい、四人が姿勢を正し敬礼。上司となるはやてに様式美として出向の通達をして、はやてとリン達も敬礼。そのまま数秒全員が同じポーズで固まって、誰からともなく笑いが漏れる。気心の知れた親友なのに、今更こんな挨拶をしているのがおかしく思えたのだ。

と、再び入室希望のブザーが鳴る。はやてが促すと、一人の青年が入って来た。二十前半くらいだろうか、薄い藍色の髪と下縁メガネが特徴的な、はやて達と同じ格好の青年だった。

「失礼します。…あ、高町一等空尉。テストロッサ・ハラOWN執務官に、天城執務官達も。ご無沙汰しています」

「………？」

入室と同時に、視界に入った面識のあるエース達に慌てて敬礼するも、女子三人組は頭に疑問符を浮かべ首を傾げる。

「…あ、グリフィス？」

「はい、グリフィス・ロウランです」

思わず脱力しそうになるも確認するようなナツキのセリフに頷き彼
グリフィス・ロウランは安堵の溜め息。

「うわー久しぶりー！！ていうかすごい成長してるー！！」

「うん、前見た時はこんなちっちゃかったのに」

「…人のこと言えるのか、お前ら」

「その説は色々お世話になりました」

それを聞いて思い出したのかはしやぎ始めるのはとフェイトに、
当時あまり身長が変わらなかったことにツッコミを入れるナツキ。
ややハイテンションで交わされる言葉に気圧されながらも、グリフ
イスは頭を下げた。

「グリフィスもここの部隊員？」

「主の副官で、交替部隊の責任者だ。運営関係も色々手伝ってもら
っている」

「お母さん…、レティ提督はお元気？」

「はい、おかげさまで。…あ、報告してもよろしいでしょうか」

「ん、どうぞ」

服装からわかっていたが確認するように問い掛けた言葉に背後からリンフォースが補足し、旧知の中である彼の母の現状を尋ね、返された答えにニコニコと笑うフェイト。と、急な再会と妙なテンションに流されていたグリフィスは本題を思い出し、はやてに報告の許可を取る。知り合いなのに真面目な青年である。

「フォワード六名、シオンさん達を始め機動六課部隊員のスタッフ、全員揃いました。今はロビーに集合、待機させています」

「そっか、結構早かったな？ほんならナツキ君、なのはちゃん、フエイトちゃんにユキちゃんも、まずは部隊のみんなにご挨拶や」

「うんっ！！」

「了解」

全員集合の報を受け、規定時間より早いことに笑みを浮かべながら四人を促すはやて。親友の言葉に笑顔で頷き、隊長達はロビー目指して移動し始めた。

隊舎のロビーには、既に数十人のメンバーが集まっていた。その中には勿論スバルやティアナ、エリオにキャロ、アスカ、ソラも混じっている。彼らの正面に設置された雑壇の左右には、なのは達隊長陣やリンフォース達ヴォルケンリッターらが整列。そして中央に、部隊長の八神はやてが上る。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

はやてが挨拶すると同時、全員から拍手の雨が贈られる。その場の者達が全員、己の意志でここへ来たことを再確認出来る光景だった。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守って行くことが、私達の使命であり、成すべきことです」

スバルとティアナは聞く。自らをこの部隊に抜擢しようとした者の想いを。四年もの歳月を費やして、今ようやくその始まりを告げんとする声を。

「実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性に溢れたフォワード陣。それぞれ、優れた専門技術の持ち主の、メカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって、事件に立ち向かっていけると信じています」

エリオとキャラは感じる。この場に集った全員の力と、部隊長の言葉に心えんとする意志を。そして何より、部隊長からの温かな信頼を。

「……ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした。では最後に、管理局最強と名高い天城ナツキ執務官に一言いただこうと思いまーす」

「……………はあ!？」

一通りの話を終えたはやてはふとニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、右側に整列するナツキにとんでもない無茶ぶりをした。あまりにも平然と言われた為反応出来ず、数秒経ってからやっとツツコミを入れるナツキ。

「何だよそれ！？聞いてねえぞ！？」

「うん。だって思い付きやもん」

「…にやろう。後で覚えてろよ」

「おお、怖い怖い」

「…えー、アドリブなんで何も考えてないし、長く続けるつもりもないんで手短に」

コントのようなボケとツツコミを交わしながらも敗北を悟り、溜め息混じりに雛壇へと上るナツキ。半ば無理矢理なのに最終的には応えてしまう辺り、彼も大概お人好しである。

「俺はただ全力で前に進んで、守る為に刃を振るうことしか出来なただのバカです。なのでバカはバカなりにみんなが安心して仕事出来るように死ぬ気で頑張るんで、みんなも死なない程度に本気で頑張って下さい。以上」

幾多の修羅場へと赴き、それを潜り抜けて来た彼だからこそか。その言葉には、絶対の信頼を抱かせる何かがあった。聴衆は今更ながら、目の前にいるのがあの管理局最強なのだと改めて実感する。やや自虐的な部分もあったが、それでも彼の言葉は強い意志に溢れていて。気が付けば場にいた全員が、はやて登場時に勝るとも劣らない拍手を送っていた。

こうして、サプライズ混じりの六課舞台挨拶は終わりを告げた。ちなみにはやては後程ナツキから、割と本気のデコピンをもらったそう。めでたしめでたし。

「シグナム、ほんと久しぶりです」

「ああ。直接会うのは半年ぶりか」

「はい。同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞよろしくお願いします」

舞台挨拶を終え、フェイトは久しぶりにシグナムと会っていた。十年前からよきライバルだった二人だが、仕事などの都合で会う機会が徐々に減ってしまってしまった為、最近では手合わせの一つもしていない。そのことを前に嘆いていたのを思い出し、フェイトは少し頬を緩めながらもぺこりと頭を下げる。

「こちらのセリフだ。大体、お前は私の直属の上司だぞ」

「それがまた、なんとも落ち着かないんですが」

夜天の書の守護騎士プログラムであるシグナム達やマテリアルであるシオン達には成長という概念がない。かつては頭一個分以上違った身長も今ではそう変わらないが、あくまでフェイトにとってシグナムは目上の存在。なのいきなり自分が上司と言われても、どう対応すればいいのか迷ってしまうだろう。

「上司と部下だからな。テストロッサにお前呼ばわりもよくないか。敬語でしゃべった方がいいか？」

「そういう意地悪はやめて下さい。いいですよテストロッサで、お

前で」

「ふっ、そうさせてもらおう」

そんなフェイトをからかうようにシグナムが問い掛け、フェイトも苦笑いと共に答える。彼女なりの冗談と気遣いに、思わず表情を緩める。気にせず今まで通りでいいんだと納得し、二人は再び廊下を歩き始めた。

「そういえば、お互いの自己紹介はもう済んだ？」

「名前と、経験やスキルの確認はしました」

「あと部隊分けと、コールサインもです」

「私は、エリオやキャロとは知り合いだったから」

所変わって反対側の廊下。フォワード陣である六人を率いて歩いてきたのはが、振り返りながらふとそんなことを尋ねた。司令塔であるセンターガードに当たるティアナがすぐに応え、エリオとアスカも追従して答える。とは言っても所属上、アスカやソラはフォワードとは別で動くこともあるのだが。

「そう。じゃあ訓練に入りたいんだけど、いいかな？」

「……はいっ!!」「……」

「……はい」

「へーい」

満足げに頷き早速教導を始めようとするのはに四人が元気よく答え、アス力は素であるローテンションで、誰とは言わないが約一名あからさまにやる気のない声で答える。苦笑いしながらも集合場所を告げ、なのははその場を後にした。

隊舎屋上、そこに一機のヘリが待機していた。戦車の頭部を飛行機の胴体部に差し替えたようなフォルム、とても言うべきだろうか。やや角張った印象を受けるそのプロペラは既に回転していて、発進準備は万端と言わんばかりだ。

「あ、ヴァイス君。もう準備出来たんか？」

「準備万端。いつでも出れますぜ？」

と、扉が開き屋上に三人の少女が出て来た。先頭のはやてがヘリの傍で待機していた青年に問い掛けると、ヴァイスと呼ばれた彼は軽い調子で答えた。グリーン系のパイロットスーツを着た二十前半くらいの男性　パイロットのヴァイス・グランセニツクだ。

「わあ…、このヘリ、結構新型なんじゃない？」

「JF704式。一昨年から武装隊で採用され始めた新鋭機です。機動力も積載能力も一級品つすよ。こんな機体に乗れるってなあ、パイロットとしちゃあ幸せでしてねえ」

驚いたように感嘆の溜め息を漏らすフェイトに、軽く性能を説明しながら嬉しそうな笑みを浮かべるヴァイス。確かにそんな機体なら、それを持ちこなすパイロットとしてこんなに嬉しいことはないだろうが、

「もう！！ヴァイス陸曹はみんなの命を乗せる乗り物のパイロットなんですから、ちゃんとしてないとダメですよぉ！！」

「へいへい、わかってまさあね。リイン曹長」

その悪ガキみたいな笑みに不安を抱いたのか、リインがビシッと指を突き付けながらやや強い口調で窘める。根が真面目な上司に苦笑いしつつ、ヴァイスは片手を上げて答えながら踵を返す。

「八神隊長、フェイトさん、行き先はどちらに？」

「首都クラナガン」

「中央管理局まで」

運転席に乗り込みながらコンソールを操作して、二人に行き先を尋ねるヴァイス。シートに座りながら二人が告げた行き先はミッドチルダの中央、地上本部までとのことだった。

「了解。行くぜ、ストームレイダー」

《OK・Take off・Standby》

承諾しながらヴァイスは相棒に呼び掛け、ストームレイダーは離陸を開始する。轟音と暴風を奏でながら、ヘリは首都方面へと飛び立

って行った。

「なのはさーん」

「やほー」

「シャーリー！！ユキちゃんも！！」

挨拶が終わり元の教導隊制服に戻ったなのはが、集合したフォワード陣を見回していると二人の少女の声が響いた。振り返るとトランクを引きずる眼鏡を掛けた長い茶髪の少女と、そのトランクに腰掛けた銀髪の少女がこちらに駆けて来るところだった。名前を呼ばれ反応した銀髪の少女　ユキが宙に発生させた黒い穴をこそごとと漁り、スバル達四名にデバイスを返して行く。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから、ちよつとだけ大切に扱ってね」

「あたしが作ったんだからそう簡単には壊れないけどね」

「ですよねー」

前日に回収されていたデバイスを不思議そうに眺める四人に、なのはが補足で説明する。どこからともなく取り出した苺オレイン湯呑みに砂糖とミルクをドバドバと注ぎ込みながら付け足すユキに、眼鏡の少女も同意する。

「あ、紹介するね。ヴァイス分隊　通称『白』の隊長さんで、

メカニックも兼任してるユキちゃんと、メカニックデザイナー兼六課の通信主任で、ユキちゃんに弟子入りしてるシャーリー」

「はろー新人共。一部除いて初めましてかな。間違ってもゆっきーとか呼んじゃダメよ。甘いの持って来たら優遇したげる」

「シャーリオ・フィニーノ一等陸士です。シャーリーって呼んでね。甘いの持って来たら優遇するから」

ぽかんと二人の少女を眺める四人に苦笑いしながら、なのはがユキと少女を紹介する。話を振られたユキは半ば適当に挨拶を済ませ、シャーリーと呼ばれた少女も真面目なんだかふざけてるんだかよくわからない自己紹介をする。

「…えーと、まあ。デバイス管理がお仕事なので、たまに訓練を見に来るから。デバイスについての相談は、この二人に通してね」

「……は、はい……」

過剰どころかオーバーキルレベルに甘味が注ぎ込まれた苺オレもはや半液体と言うべき何か、通称「ユキオレ」を啜りながらほうと至福の溜め息をつく二人から視線を外し、なのはが苦笑いと共にまともな紹介をする。面識のないスバル達の額が冷や汗だらけなのもある意味仕方ない。

「…じゃあ、早速訓練に入ろうか」

「は、はい」

「でも、ここですか？」

気を取り直して訓練開始を告げるなのは、疑問の表情を浮かべるスバルとティアナ。眼前には隊舎の倍程度の面積を持つ、鈍色の足場が海に浮いているだけ。そんな場所で何をするのかと言いたげに、他の四人も首を傾げる。

「ふふっ、ユキちゃん」

「シャーリー、後で板チョコあげるから代わりよろしく」

「ラジャー!!」

そんな六人に笑みを漏らしながらなのはが左手を翳しかつこよくユキに合図するが、ユキの脱力した声のせいで台無しになる。板チョコで買収されたシャーリーは師匠に答え、なのはの要望通りウィンドウを展開する。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさんとユキさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター。ステージ、セット」

ユキ程ではないにしろ、大量のウィンドウを展開し一斉に操作するシャーリー。一通りの設定を終え『Stage Set』のパネルをタッチした瞬間、異変が起きた。

何もなかった海面の足場から、突如ビル街のホログラムが浮き上がり実体化。あっという間に市街地戦用のステージへと早変わりしたのだ。管理局の技術の最先端を切り開く少女、天城ユキ。その本気を目の当たりにして、全員言葉を失って見入っていた。

そんな光景を、隊舎の屋上から見守る影が二つ。陸士部隊制服に紅いお下げの少女と、黒い髪と和服に赤いリボンの少女だ。

「ヴィータ、ミサオも。ここにいたのか」

「シグナムか」

「おお、久しいの」

不意に背後から現れた三人目　シグナムの声に振り返り、ヴィータとミサオが短く答える。縁に立つヴィータと座るミサオの間に立ち、視線の先を追って現状を理解した。

「新人達が早速やってるようだな。お前達は参加しないのか？」

「わしは子供じゃからの。得物も違うし、人に教えられるようなものではない」

「アスカやソラはともかく、他の四人はまだよち歩きのひよっこだ。あたしが教導を手伝うのはもうちょっと先だな」

納得したようなシグナムの呟きと質問に、ミサオは手をひらひらと振りながら、ヴィータも肩を竦めながら答える。ミサオの扱う魔法はミッド式でもベルカ式でもない上、戦闘スタイルが独創的過ぎて他に真似する者がいない。未だスバル達四人はBランクだし、そのくらいならなのは一人でも十分相手出来る。ヴィータはそれにと繋ぎながら、もう一つの理由を語る。

「自分の訓練もしたいしさ……。あたしはナツキとなのはを守らないといけねえ」

「じゃな。わしらがしっかり主を守らねば」

かつて目の前で、それも二回。自らの大事な仲間を落とされ、片方に至っては庇われた拳句死の淵を彷徨った。もうあんな思いはしたくない、させたくないという決意を胸に、紅い少女達ヴィータとミサオはここまで来たのだから。

「…頼むぞ」

「ああ」

「うむ」

シグナムの言葉に頷き、ヴィータとミサオは静かに頷く。見た目も同じ年くらい、しかも似た立場で共感するものがあるのか、もっぱら模擬戦や訓練は二人で一緒のことが多く息もピッタリだった。

「…そういえばシャマルは？」

「自分の城だ」

ふと思い出したようなヴィータの質問に、シグナムは苦笑いしながら答える。言葉の意味を考えて、理解した二人はああと納得し空を仰いだ。

一方その頃、隊舎内医務室。そこに歓喜の声を上げる三人の姿があった。

「ん、いい設備　これなら検査も処置もかなりしつかり出来るわね」

デスクに座りニコニコと満面の笑みを見せるのは、陸士部隊の制服に白衣を着たシャマル。治療や補助の魔法に特化した彼女は、六課内で医療担当の任を任されていた。その為の医務室　大袈裟に言えば自分の為の部屋を与えられて、テンションは最高潮という訳だ。

「本局医療施設の払い下げ品ですが、実用にはまだまだ十分ですよ！！」

「みんなの治療や検査、よろしく願いしますね。シャマル先生」

「はい」

搬入された設備の設置を手伝っていた紫のショートヘアーの少女

通信士担当のルキノ・リリエも興奮したように言葉を漏らす。

もう一人のブラウンのショートヘアーの少女　アルト・クラエツタもやや浮かれ気味にシャマルに呼び掛け、シャマル自身も嬉しそうに答える。…以降、シャマルが医務室に籠りきりになったのは言うまでもないだろう。

市街地を展開した空間シュミレーター、とあるビルの頂上。なのは、ユキ、シャーリーの三名が、眼下の六人を見遣る。約一名を除き、やる気満々のようだ。

「よし、と。みんな、聞こえる？」

「……はい」

「じゃ、早速ターゲットを出していいどうか。まずは軽く八体から、かな？」

「ユキさん、レベル設定は？」

「動作レベルCの攻撃精度D。約二名には物足りないだろうけど、数を倍にしてあげればいいわ」

「了解。十六体出しますよー」

威勢のいい返事に頷きながら、なのはが二人に指示。ユキの分析によりレベルを決定し、シャーリーがタッチパネルで設定を行っている。

「私達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。その目的のために、私達が戦うことになる相手は…、これ！！」

確認するように言葉を紡ぐなのはに合わせ、シャーリーが最後のパネルをタッチ。六人の眼前にミッド式の魔法陣が展開し、その中から奇妙なものが迫り出して来た。

カプセル状のボディの中央に、黄色い水晶が一つ。目のように見えるそれを囲むように、四つのセンサーが取り付けられている。機械製のそれは、以前ナツキやヴィータ達が始末していたターゲットと同じだった。

「自立行動型の魔導機械。これは近付くと攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ？」

首を傾げるフォワード四名だが、シャーリーの補足説明に納得しデ

バイスをセットアップ。各々臨戦体勢を整え、準備は万端と言わんばかりだ。…やはり約一名はやる気なさ気だったが。

「では、第一回模擬戦訓練。ミッション目的、逃走するターゲット十六体の破壊、または捕獲。割り振りはアスカとソラが四体ずつ、残り四人で八体。十五分以内で」

「……はいつ……」

「…ん」

「やれやれ……」

なのはがおさらいするように目標を告げ、四人が元氣よく答える。アスカも短く頷き、ソラも溜め息混じりに二丁拳銃デバイスを握り直す。

「それでは……」

「ミッション……」

「スタート」

なのは達三人の声がシンクロし開始を告げた瞬間、カプセルガジェットが逃走を開始する。気合いを入れ直した六人は、ターゲットを追って駆け出した。

第三話「集結」 前編（後書き）

まあ今回はこんなもんでしょうか。全然進まなくてホントすいませ
んorz

…え？ユキオレ？ハハハナンノコトヤラ（オイ

第三話「集結」 後編（前書き）

はい、三話後編です。アスカとソラがちよつとだけ暴れます（えではどーぞ！）。

第三話「集結」 後編

時空管理局ミッドチルダ地上本部、中央議事センター。その中の会議室に、二十名程の人間が集まっていた。彼らの視線は壁際に立つ二人の少女　　フェイトとはやてに集中している。上層部の人間に六課の仕事についてを発表すること、前々から時間を取っておいて欲しいと頼まれていたのだ。

「搜索指定遺失物　　ロストロギアについては、皆さんよくご存知のことと思います。様々な世界で生じたオーバーテクノロジーの内、消滅した世界や古代文明を歴史に持つ世界において発見される、危険度の高い古代遺産。特に大規模な災害や事件を巻き起こす可能性のあるロストロギアは、正しい管理を行わなければなりません、盗掘や密輸による流通ルートが存在するのも確かです」

機動六課の部隊長である、八神はやての言葉に全員が耳を傾ける。エース・オブ・エースを始めとして管理局最速、歩くロストロギアに狂気の魔女、拳句の果てに管理局最強まで引き込んだ、管理局最大級の戦力を持つ精鋭部隊。その発祥と意味を知るべく場の全員が、彼女の一言一句を聞き漏らすまいと集中する。

「さて、我々機動六課が設立されたのには、一つの理由があります。第一種搜索指定ロストロギア、通称レリック」

「このレリック、外観はただの宝石ですが、古代文明時代になんらかの目的で作成された、超高エネルギー結晶体であることが判明しています。レリックは過去に四度発見され、そのうち三度は周辺を巻き込む大規模な災害を起こしています」

レリック トランクのような箱に入った赤い宝石をスライドで映しながらのはやての説明を引き継ぐようにして、フェイトがその遺失物の危険性を述べた。四年前 スバルやアス力が巻き込まれた空港火災を筆頭に大規模な災害の映像を見せられ、聴衆もにわかにざわめき始める。超^{レリック}高エネルギー結晶体 言い換えるならばそれは、大量の火薬が詰め込まれた箱。少しでも刺激を与えたら、暴発して災厄を招きかねない危険な代物だ。

「そして後者二件では、このような拠点が発見されています。極めて高度な、魔力エネルギー研究施設です。発見されたのは、いずれも未開の世界。こういった施設の建造は許可されていない地区で、災害発生直後に、まるで足跡を消すように破棄されています。悪意がある 少なくとも法や人々の平穏を守る気のない、何者かがレリックを収集し、運用しようとしている。広域次元犯罪の可能性が高いのです」

更になんらかの研究施設らしき写真を映しながら、フェイトがトドメとも言える言葉を放つ。そんな危険なモノを収集し、管理局の目が届かないような世界で違法研究。端的に言えばそれだけだが、それが人々にどのような被害を及ぼすのかは語られるまでもない。正に地獄 最悪の事態になりかねない。

「そして、その何者かが使用していると思われる魔導機械がこちら。通称、ガジェットドローン。レリックを始め特定のロストログアの反応を搜索し、それを回収しようとする自立行動型の自動機械です」
フェイトは補足するように、もう一枚のスライドを映す。先日兄や同僚らが片付けて来た、カプセル型の魔導機械。野放しにしておけば、それこそ後に何が起きるかわからない。だから発見し次第それらを叩く それがナツキやユキをリーダーに据えた、六課にあ

って別権限を持つ分隊。ヴァイスシュヴァルツの仕事なのだ。

「んー、今頃新人達もガジェットとご対面かな？」

「見た目アホっぱいから侮ると厄介だけだな」

漆黒のバリアジャケットとコートに身を包んだエリスが、路地裏の壁に寄り掛かり言葉を漏らす。デバイスを元に戻しながら、ナツキが苦笑しながら答えた。確かにあのどこか間の抜けたデザインは、なんとなく相手を脱力させる。初めて見た時は、全員毒気を抜かれ動きを止めてしまい、エリスやミサオに至っては腹を抱えて笑っていたのを思い出しナツキは一人苦笑い。

「まあ、あの程度ならばまだなんとかなるでしょう。経験さえ積めば実戦でも渡り合えるはずです」

「ほう？戦技教導官のシオンがそう言うのなら…、少しは期待しても構わんのだろう？」

「努力するのは私ではないので。彼女達に聞いて下さい」

桜色と漆黒の翼を消しながら、シオンとイリヤもふわりと舞い降りる。なのは同様戦技教導官の資格を持つシオンもいずれなのは手伝いに行く予定があり、そのタイミングでエリスとイリヤもフォワード陣と共に修業するつもりらしい。

「しかし悪いな…。アスカやソラに付いたりなのはやフェイトの手伝いする都合上、お前らと一緒にの出動はあんまりなくなっちまって

…」

ナツキが仕切るシュヴァルツ分隊の所属であるアスカとソラ。恋人であり掛け替えないパートナーであるのはとフェイト。彼女達のことも放って置けない為、自然とナツキもシオン達との接点が少なくなってしまうのだ。信頼していない訳ではないが、やはり心配さは拭い切れない。

「ま、最強様は彼女さん達に引つ張り尻だもんね」

「元々我等は三人一組で動く為に作られたからな。ナツキがいなくても十分やっていける」

「私達は十年前、あなたに忠誠を誓いました。ナツキがそう望むのであれば、私達は全力でそれに応えるまでです」

すまなそうに謝る主人に対し、エリスは茶化しながら、イリヤは皮肉げに、シオンは微笑みながら問題ないと告げる。十年前消えるはずだった命を、名前を与えて救ってくれたから。だから三人は掛け値なしにナツキを信頼出来るし、彼の為ならばなんだってする。どこまでも真っ直ぐな、それは温かな絆。

「…ホント、仲間思いな連中に囲まれて幸せだな。俺は」

そんな三人に三度苦笑いし、ナツキは山の頂上からスタツと降り立つ。グリフィスに終了の連絡と回収の依頼を済ませ、バリアジャケットを解除しながら歩き出す。

「さ、帰ろうぜ」

「はい」

「うんっ！！」

「ああ」

優しく笑うナツキを先頭に、三人は狭い路地裏を後にする。もはや全員の頭から、ここで起きた出来事は消えていた。

数十からなるガジェットを徹底的に破壊し尽くし、小さな山を築き上げたことは。

無人の市街地を、ローラーで駆けて行く一人の少女がいた。言うまでもなく、ガジェットを追っているスバル・ナカジマだ。

「はあああああっ！！！」

狭い路地を疾走しながら、スバルは地を蹴ってリボルバーナックルを構えた。ナックルスピナーを回転させ魔力を集束、練り上げた青い弾丸を標的目掛けて発射する！！

が、四体のガジェットはそれを軽々と避け、何事もなかったかのよう^{ガジェット}に移動していく。見た目に反し、ガジェットらはスバル以上の速度を出していた。

「何これ！？動き速っ！！！」

避けられたことに驚くスバルの視界の先、ガジェットの行く手を阻むようにして青い槍を構えた一人の少年 エリオが立っていた。

ガジェットが迎撃の青いレーザーを水晶から飛ばす中、エリオはその隙間を縫いながら接近。ビルの壁を使い跳躍し、槍を連続で振るう。斬撃の際魔力により、周囲の空気を圧縮・加速。空気の刃となったそれは、一斉にガジェットに襲い掛かる。

が、ガジェットはこれまた軽々と、残像さえ見える程の速度で回避。そのまま崩れるビルやエリオに目もくれず、あっという間に逃走した。

「ダメだ……。ふわふわ避けられて当たらない……」

『前衛二人、分散し過ぎ！！ちよつとは後ろのこと考えて！！』

『あ、はい！！』

『ゴメン！！』

仕留めるどころか攻撃を当てることすら出来ず悔しげに呻くエリオだが、ティアナに一喝されスバル共々謝る。ビルの屋上から状況を見守っていたティアナはアンカーガンを構え、合流したガジェットに狙いを定める。

「キャロ、威力強化お願い」

「はい。ケリユケイオン」

《Boost Up・Barret Power》

銃口に魔力を集束させながら、ティアナがキャロに指示を飛ばす。キャロは両手に付けられたグローブ状ブーストデバイス、『ケリユケイオン』に呼び掛ける。彼女のデバイスはブーストの名前通り、

主に他者の魔法の強化・補助などがメイン。なので最前線には出ず、同じ後方型のティアナのバックアップに回る。

「シュウウウウツッ!!」

キャロのブーストで一回り大きくなった弾丸を、ティアナは四発発射。ガジェットを的確に穿つべく放たれたティアナとキャロ渾身の弾丸はしかし、周囲の空間を歪めたような壁によって掻き消された。

「バリア!？」

「違います。フィールド系……!!」

「魔力が消された!？」

あっさりと消えてしまった弾丸に対し口々に疑問を飛ばす中、ビル縁に腰掛け訓練を見ていたユキがニヤリと笑い、そうと頷きながらなのはが種明かしをする。

「ガジェットドローンには、ちょっと厄介な性質があるの。攻撃魔力を掻き消すAMF アンチマギングフィールド。普通の射撃は通じないし……」

「ああ、くそっ!! 逃がすかつ!!」

「スバル!! バカ、危ない!!」

なのはが語る間に逃げ出すガジェットに舌打ちし、スバルがウイングロードを展開。何かに気付いたティアナが制止するも、スバルは既に魔力の道を駆け上がっていた。

「それに、A M Fを全開にされると…」

「えっ、わっ、きゃああああっ!？」

なのはが続きを呟くと同時、シャーリーが一つのパネルを押す。瞬間、ウイングロードが何の前触れもなく消失した。不意に足場を失ったスバルは、悲鳴と共にビルの中に放り出されてしまい、やつぱりと言いたげにティアナが肩を竦めた。

「飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる。スバル、大丈夫？」

「つつー…、なんとか…」

「ちなみにユキさんがバラけた現物をベースに一から作って完全再現してるから、本物と全く同じ性能だよ」

「あたしの技術は世界一いつ!!なんてね」

魔導師の足を潰すという脅威を見せられ、無事に起き上がったスバルを含みフォワード陣が息を呑む。シャーリーとユキが補足とボケを入れるが、四人の顔はやや暗い。

「…さて、そろそろいいかな。アスカ、ソラ、本気出していいよ。みんなにお手本、見せてあげて」

そんな中なのはが、未だ何の行動も起こさず戦闘を見守っていた二名に声を掛ける。仮にも二人共A A A以上。本気を出せばこの程度一瞬で葬れた。だが彼女達は動かなかった。片方は仲間を思いやり

経験を積ませる為、もう片方はめんどくささともう一つの理由から。
だが教官に言われた以上、やる以外に道はない。

「…三分？」

「面倒つす。二分で」

「…了解」

確認するように問い掛けるアスカの声に、軽い調子ながらも鋭い目付きで答えるソラ。承諾の返事を交わすと同時に、両者は同時に地を蹴った。

標的はそれぞれ四体ずつ。面倒なことになったなあと思いながら、ソラは手近なビルの上に陣取る。二丁拳銃型デバイス　アルニカとラタスクを適当に構え、ソラは引き金を二度引いた。一瞬で形成された蒼い弾丸は大気を切り裂き、ガジェットの群れに追い縋る。僅かコンマ数秒でそれらに追い付いた弾丸はガジェットの展開するAMFに接触し

何事もなく通過した。

先程のティアナの二の舞になると思っていたガジェットは異変を感じ慌てるが、もはや弾丸は目と鼻の先。回避も出来ずその身を貫かれ、二体のガジェットは爆散した。

更にソラは左手を振るい、未だ残っていた弾丸に指示。もう二体のガジェットに死を運ぶべく、弾丸は再び宙を舞った。慌ててガジェットがAMFを全開にするも、弾丸はほんの一瞬姿を揺らがせただ

け。効いていないことをガジェットが理解した時には、既にそのボディーには大きな穴が空いていた。

「ま、こんなもんっすかね」

アルニカとラタトスクをくると回転させながらブレスレットに戻し、ソラはその場に寝転がった。

一方アスカは、先行し姿が点程にしか見えないガジェットを追っていた。その場の物を仕留めてもよかったのだが後で相手にする四人のことを考えると、遠いと追うのが面倒だと思ったのだ。口下手ながらも優しさを秘めた、彼女なりの気遣いだった。

「…アルテミス」

《Boost Up》

アスカが左手に握ったデバイス　白を基調とした月の様な色の逆手持ちの短刀に呼び掛けると同時、女性の声が響き少女の姿が消えた。平均よりも結構速い程度だった彼女の速度は、肉体強化の魔法を使用したことにより劇的に加速する。一瞬で百メートル近くの距離を詰めた彼女は背後からガジェットを奇襲。逆手持ちにした両手の短刀で、一体のガジェットをクロス状に切り裂く。

「…アポロン」

《Blade On》

ボディーを四分割され爆発・炎上するガジェットに目もくれず、アスカは右手　逆手に握った赤を基調とした太陽の如き色の短刀に呼び掛ける。男性の声が響くと同時アポロンとアルテミスの刀身が朱色の光によってコーティングされ、アスカはそれを全身のバネを活かして投擲した。風切り音を奏でながら飛翔した二本の短刀は的確に二体のガジェットを貫通し、勢いそのままにビルの壁へと突き刺さる。地を蹴りビルの壁からデバイスを抜き取りながら再度跳躍、ガジェットにアポロンとアルテミスを突き込む。鉄製のボディーを蹴りながらバク転、軽々と着地を決めると同時、最後の一体が爆発した。

「…ん、いい感じ」

デバイスをネックレスに戻しながら、アスカは満足したようにこくこくと頷いた。

「…ちよつとはっちやけ過ぎじゃない？」

「まあまあ、他の魔導師の戦い方見るのも参考になるし」

「…ま、教導官じゃないあたしが言えたセリフじゃないか」

宣言通り二分どころか一分でガジェット八体を片付けた二人から視線を外し、なのはにジト目を向けるユキ。取り成すようななのはの説明に、溜め息をつきながらユキは視線を戻した。

「対抗する方法はいくつかあるよ。アスカやソラを参考に、どうすればいいか素早く考えて、素早く動いて」

「キャロ、手持ちの魔法とそのチビ竜の技で、なんとか出来そうなのがある?」

「…試してみたいのが、いくつか」

なのはの声を合図に、モニターで二人の戦闘を見ていたティアナがキャロに問い掛ける。頭を高速で回転させるティアナに、キャロもいくつかのプランを頭に頷き返す。

「あたしもある。スバル!!」

「オッケー。エリオ、あいつら逃がさないように先行して足止め出来る? ティアが何か考えてるから、時間稼ぎ!!」

「…やってみます!!」

「へえー、みんなよく走りますね」

ボックスからの指示を受け、スバルとエリオはガジェットを追って動き出す。そんな様子を眺めながら、シャーリーは感心したように呟きを零した。

「危なっかしくてドキドキだけどねー。デバイスのデータは取れそう?」

「計測類はバッチリです。後はユキさんの眼力次第ですが…」

「あたしをナメてんの? 既に頭の中で図面引いてるわよ」

「…問題なさそうだね」

なのはが苦笑いしながら背後に振り返ると、ウィンドウでデバイスのデータを記録するシャーリーとひたすら四人を眺めているユキ。相変わらずだなあと苦笑いしつつ、再び眼下に視線を戻す。隣にやって来たアスカと共に、なのはは四人を見守ることにした。

残った八体のガジェットが逃走する道路の先　　橋梁の上でそれらを待ち受ける影があった。槍を構えたエリオ　　奇しくも先程の再現である。

「行くよ、ストラダー！！カートリッジロード！！」

《Explosion》

右手に握った槍　　ストラダに命じると同時、赤い弾丸がロードされる。エリオは黄色いベルカ式魔法陣を展開しながら、爆発的に増した魔力を纏った槍を頭上で回転させ遠心力を乗せていく。ガジェット達が射程圏内に入った瞬間、エリオは槍を下に向けて振るった。スピードとパワーの乗ったストラダは橋梁を切り裂き、ガジェット達が通過するタイミングで落下。二体は上空に逃れるが四体を足止めし、残り二体を押し潰すことに成功する。

「潰れてろっ！！」

と、ローラーの速度を乗せ地を蹴ったスバルが、スピナーの回転するリボルバーナックルをガジェットに叩き込む。AMFのせいで本来の威力は出せないまでも、一体を瓦礫の中に吹き飛ばすことに成

功し着地する。

「んー、やっぱり魔力が消されちゃうと、イマイチ威力が出ない…」
愚痴るように漏らす中、先程逃れたもう一体がスバルの背後に回り込む。そんならと呟きながらスバルは加速、足を引つ掛けガジェットを地上に引きずり下ろし馬乗りになる。

先程のアスカの戦闘を見ていて気付いたことがある。確かにAMFは魔力を掻き消す厄介極まりない能力だが、アスカは悠々と戦っていた。その理由は彼女の戦闘スタイル　魔法をあくまで肉体強化と刀身のコーティングにしか使っていなかったことにある。全開状態ではなかったとはいえ、アスカの肉体強化は確実に発動していた。そこから導き出される結論はつまり、

体内の魔力には、AMFが効かない。

「うりゃあああああつー！」

叫びと共にスピナーを回転させ、圧縮した魔力を上体と拳に回し強化。劇的に臂力を増した拳を、ガジェットに思いつ切り叩き付ける。アスカは軽く細身な為、AMFを貫く為だけに刀身を強化していた。だがスバル程度の体格があれば、こんな荒業も可能！！

ボディーを蹴って離れると同時に、ガジェットが炎上・爆発。やつてやったぜと言わんばかりに、スバルは会心の笑みを浮かべた。

「連続行きます。フリード、ブラストフレア。ファイアー！！」

続けて動くのはキャロ。フリードが主の声に応え、顔の前に火球を作り出す。キャロのブーストによって爆裂効果と簡易バインドを付加されたそれは高速で放たれ、足止めされていたガジェットの内二

体に接触。広範囲の炎に晒された魔導機械は、火花を散らしながら動きを封じられる。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチエーン！！」

更にキヤロが、足元に桃色のミッド式魔法陣を展開。詠唱を終えると同時轟々と燃え盛る大地に召喚魔法陣。頂点にミッド式魔法陣を抱き、内側にミッド式魔法陣を囲うように描かれた菱形を二つ配置した四角形が展開される。そこから放たれた無数の鎖が意志を持つかのように蠢き、動きを封じられた二体と再度上空に逃れようとした一体のガジェットを捕獲した。

「うわー、召喚てあんなことも出来るんですねー」

「…ぱちぱち」

「無機物操作と組み合わせてるわね。なかなか器用じゃない」

モニターからその様子を見て感嘆の溜め息を漏らすシャーリーと拍手を送るアスカに、一目でそれを見抜いたユキが補足を入れる。確かに普段彼女達が使っているプロテクションやラウンドシールドなどの対魔法障壁や、AMFは無機物に対して効果はない。魔法戦がメインとなっている現状では相手も当然対魔法を主眼として対策する為、この魔法はその弱点を突きたい魔法だと言える。

「こちらら射撃型…。無効化されて、はいそうですかって下がってたんじゃ、生き残れないのよ！！スバル！！上から仕留めるからそのまま追ってて！！」

『おうつ！！』

そんなモニター組をよそに、ラストのティアナも動き始めた。攻撃を逃れて逃走し始めた最後の二体に照準を合わせ、カートリッジを二発ロードする。

「魔力弾！？AMFがあるのに！？」

《Yes, there is an available passing method (いいえ、通用する方法があります)》

「ソラも使ってたからね。あの速度で見抜いた、か」

その様子　　先程無効化された魔力弾を再生成し始めたティアナを見てアスカが目丸くし、シャーリーが驚きの声を上げるがレイジングハートは半ばそれを予想していたように反論する。ユキも姿勢を鋭くしながら、ソラの技術を見抜いたティアナに感心したように呟いた。

ソラの射撃を見ていて、ティアナは一つのこと気が付いた。あまりの早業だった為見づらかったが、彼女の弾丸は三重弾殻　マトリョーシカのようになっていたのだ。攻撃用の弾体を、無効化フィールドで消される膜状バリアで包み込む。フィールドを突き抜けるまでの間だけ外殻が持てば、本命の弾はターゲットに届く。だからこそソラはたった二発の弾丸で、ガジェットを四体仕留めることが出来たのだ。一発くらいなら自分にだって……！！

魔法の力は想いの力だというならば、私にだって誰にも負けない想いがある。大量の魔力を注ぎ込み、強引に意志の力で膜状バリアを生成していく。

固まった！！

「フィールド系防御を突き抜ける、多重弾殻射撃。AAランク魔導師のスキルなんだけどね」

「AA!？」

「ホントビックリだよー。こんな簡単なのがAAって」

「ユキちゃんの才能が時々怖いの…」

それを見て感心したようにも呆れたようにも取れるなのはの説明に、シャーリーが驚きのあまり動きを止める。ユキも溜め息をつきながら追従し、一瞬で漆黒の多重弾殻を作り出した。それが何層あるかは知らないが五層目でカウントをやめたのはが、冷や汗混じりに親友の魔法にツツコミを入れた。

「バリアブルッ!! シュウウウウウツッ!!」

ティアナは絶叫と共に、再度引き金を引いた。後ろから追いつめるスバルを一瞬で抜いた弾丸はAMFに激突。オレンジの弾丸は僅かな抵抗感と共に、ガジェットをAMFごと貫いた!!

が、まだ終わりではない。まだ辛うじて膜状バリアが残っているのを確認したティアナは弾丸に指示、最後の一体目掛けて射出する。ガジェットはAMFを展開するも、膜状バリアに守られた弾丸はしつかりとAMFの内側まで運ばれて、そのボディを貫通・爆散。ガジェットを全滅させた。

『ナイス!! ナイスだよティア!! やったね!!』

「うるさい…。このくらい…。当然よ…」

はしゃぐ相棒の声に弱々しく毒を吐きながら、全ての力を使い果たしたティアナは脱力して大の字に寝転がる。やってやったという達成感が、ティアナの全身を駆け巡っていた。

「あ、はやて!!」

夜。六課隊舎に帰還したはやてが食堂を通り掛かると、ふとそんな声に呼び止められた。視線をそちらに向けると、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リインフォースの四名＋一匹が食事をしているところだった。

「ヴィータ!! みんなでお食事か?」

「はい。色々打ち合わせがてら」

「はやて、ご飯食べた?」

「フェイトちゃんにナツキ君のお手製おにぎり分けてもらっただけやからな…、もうお腹ぺこぺこや」

表情を緩ませながら近付くはやての言葉に、リインフォースが頷く。ヴィータと問いに苦笑しながら答え、お昼時のことを思い返す。中央出向の為に飯抜き覚悟はしていたのだが、いざフェイトが目の前でナツキのおにぎりをぱくつき始めると我慢出来なかったのだ。最後まで迷っていたフェイトには悪いが、十四年も自炊して来たナツキの料理は例えおにぎりでも素晴らしく美味しかった。…結果的に空腹が加速したのはご愛嬌である。

「では、急いで注文して来ましょう」

「お茶ももらって来ます」

「おおきになー」

「リインは？」

それを聞いて料理とお茶をもらいに行くシグナムとシャルを尻目に、ヴィータは可愛い妹分の所在を尋ねる。はやてはニコニコと笑いながら、傍らのショルダーバッグを開ける。中にはミニチュアサイズの個室が作られており、リインがすやすやと寝息を立てていた。

「相変わらずよく寝るな、こいつは」

「まあ、一生懸命働いてくれてるからな」

「先代としては嬉しいやら不安やらで、微妙な心境だな」

微笑ましい末っ子を見遣りながら、苦笑を交わした三人はそつと蓋を閉める。まだまだ遊びたい盛りだろうに、真面目に頑張っている彼女に感謝しながら。

「中央の方はどうでしたか？」

「まあ、新設部隊とはいえ後ろ盾は相当しっかりしてるからな。そんなに問題はないよ」

「後見人だけでもリンディ提督にレティ提督にクロノ君…、じゃな

くて、クロノ・ハラオウン提督」

「そして最大の後ろ盾…、聖王教会と教会騎士団が騎士、カリム。ま、文句の出ようはありませんね」

定食を運んで来ながら首尾について尋ねるシグナムに、上着を脱ぎながら腰掛けたはやてが満足げに答える。シャマルとリインフォー스가根拠を述べ、当然とばかりに頷いた。提督が三人に、一つの勢力の長にして管理局理事官である少女が後ろ盾。ある意味、過剰な程の戦力を保有する六課への反論を封殺する為の防波堤とも言える。…更に何名か、某甘党の規格外妹が買収・コネ・ツテを使ってそれを補強しているのだが、はやてはそれに関して何も考えないようにしていた。賢明な判断である。

「現場の方はどういや？」

「ヴァイスシュヴァルツは至って良好です。…というより、あの天城に任せて失敗に終わるはずありませんが」

「なのはとフォワード隊は、挨拶後すぐから夜までずっとハードトレーニング。新人達は今頃グロッキーだな。ま、全員やる気と負けん気はあるみたいだし、なんとか着いてくと思うよ」

「バックヤード陣は問題ないですよ。和気藹々です」

「グリフィスも相変わらず、しっかりやってくれています。問題ありませんね」

そんな裏事情はさておき、はやては表について尋ねる。ヴァイスシュヴァルツを取り仕切るナツキとの代理相談役であるリインフォー

スが苦笑いしながら答え、ヴィータ、シャマル、シグナムもそれぞれ追従する。ちなみにザフィーラは狼形態だと六課の人員として加算されない為、この場ではややアウェー気味である。合掌。

「そうか…。私達が局入りしてかれこれ十年。やるせない、もどかしい思いを繰り返してやっと辿り着いた、私達の夢の部隊や。レリック事件をしっかりと解決して、カリムの依頼もきっちりこなして。みんなで一緒に頑張ろうな」

「うん、頑張る」

「勿論です」

「我等守護騎士、あなたと共に」

「きっと、やり遂げてみせましょう」

そんな報告に安心しながら、はやては改めて決意を語る。主の真つ直ぐな言葉に守護騎士らも頷き、気を引き締めた。と、

「んー…、いい匂いがするでしゅ…」

「匂いで起きたか。意地汚い奴め」

「えへへへ…」

バッグの蓋がもぞもぞと動き、寝ぼけた様子のリインが顔を出した。起きた理由をからかうヴィータに、リインはやはり眠たげに笑う。

「みんなでご飯中よ。リインちゃんも食べる？」

「食べるですー！！…もがつ！？」

「ほら、顔を拭け」

「私の分けたるな。ヴィータ、小皿取ってくれるか？」

「うん！！」

リンの起床をきっかけに面倒な話を終え、にわかに動き出す八神家。誰もいない食堂で、家族の温かな団欒が繰り広げられていた。

機動六課隊員寮、とある大部屋。既に部屋着に着替えたなのはと上着を脱いだフェイトがベッドに腰掛け、今日一日について話していた。

「新人達、手応えはどう？」

「うん、みんな元気でいい感じ」

「そう。立派に育っていつてくれるといいんだけどね」

「育てるよ。あの子達がちゃんと、自分の道を戦っていけるようにね」

エリオやキャロにアスカ、妹や娘とも取れる家族に思いを馳せ呟くフェイトに、なのははニッコリと、強い意志を秘めた瞳と声で宣言する。フェイトが表情を緩め次の言葉を紡ごうとした瞬間、

「ただいまー」

「お兄ちゃん、お帰りなさいー!!」

「…相変わらずで安心した」

兄が帰宅した瞬間マツハで玄関へダッシュ、抱き着きながらそう告げる妹に苦笑しながらもナツキは頭を撫でる。管理局最速の本気は、日夜この為だけに使われているといっても過言ではないだろう。フイトファン涙目である。

「フイトちゃんばかりずるい!!私も!!」

「あのなあ…、気持ちはわからんでもないが落ち着け」

遅れてやって来たなのも対抗するように抱き着き、前後を絶世の美少女に固められた幸^{ナツキ}せ者は溜め息一つ。宿めながら引つpegし、眼前に立たせる。エース・オブ・エースと言えども、やはり恋する乙女なのであった。

「じゃあ改めて。ただいま」

「「お帰りなさい」」

笑みと共に抱きしめて来た恋人^{ナツキ}に満面の笑顔を浮かべながら、二人も応えるように抱きしめ返す。とびきり温かな、しかしいつも通りの光景だった。

第三話「集結」 後編（後書き）

…うん、バカップルだね。バカップル。バカップ（ry しつこい
冷静に考えるとデレまくりフェイトって原型残って（ry

次回はデバイスとご対面です。

第四話「ファースト・アラート」 前編（前書き）

はい、四話です。今回はデバイス登場回ですが前編なのであんま進みませんw
ではどーぞー。

第四話「ファースト・アラート」 前編

父さんとギン姉へ。お元気ですか？スバルです。私とティアがここ、機動六課の所属になってから、もう二週間になります。

本出勤はまだなくて、同期の陸上フォワード六人は、朝から晩までずーっと訓練漬け。しかも、まだ一番最初の第一段階です。

部隊の戦技教官、なのはさんの訓練はかなり厳しいんですが、しっかり着いて行けば、もっともっと、強くなれそうな気がします。

当分の間は二十四時間勤務なので、前みたいになくちよく帰ったりは出来ないんですが、母さんの命日にはお休みをもらって帰ろうと思います。

「スバル、時間」

「え？あ、ホントだ。ありがとねアスカ」

「ん」

ふと端末から顔を上げると、アスカが扉の辺りからこちらを手招きしていた。今は五月、時間はAM5:45。確かにそろそろ早朝訓練の準備を始める時間だ。スバルは頷き礼を述べ、最後の一文を入力しメールを送信。リボルバーナックルとローラーブーツを携え、部屋を出ることにした。

「はい、みんな整れーっ！」

「はいっ！」

バリアジャケットを纏ったのはの声に応え、スバル達フォワード六人＋一匹が整列する。アスカやソラは軽いものの他全員はボロボロで、荒い息を整えようとしている状態だった。

「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト一本。みんな、まだ頑張れる？」

「……はいつ……！」

「……ん」

「一応は」

なのはの確認するような言葉に四人が元気に、アスカとソラはいつも通りのローテンションとやる気なさ気な声で答えた。ボロボロの状態でも、約一名を除きやる気だけは有り余っていた。

「じゃあ、弾丸回避訓練シュートイベーションやるよ。レイジングハート」

《All Right, Axel Shooter》

満足げに頷いたのはが、左手のレイジングハートに指示。足元に桜色の魔法陣を展開し、周囲に十発の弾丸を生成する。

「私の攻撃を五分間、被弾なしで回避し切るか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。頑張って行こう……！」

「SなのかMなのかよくわかんない課題うおうっ……！」

自らの周囲に弾丸を環状に走らせるなのは言葉にソラが突っ込みを入れた瞬間、眼前に桜色が飛来した為慌てて避ける。半目のまま視線を戻すと、どす黒いオーラを放ちながらニコニコと笑う鬼教官^{なのは}の姿。

「ソラ、多少なら目を瞑るけど、あんまり過ぎるようなら怒るよ？」

「今明らか殺すつもりでしたよねあなた」

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を五分間。捌き切る自信ある？」

「ない!!」

「同じくです」

「…フォローにも、限界がある」

冷や汗混じりになのはと口論というか口喧嘩を始めるソラをよそに、ティアナは作戦会議を開く。スバル達はボロボロの状態だし、アスカとソラのフォローがあってもなのはの弾幕を相手に五分間耐え切るのとは不可能だ。二人が本気を出せば一撃入れることは簡単だが、それはただの甘え。四人のうち誰かが、なのはに攻撃を届かせなければ意味がない。

「じゃあ、なんとか一発入れよう」

「はい」

「よし!!!行くよ、エリオ!!!アスカ!!!」

「はい、スバルさん!!」

「…ん」

再確認するように呟くティアナにキヤロが頷き、前衛の三人も各々デバイスを構える。準備は整った、いつでも行ける。

「…ところでなのはさん、こんな言葉知ってますか？」

「？何？」

ティアナの目配せを受けたソラが、不意に話の腰を折り質問を投げ掛ける。可愛らしく首を傾げ聞き返すのはに対し、ソラはアルニカとラタトスクを構え、

「先手必勝っ!!」

《Blaze Cannon》

特大の蒼い砲撃を見舞った。

「っ!？」

不意を突かれるも半ば反射的に魔導障壁^{ラウンドシールド}を展開し、ブレイズキャノンを相殺するなのは。じわじわと顔に浮かぶのは、やってくれたなと言わんばかりの、恋人^{ナツキ}によく似た不敵な笑み。

「不意打ちとはやってくれるね…!!」

「勝てば官軍、でしょう？」

「…油断大敵」

「全員、絶対回避！！二分以内に決めるわよ！！」

「…おうつ！！」

防がれたことに舌打ちしつつも、なのはの言葉に挑発を返すソラとアスカ。振り下ろされた右手に従いこちら目掛けて降り注ぐ六発のアクセルシューターを見遣りながらティアナが叫び、六人は同時に散開した。

スバルは即座にウイングロードを展開、拳を振りかぶりながらなのは目掛けて背後から突進。同時にティアナもビルの窓から、弾丸を生成しつつタイミングを狙う。

「アクセル！！」

《Snipe Shot》

対しなのはは冷静沈着。主人とデバイスの声がシンクロした瞬間、周囲に浮いていた二発の弾丸がスバルとティアナ目掛けて弾かれたように飛び出した。眼前から脅威が迫る中、スバル躊躇せず突っ込んで行き、ティアナもその場から動かない。そして桜色の弾丸が二人を、

貫通した。

「シルエット…。やるねティアナ」

オレンジの魔力光と共に掻き消えた両者を見遣りながら、なのはが感心したように呟く。ティアナお得意の幻影魔法 フェイクシルエツトだ。

が、フォワードの猛攻は止まらない。なのはの背後にウイングロードが展開され、透化の解けたスバルが駆け降りながらリボルバーナツクルを、ビルの壁を生かして跳躍し正面からアスカがアポロンとアルテミスを振りかぶる！！

「でえええりやああああっ！！」

「 っ！！」

片方は雄叫びと共に、片方は鋭く息を吐きながら。同時に叩き込まれた攻撃に対し、なのはは両手にシールドを生成。火花を散らしながらも二人の攻撃を受け止めた。

なのはが視線を鋭くした瞬間、先程幻影を通過した弾丸が急ターン。スバルとアスカ目掛けて加速し、流星の如く宙を翔けていく。それを察したスバルはローラーに命じ後退、アスカもシールドを蹴りながらバク転し壁に着地。間一髪のところ弾丸をかわす。

いい反応 心中で二人をそう褒めるなのはをよそに、スバルに異変が起きた。着地時にバランスを崩したのか、スバルがウイングロードを滑り落ちて行く。本来動かない横方向からの力を加えられローラーが火花を散らす、辛うじて体勢を立て直したスバルは追撃の弾丸から逃れるべく加速した。

「スバルバカ！！危ないでしょ！？」

「う、ゴメン！！」

「待ってなさい。今撃ち落とすから」

ビルの陰から状況を見ていたティアナがスバルを叱咤し、桜色の流星を撃つべくカートリッジロード。銃口に魔力を集束させ、引き金を引

カスッ。

「んなっ、この肝心な時に!!」

炸裂不足　カートリッジの魔力が全て炸裂せず、魔力がデバイスや術者に回らないことによってカートリッジが使えなくなる不発現象に舌打ちしつつ、ティアナはカートリッジをロードし直し引き金を引く。放たれた弾丸にスバルが頷き、上空へとウイングロードを展開。駆け上がった標的を追う弾丸の軌道に回り込み、桜色とオレンジが激突・爆発。無事に相殺した。

《Rainy Barrett》

スバルが射線上からいなくなったことを確認した瞬間、ビルの屋上に待機していたソラが動いた。両手の拳銃の引き金を連続で引き、なのはを逃がさぬ様蒼い弾丸を面制圧の為雨の如く叩き込む。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

《Boost Up・Acceleration》

さしものなのはも動きを止められる中、地上でキャロが詠唱を開始。桃色の輝きを纏った左手を振るうと同時、ストラーダが同色に煌めく。

次の瞬間、ストラーダの穂先からジェットエンジンの如く魔力が噴き出した。

「あの、かなり加速が付いちゃうから、気を付けて！！」

「大丈夫。スピードだけが取り柄だから！！行くよ、ストラーダ！！」

キヤロは心配そうに注意を促すが、黄色に輝く槍を構えた騎士^{エリオ}は上等と言わんばかりに笑みを浮かべる。この一撃で決めるしか、活路を開く方法はない。ならば、フォワード唯一の男である自分が突っ込むのは当然！！

ソラだけでなくティアナやフリードの援護射撃を受け回避に徹するなのはが、眼下のエリオに気付いた。が、ソラの的確な射撃により回避もままならず、少しだけ表情を歪める。

「エリオ、今！！」

「行っけええええっ！！」

《S p e e r a n g r i f f》

射撃の止んだ僅かな静寂、その無音の世界を切り裂くようにしてエリオは跳んだ。キヤロのブーストにより加速した槍騎士は、一筋の光となつてなのはに突っ込んで行く。が、射撃が消えたコンマ数秒の間。それを待っていたなのはは直線的な突撃を回避すべく上方へと

避けようとしたなのはの頭上を、二本の短刀が通過した。

機会を窺っていたアスカが、牽制の為にデバイスを投擲したのだ。硬直は僅か一瞬。だがブースト付きのエリオなら、その一瞬で事足りる！！全員が行けると確信した瞬間エリオとなのはが激突し、

エリオが吹き飛ばされた。

「ぐっ……！！」

「エリオ……！！」

「外した！？」

「いや……」

壁に着地するエリオの元にアスカが駆け寄り、あの状況で失敗したのかとティアナが驚愕するが、ソラがそれを遮り視線を鋭くする。濛々と煙が立ち込める中、なのはがゆっくりと現れる。その体にダメージはなさそうで、エリオが落ち込みそうになった瞬間

《Mission complete》

「お見事。ミッションコンプリート」

目的達成を、告げた。

「ホントですか！？」

「ほら。ちゃんとバリアを貫いて、ジャケットまで通ったよ」

信じられないように呟くエリオの視線の先、なのはは左胸を指差し

た。確かにその純白のバリアジャケットには、僅かな傷と焦げた痕が付いていた。もちろん原因は エリオの一撃だ。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよ」

「……はいつ!」「……」

なのはが微笑みと共に集合を掛け、地上に降り立つと同時にバリアジャケットを解除。ツインテールがサイドポニーに、純白の衣が陸士部隊の制服へと戻る。

「さて、みんなも大分チーム戦に慣れて来たね。ティアナの指揮も筋が通って来たよ。指揮官訓練、受けてみる?」

「いや、あの、戦闘訓練だけでいいと思います」

「残念。あ、そうそう。ソラ、後で不意打ちの件について反省文。原稿用紙十枚分ね」

「うげ……」

ティアナの的確な指示や作戦を褒め勧誘するも、当の本人はそれを事態。残念そうに呟くも、直後ソラに罰則を言い渡すのは。…冷静に考えれば上官への不意打ちなど、下手すれば謹慎・除隊されてもおかしくない。だがサボリ魔の彼女にとってそれは願ったり叶ったりなので、自由時間を奪う書き取りなどの方が効果的なのだ。

「きゅっ?きゅくる」

「え?フリード、どうしたの?」

「なんか…、焦げ臭いような…」

「あ、スバル！！あんたのローラー！！！」

そんなソラに苦笑する中、不意にフリードがキャロに呼び掛ける。
言われて異臭に気付いたエリオの発言で、原因を突き止めたティアナがスバルの足元を指差す。言われるままに視線を落とすと、スバルのローラーが火花を散らし煙を立ち上らせていた。

「しまった…、無茶させちゃった…」

「オーバーヒートかな…。後でメンテナンススタッフに見てもらおう。ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい…。だましましたです…」

やつちやったと悔やむスバルを慰めながら、なのははティアナにも問い掛ける。アンカーガンも不発現象を起こしていたし、そろそろ限界が近いのかもしれない。

「みんな訓練にも慣れて来たし…、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ…」

「新…、デバイス…？」

考え込むようなのはの声に、スバル達四人は首を傾げる。まあすぐにわかるからと、なのははやや強引に話を締めた。

「じゃあ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるつか」

「……はいつ……!」

「…あ」

「あの車って確か……」

訓練所から徒歩で戻り、隊舎の前でフォワード陣に再集合の指示を出すのは。そんな中アス力が何かに気付き、ソラも目を細めてそれを見遣る。一台の黒いスポーツカーがなのは達の横に停車し、魔法で屋根を消しオープンカーモードにチェンジ。中から顔を出したのは、天城兄妹にフェイト、はやての四名だった。

「ナツキさん!!フェイトさん!!ユキさんに八神部隊長も!!」

「はあい新人共。みんな頑張ってるみたいね」

エリオとキャロとアス力が駆け寄り、後部座席に座っていたユキが片手を上げて挨拶する。初対面時こそ言動のはちゃめちゃさに面食らったものの慣れてしまえばフランクで話しやすく、フォワード陣とユキはかなり打ち解けていた。

「すごい!!これナツキさんの車だったんですか!??」

「いや、持ち主はフェイト。金は半分ずつ出して共有みたいな感じになってるな」

「地上での移動手段に、ね」

見るからに高そうな車に感嘆の声と質問を漏らすスバルに、運転席のナツキと助手席のフェイトが笑みと共に答える。いかに空戦魔導師とはいえ、街中を飛んで移動する訳には行かない為ナツキが免許を取得。真似するようにフェイトも取得したので、二人でお金を出し合って購入したのだ。

「みんな、練習の方はどないや？」

「あー、まあ……」

「頑張ってます」

後部座席のはやてが放った問いに、ついさっきローラーを壊したスバルが苦笑い。ソラに厳しい視線を送りながらも、ティアナが纏めるように報告する。

「エリオ、キャロ、ごめんね。私は二人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて」

「あ、いえ、そんな」

「大丈夫です」

「アスカも悪いな」

「……ん、平気」

「あたいにはなしっすか」

「アス力は誰かさんと違ってやる気十分だからねー」

「うぐっ」

そんな部隊長をよそにフェイトは申し訳なさそうにエリオとキャラに面倒を見てやれないことを謝罪。真面目で優しい保護者の気遣いに気にするなと答え、息子と娘は笑みを浮かべる。同様にナツキもアス力に謝り、茶化すようにいれたソラの冗談はユキの的確なツツコミによりカウンターとなって返された。元々の性格の悪さもあるが、これが基本的に彼女の前で兄を敵に回した者の末路である。

「四人共いい感じで成長してるし、二人もチーム戦に慣れて来てるよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そうか。それは頼もしいな」

「…四人は、どこかにお出かけ？」

「ああ。フェイトと一緒にちよつと六番ポートまで」

「はやてと一緒に教会本部でカリムと会談。夕方には戻るわ」

そんなフォワード陣に苦笑しながら、なのはが実際のところを要約して説明する。それに満足したように頷くはやての傍ら、アス力は兄のように慕う保護者に質問。頭を撫でながらの兄の答えに、妹も追加で補足説明。

「私達は昼前には戻るから、お昼はみんなで一緒に食べようか」

「……はいつ……」

「ほんならなー」

「バイバイ」

フェイトの埋め合わせ的な提案に、フォワード陣は一樣に頷く。はやてとユキの挨拶を最後に、ナツキの運転するスポーツカーはその場を後にした。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局の理事官。カリム・グラシアさんか…。私はお会いしたことないんだけど…」

「お、そうやったね」

「俺は画面越しに何回かだな…。はやてとユキはいつから？」

ミッドチルダの首都高速を走りながら、ナツキ達はそんな会話を交わす。話題ははやてとユキの面会相手であるカリム。六課の後見人でもある彼女だが、実際に会ったことがあるのはユキとはやて、ヴオルケンリッターの六人、計八人だけである。ナツキも画面越しに話しただけで、他のメンバーに至っては話すどころか、姿を見たことさえないのだ。

「んー、はやてが教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばっかの頃だから…。八年くらい前かな」

「カリムと私は信じてるものも立場もやるべきことも全然ちゃうんやけど、今回は二人の目的が一致したから。そもそも六課の立ち上

げ、実質的な部分をやってくれたんはほとんどカリムなんよ。お陰で私は、人材集めの方に集中出来た」

「信頼出来る上司、って感じ？」

ユキが初めて会った時の記憶を探り、具体的な年月を叩き出し兄の疑問に答える。補足するようにはやてが、彼女の手回しなどの援助について説明した。そんなはやての信頼と嬉しそうな笑顔を見て、フェイトがニコニコと尋ねる。

「うーん、仕事や能力はすごいんやけど、あんまり上司って感じはせえへんな。どっちかって言うと、お姉ちゃんって感じや」

「所謂お兄ちゃんみたいなタイプの人ね」

「いや、その結論はおかしい」

「そつかあ…」

「納得すんなそこ」

やや考えた後に否定し姉と述べるはやてに、ニヤニヤしながらユキが付け足す。ナツキはツツコミで否定するものの、既に妹の耳には届いていなかった。彼女にとってお兄ちゃんはある意味言っていない言葉なのかもしれない。

「まあ、レリック事件が一段落したら、ちゃんと紹介するよ。ナツキ君もフェイトちゃんもなのはちゃんも、きつと気が合うよ」

「ん、気長に待つよ」

「楽しみにしてる」

仕切り直すようなはやての言葉にナツキが苦笑いしながら頷き、フ
エイトも表情を緩ませながらこくこく。そんな感じで四人を乗せた
車は、一路目的地に向けて駆けて行った。

「スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃って、ご自分で組
まれたんですね？」

「うん、そうだよー」

「訓練校でも前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「私は魔法がベルカ式な上に戦闘スタイルがあんなだし、ティアも
カートリッジシステムを使いたいからって」

隊員寮シャワールーム。そこで四人の少女　若干一名口下手な
少女は除くが　会話していた。先程デバイスの話をしていてふ
と気になったキャラが、各々のデバイスについてスバルとティアナ
に尋ねたのだ。

基本的に高性能なデバイスは高価なもの。確かに人手不足の管理局
といえど、入局者全員にそんなものを配布していたら破産してしま
う。が、それに不満を持つ者もゼロではなく、そういった者は自ら
デバイスを製作することがある。スバルは単に戦闘スタイルの違い
が理由だが、ティアナはまさにそんな一人だった。

「で、そうなると自分で作るしかないのよ。訓練校じゃオリジナル

デバイス持ちなんていなかったから、目立っちゃってね」

「あ、もしかしてそれでスバルさんとティアさんお友達になったんですか？」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って」

話を聞いていて気付いたキャラコがわかったと言わんばかりに声を上げるが、ティアナは皮肉げにそう答えた。さしものスバルもこれには苦笑い。

「…キャラコ。頭、洗う？」

「あ、お願いします」

「じゃあ私はアスカの洗ってあげるね」

「…ん」

そんな中ぼーっと髪を弄っていたアスカが不意にそんな言葉を漏らし、便乗するようにスバルも参戦。シャワールームに三人が連結した奇妙な光景が繰り広げられる。

「私、先に上がってるからね」

「…はい」

仲のいい三人に苦笑しながら、ティアナは先にシャワールームを出る。スバルとキャラコの返事が狭い空間に響き渡り、アスカも少しだけ表情を緩めた。

そんなシャワールームを尻目に、寮のロビーには少年が一人。言わずもがなエリオである。女性五人の中たった一人の男性というのもかなりの苦行。奇しくも十年前のとおる銀刀使いとよく似た状況だ。なのだが、その苦労性はこういう時に遺憾無く発揮される。女性には長風呂の人が多く、シャワーとはいえフォワード陣もそれは同様だった。：約一名汚れてないし面倒だと宣いロビーのソファで眠るサボリ魔もいたが。

「みんな、まだかな…」

「きゅ…」

溜め息混じりのエリオの言葉に、同情するようにフリードが鳴き声一つ。女性陣が上がって来たのは、それから三十分以上後のことだった。

第四話「ファースト・アラート」 前編（後書き）

ソラ…、南無三 やらせた人
しかし移動組四人平和だねえ…w

第四話「ファースト・アラート」 後編（前書き）

はい、後編です。なんかもうgdって来たような気が（ry
ではどーぞー。

第四話「ファースト・アラート」 後編

ミッドチルダ北部ベルカ自治領、山岳地帯の中に存在する聖王教会・大聖堂。次元世界で最大規模の信徒を持つのだが、禁忌や制約の少なさと緩さから一般の人にも解放され、観光地や若者の結婚式場として人気があるという一風変わった場所である。

そんな教会の一室に、一人の女性がいた。紫のリボンをカチューシヤのように巻いた若い金髪の女性で、シスター服とはやての騎士甲冑を合わせたような服を着ていた。

「騎士カリム、騎士はやてとユキさんがいらっしやいました」

「速かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい。それからお茶を三つ…、ファーストリーフのいいところを、ミルクと砂糖付きでね」

「かしこまりました」

と、女性の眼前にウィンドウが展開され、強いマゼンタのショートカットのシスターが金髪のシスターに声を掛ける。それに対し数個指示を出しながらカリムと呼ばれた女性は書類を片付け、部屋の扉を叩く音入室を許可。神父に案内され中に入って来たのは、コートとフードで顔を隠した二人の少女だった。

「カリム、久しぶりや」

「はい。元気そうね」

「はやて、ユキ、いらっしやい」

入って扉を閉めると同時に顔をさらけ出したのは、はやてとユキの二人だった。親しげに挨拶を交わした三人は、そのままティーセットの用意されたテーブルに腰掛ける。彼女こそがはやてとユキの面会相手　　カリム・グラシアだ。

「ごめんな、すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね」

「カリムのお陰でね」

お茶とお茶請けをつまみつつ、リラックスしたように語らう三人。六課設立の為奔走していて、なかなか会う機会が噛み合わなかったのだ。ちなみにユキはあるだけ全部の砂糖とミルクを注いでいたことは、想像に難くないだろう。わかっていて用意させるカリムもカリムだが。

「そういうことにしておくと、色々お願いもしやすいかな」

「なんや、今日の会って話すんはお願い方面か？」

ユキの茶化すような言葉を拾い、ニコニコと微笑みながら答えるカリム。その答えにはやては苦笑いしながら答えるが、対照的に彼女の顔は真剣なそれへと変わっていた。カリムはウィンドウを展開しパネルを操作、カーテンを閉め暗くなった室内に数個のウィンドウを出現させる。そこに映っていたのは

「ガジェット…、新型？」

「今までの？型以外に、新しいのが二種類。戦闘性能はまだ不明だけどこれ…、？型は割と大型ね」

戦闘機に近い形のガジェットと球状のガジェットを見て、はやてが疑問の声を上げる。カリムもよくわかっていないらしく、？型と称したガジェットの画像をズームし隣に人型の影を映す。表示された大人よりもガジェットは大きく、頭四〇五分程の差があり、装甲面も強化されているであろうことが窺えた。

「本局にはまだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督には、触りだけお伝えしたんだけど…」

「これは…」

「それが、今日の本題。一昨日付でミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

外見から大まかな武装と戦力を割り出し始めるユキをよそに、カリムはもう一つのウィンドウを展開する。そこに映し出されていたのは鋼色の、小脇に抱えられる程度の大きさのトランク。それを見た瞬間、ユキが鋭い視線をトランクに向けた。

「レリックね。ほぼ間違いなく」

「ユキが言うならハズレの可能性はなさそうね。？型と？型が発見されたのも昨日からだし…」

「ガジェット達がレリックを見付けるまでの予想時間は？」

「調査では、早ければ今日明日」

僅か数秒で断言したユキに頷き、ガジェットの活性化について語るカリム。はやての問いに返って来たのは、かなり悪い答えだった。早くこちらにも動かなければ、レリックを奪われかねない。

「せやけどおかしいな…。レリックが出て来るのがちょお早いような…」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか。レリック事件も、その後に起こるはずの事件も、対処を失敗する訳には行かないもの」

だが、タイミングがおかしい。六課が設立されてまだ一ヶ月弱。隊員の気が緩んでいる訳でもないのに、まるで見付けてくれと言わんばかりに現れたレリック。しかも新たなタイプのガジェットまで出て来るとなると、どうしてもきなくさが拭い切れない。それ故にカリムも判断に困り、はやてとユキを呼んだという訳だ。

だが、不安げな表情を浮かべるカリムをよそに、ユキはウィンドウを消しカーテンを開いた。まるでこの話は終わりだと言わんばかりに。

「…ユキ？」

「大丈夫よ、何があっても。カリムが助力してくれたお陰で、部隊はもういつでも動かせる。即戦力のなのはやフェイトは勿論新人フオワード達も強くなって来てるし、何よりあの天城ナツキお兄ちゃんがいる。どんな予想外の緊急事態が来ようと、ちゃんと対応出来る。だからカリムは安心して、踏ん返り返って座ってなさい」

疑問の表情を浮かべるカリムに茶目っ気たっぷりに、しかし見る者

に絶対の信頼を抱かせる笑みを見せるユキ。隣でうんうんと頷くはやてに目をぱちくりとさせ、カリムは穏やかな笑みを浮かべる。不安をひとまず頭の片隅に押しやり、三人はお茶会を再開した。

「うわぁ…、これが…」

「あたし達の新デバイス…、ですか？」

「そうです 設計主任ユキさん。協力、私となのはさんとフェイトさんの力作です」

感嘆の声を上げるスバルとティアナの眼前、青い宝石のペンダントと白いカードがデスクに置かれていた。見るからに漂う最新鋭のオーラをもものともせず、シャーリーは元気に解説。…ある意味師匠にそっくりである。

「…ストラダとケリケイオンは、変化なし？」

「違いまーす 変化なしは外見だけですよ？二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触に慣れてもらう為に、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで最低限！？」

「本当に…！？」

対照的に、全く見た目の変わっていない弟と妹のデバイスにアスカ既にシュヴァルツ二人のデバイスは完成している為、アスカ

は見学、ソラは隅で立ったまま寝ている　　が疑問の声を上げるが、リインが頭上から入れた解説に二人が衝撃を受けて硬直する。まだ完全に扱いきれている訳でもないのにあれで最低限。全開にしたらどうなるのかと二人は想像しようとして、気が遠くなるのでやめた。賢明な判断である。

「みんなが扱うことになる四機は、管理局どころか全次元世界最高とさえ言われるユキさんが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにディアの個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です」

四人の間を妖精のように飛び交いながら、リインは得意げに説明する。あの天城ユキが自分達の為に作ったデバイス。それだけで四人は自らの内に熱い何かが滾るのを感じた。それだけ天城ユキの噂は、魔女四方八方に轟いているということだ。

「この子達はみんなまだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められて、いっぱい…、って程でもないですが、結構な時間が掛かって完成したです。ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いつ切り全開で使ってあげて欲しいです」

「うん。この子達もね、きっとそれを望んでるから」

しかしそれ故に僅か数時間で全機仕上げてしまった甘党を脳裏に思い浮かべ、苦笑いしながら二人がデバイスを手渡す。各々神妙な面持ちで、新たな相棒を受け取った。

「ゴメンゴメン、お待たせー」

「あ、なのはさん!!」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから、機能説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね?」

「はい」

そんな中タイミングよく、別件で呼ばれていたなのはが到着。シャリーもウィンドウを展開し、四機のデータテキストが流れる中四人に振り返った。

「まずその子達みんな、何段階かに分けて出力リミッターを掛けるのね。一番最初の段階だとそんなにビックリする程のパワーが出る訳じゃないから、まずはそれで扱いを覚えていつて」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、ラインにユキちゃんの判断で解除してくから」

「ちょうど、一緒にレベルアップしてくような感じですね」

四機に視線を遣りながら、シャリーが説明書を読み上げるようなノリで説明。なのはが少し補足を入れ、ラインがわかりやすく要約する。ある意味完璧な連係プレーである。

「あ、出力リミッターっていうと、なのはさん達にも掛かってますよね」

「うん。私達はデバイスだけじゃなくて本人にもだけどね」

「え？リミッターがですか？」

五人並んで説明を受ける中、ふと思い出したようにティアナが尋ねる。何を唐突にと言った感じになのはが答えるが、その中の一言にエリオが疑問を抱き質問する。

「能力限定って言ってね、うちの隊長と副隊長はみんなだよ。私とナツキ隊長とフェイト隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長」

「はやてちゃんとミサオちゃん、シオンさん達もですね」

「ほら、部隊ごとに保有出来る魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？」

「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は、そこに上手く収まるよう魔力の出力リミッターを掛けるですよ」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

エリオの言葉に三人が、部隊設立に置けるルールを語る。確かに隊長格が全員Sオーバー、ヴァイスシュヴァルツも全員AA以上という異常な戦力を保有するなら、そのくらいはむしろ当然とも言える。

「うちの場合だとはやて部隊長が4ランクダウンで、ナツキ隊長が3・5ランクダウン。他の隊長達やシオンちゃん達はだいたい2ランクダウンかな」

「四つ！？八神部隊長がSSでナツキさんがSS+だから…」

「AとA Aまで落としてるんですか!？」

「はやてちゃんやナツキさんも色々苦勞してるですう……」

なのはがさくさくとなんでもないように告げるが、ティアナやエリオはかなり驚く。四つ下がるということは、今のスバルやティアナが同じリミッターを掛けられたら最低クラスのFランクまで落ちるということ。六課最高ランクの二人だからこそ、その分リミッターも多くなるのだ。

「なのはさんは？」

「私は元々S+だったから、2.5ランクダウンでA A。ナツキ隊長と同じだね。だからもうすぐ、一人でみんなの相手するのは辛くなってくるかな」

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊監査役のクロノ提督の許可がないと、リミッター解除は出来ません……。許可は滅多なことでは出せないそうです」

スバルの問いに答えながら、最近みんな強くなってるんだよ?と苦笑いするのは。ラインも肩を竦め溜め息混じりに、自分の主の苦勞を述べる。

「そういえば……、ユキさんはリミッター掛けてないんですか？」

「んー、そもそもね?ユキちゃんには掛けられないんだ」

ふと気付いたキャラが、先程名前を上げられなかったユキについて

質問する。だがなのはから返された言葉は、彼女らが予想だにしない答えだった。

「ユキちゃんは十年前、自分のリンカーコアにDRMっていう魔力無限吸収魔法のプログラムを書き込んでね。リミッターがすぐ壊れちゃうんだ」

「無理に制限すれば命に関わるので、上層部もなし崩し的に認めたんです」

「大分揉めたけど、実際それだけの力があつたからこそ管理局の技術は大幅に発展した訳だしね。ほとんどの人は当然だって許可してくれたの」

周囲の魔力を無限に取り込む魔法、理を狂わすモノ。十年前の十二月にあつた事件の際に組み込んで以来、ユキのリンカーコアとDRMは切っても切れない関係、一つの魂のようになってしまった。それを今となって無理矢理引きはがせば最悪死に至る可能性もあるし、上層部もあり厳しく言うことは出来なかったのだという。そんな過去と苦勞話を聞いてしまい、事情を知らなかった四人が思わずどんよりとしたオーラを纏う。

「…まあ、そんな話は忘れて忘れて。今はみんなのデバイスのこと」

「新型もみんなの訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整も出来ますから、手間はほとんどかからないと思います」

よ」

「むう、便利だよねえ最近は」

変な方向に脱線し始めた話を戻し、なのはとシャーリーが今後の予定を立てて行く。ユキの助力もあり大分楽になった現代になのは頬を膨らませ、その産物であるユニゾン^{ライン}デバイスが便利です と嬉しそうに述べる。

「スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能も、上手く設定出来てるからね。持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能も付けといた」

「あ、ありがとうございます!!」

シャーリーの思い出したような補足に、スバルが思いつ切り頭を下げる。あのナックルとローラーを一々持ち運ぶのは、確かにかなりの重労働だろう。そんな様子を見て、なのははほんの少しだけ笑みを漏らした。

「うん。はやてはもう、向こうに着いてる頃だと思うよ」

『はい、お疲れ様です』

「俺達はこの後、公安地区の捜査部に寄って行くことと思うんだけど…。そっちは何か急ぎの用事とかあるか？」

『いえ、こちらは大丈夫です。副隊長二人とヴァイスの三人が交替

部隊と出動中ですが、なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので』

「そう」

ミッドチルダの首都高速を走りながら、ナツキとフェイトが画面の向こうのグリフィスとそんな会話を交わす。一騎当千のなのはが残っていたら並大抵のことならどうにかなるし、その実力は二人もよく知っている。フェイトがそのまま兄とのプチデート^{トライフ}を楽しもうとした瞬間、

無機質に響き渡る警告音と、画面に表示される赤い文字。

「っ!？」

「ちっ…!！」

『このアラートって…!！?』

『一級警戒態勢!！?』

『グリフィス君!！!』

『はい!！教会本部から出動要請です!！!』

『なのは隊長、フェイト隊長、ナツキ隊長にグリフィス君!！!こちらはやて!！!』

「はやて!！?」

不意の状況にフェイトが驚き身を跳ねさせる中、ナツキはパネルを

操作したのは達のいる地点と通信を繋ぐ。そちらも降って湧いた警報に新人達が緊張しており、そんな中警報を出した張本人であるはやてが通信に割り込んで来る。

「ユキ、状況を手短に頼む！！」

『教会騎士団の捜査部で追ってた、レリックらしきものが見付かったわ。場所はエイリム山岳丘陵地区、対象は山岳リニアレールで移動中よ』

「移動中！？まさか……！！」

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは、最低でも三十体大型や飛行型の、未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、ナツキ君、行けるか？』

ユキとはやてが告げた状況に、ナツキは思わず舌打ちする。山岳地帯　すぐ隣は深い崖がある暴走列車の上で、大量のガジェットに未確認タイプのおまけ付き。初めてにしては無茶振り過ぎるのははやても承知しているらしく、隊長陣の顔を見ながら真剣に尋ねる。

「当然」

「いつでも」

『私も』

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アスカ、ソラ、みんなもオ

ツケーか？」

『了解』

『『『『はいつ！！』』』』

だが、その為の機動六課。ナツキ達は二つ返事で承諾し、いつの間にか起きていたソラ含むフォワード陣も頼もしく答えた。

『よし、いいお返事や。シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制！！なのはちゃんフェイトちゃんナツキ君は現場指揮！！』

『はい！！』

『うん！！』

『了解！！』

何やらコンソールのキーを叩き始めるユキを尻目に、はやては手早く指示を出して行く。地上本部は対応が遅過ぎる。かつてのはやての言葉は、しかし彼女の設立した地上部隊機動六課には通用しない。その為だけに四年間、目指し続けて来たものなのだから。

『ほんなら……。機動六課フォワード部隊、出動！！』

『『『『はいつ！！』』』』

「オツケー。なのは、フォワード達と先行してくれ。俺達も跳躍とんですぐに合流する」

『うんっ！！』

はやての出動命令に全員が威勢よく答え、遠距離にいるナツキも手早くなのはに指示を出す。空間跳躍　それは何も自分自身だけを移動させられるものではない。たかだか乗用車一台程度、五分もあればどこへでも跳ばせる。

「フエイト、舌嚙むなよ」

「え、ちょ、お兄ちゃん速過ぎ…」

パネルを操作し屋根に赤色灯を出現させつつギアを最大まで上げるナツキにフエイトが思わず呟こうとした瞬間、他車の隙間を縫いつつ黒いスポーツカーが一気に加速した。一般人なら即逮捕レベルだが、緊急時なので仕方ない。首都高速に可愛らしい悲鳴を残しながら、最速と最強を乗せた車はあっという間に姿を消した。

「シャッハ、はやてとユキを送ってあげて。機動六課の隊舎まで、最速で」

『かしこまりました、騎士カリム』

「聖堂の裏に出て。シャッハが待ってる」

「ん、ありがとねカリム」

「今日のお茶、美味しかったよ」

シャッハに連絡を取りながら、カリムがはやてとユキを促す。既に二人は立ち上がり、フードとコートを装備済みだった。はやての残した一言にユキも頷き、カリムも少しだけ表情を緩めた。

「ほんなら、行つて来ます」

その一言と笑みを残し、はやて達はカリムと別れた。

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「頑張ります」

ヴァイスが駆るヘリの中、なのはがみんなをリラックスさせるべく言葉を飛ばす。いきなりといえはいきなりだが、今までの訓練は全てこの日の為。魔導師試験の時と同じか、それ以上に今の二人は昂揚していた。

「アスカ、ソラ、先輩としてみんなのこと、しっかりフォローしてあげてね」

「…ん、任せて」

「了解。傷一つ負わせないっすよ」

フォワード六人の中でもずば抜けた力を持つ二人に、なのははそう告げる。アスカはエリオやキャラ口を守る為、ソラも珍しくやる気になり頷きを返す。無事に成功させたらさっきの罰則撤回しようかなと、なのははそんなことを考えた。

「エリオとキャラ口、それにフリードも、しっかりですよ!!」

「「はいつ!!」」

「きゅっ」

「危ない時は私やフェイト隊長、リインやナツキ隊長もフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて思いつ切りやってみよう!!」

「「「「はいつ!!」」」」

リインも残る二人と一匹に激を飛ばし、最後になのはが締め言葉。四人は元気に答え、シュヴァルツ二人も静かに頷いた。

「…大丈夫?」

「あ、ごめんなさい。大丈夫」

そんな中、キャラ口がやや不安そうな顔をしているのに気付いたエリオが問い掛けるが、キャラ口は強張った声でなんでもないと答える。アスカが持っていた飴を渡すも、結局キャラ口の暗い表情は晴れなかった。

「初めまして、でいきなりになっちゃったけど…。一緒に頑張ろうね、相棒」

そんな中スバルは右手の中、これから共に歩むことになる相棒にそう呟く。青い宝石はただ答えるように、一瞬だけ輝いた。

第四話「ファースト・アラート」 後編（後書き）

へー、ユキってリミッターなかったのかー 作者です

…うん、まあユキだもんね（え

という訳で次回、実戦…の前に、作者が発狂しそうになった変身回ですw

第五話「星、雷、漆黒」 前編（前書き）

はい、五話です。作者が最も苦勞した変身回です。…もう変身シーンなんて書きたくない…w
ではどーぞー。

第五話「星、雷、漆黒」 前編

目を覚ますとそこは、一面闇に囲まれた世界だった。当てもなくふらふらと歩き出した私の視界に、不意に一つのが映った。テントのようなそれは、私の地方における家。ということは

「アルザスの竜召喚部族、ルシエの末裔キャラヨ」

「僅か六歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた。お前は誠、素晴らしき竜召喚士よ」

中にいたのは六歳の自分。部族の長に呼ばれたあの日の自分。フリードを抱き抱えた当時の私は、突然の呼び出しと脈絡のない話に首を傾げていた。

「じゃが、強過ぎる力は災いと争いしか生まぬ」

「すまぬな…。お前をこれ以上、この里に置く訳にはいかんのじゃ」

不意に表情を厳しくした長とその妻が、悲しげにそう告げる。それが別れの言葉だと気付いたのは、数分経ってからのことだった。

竜召喚は危険な力。人を傷付ける、怖い力。私の両手にある力は、誰も守れない。

ふと両手に、血の幻覚が見えた。ような気がした。

「問題の貨物車両、速度70を維持。依然進行中です!!」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが…」

「時間の問題か…」

機動六課隊舎、管制室。アルトとルキノの状況報告を受け、グリフィスが顔を歪める。一刻も早く確保しなければ、ガジェットに奪われかねない。なんとしてもそれは阻止せねばと決意を固める中、不意にアラートが鳴り響き始める。

「アルト、ルキノ、広域スキャン！！サーチャー空へ！！」

「ガジェット反応！？空から！？」

「航空型、現地観測隊を補足！！」

手早く両隣の二人に指示したシャーリーが高速でキーを叩き、画面に現地の上空を映し出す。そこにあつたのは数えるのも嫌になる程大量の、航空型ガジェットだった。

『ヴァイス君、グリフィス君、私が出るよ。空を抑える！！』

「あの数を一人で！？本気ですか！？」

『無茶ですよなのはさん！！』

なのはがコックピットに顔を出しながら言ったセリフに、グリフィスとヴァイスが反論する。いかにエース・オブ・エースといえども、今はリミッターを掛けられてAA。百を超えるガジェットが相手では、かなり厳しいはずだ。

『そーだそーだー』

『でも今は私しか…、えっ!?!』

追従するような男性の反論をなのはが遮ろうとして、その声がグリフィスのものでもヴァイスのものでもなく、しかも自分の背後から響いて来たことに気付き振り返ると。

『よう。彼氏様が妹を連れてただいま到着だぜ』

フェイトを従えた天城ナツキ管理局最強が、軽く片手を上げて挨拶するところだった。

「グリフィス、状況は？」

『は、はい!!航空型ガジェット、およそ二百です!!』

グリフィスの声にのこのこと群れちゃってまあなどと呟き、ナツキは腕を組みしばし思考。なんのことはない、あの後パーキングに入った瞬間空間を跳躍し、機動六課隊舎裏の駐車場に停車。更に空間を跳躍し、ヘリ内に跳んで来たという訳だ。

「…ん、決めた。お前らは予定通りレリックの確保に向かえ。空は俺が抑えるから」

「そんな、無茶だよ!!」

この場における最高権限を持ったナツキの指示に、真っ先にフェイトが反論する。無理もない、今の今まで無理だと言っていたナツキが単身突っ込むと言っている上、彼は最愛の兄にして恋人なのだから。

「今のお兄ちゃんはりミッターが掛かってる上に、相手は未確認型が200だよ！？私も一緒に出る！！」

「いや、だからこそ新人の安全を最優先にしたんだが」

「だけど…！！」

反論を遮られながらも言い返そうとしたフェイトが、不意に何も話さなくなる。いや、話せなくなると言った方が正しいか。何しろ

ナツキの唇がその口を塞いでいるのだから。

「…ん、やっぱり黙らせるにはこれが一番手っ取り早いな」

「あう…、あう…」

数秒に渡るキスを終えナツキが一步下がった瞬間、フェイトが顔から煙を出しながら未知の言語を吐きつつぺたんと座り込む。全員が呆気に取りられて呆然とする中、当の本人であるナツキだけがいつも通りだった。

「大丈夫。俺は落ちないし、ガジェットもきっちり潰す。お前らをしっかり守り抜いて、無事に帰って来るから」

膝を折り視線を合わせ、ナツキがキツパリとそう告げる。赤面していたフェイトも辛うじて、こくこくと必死に頷いた。それを見て満足げに立ち上がるナツキに、鋭い視線が突き刺さる。言うまでもなく
もう一人の恋人、なのはだった。

「フェイトちゃんばかりずるいの…」

「公私混同はあんまりたくないんだけどなあ…」

不満げに呟くのはに苦笑し、ナツキはそつと抱き寄せキス。全員が言葉をなくしティアナに至ってはフェイトと同じくらいに赤面しているが、今の二人にとっては瑣末な問題でしかないようだ。

「えへへ…、ありがとね」

「当然。さて、新人共。俺が前話したこと覚えてるか？」

頬を染めはにかむのはに、ナツキは笑みと共に答えコックピットに通信。ヴァイスにハッチを開けるよう指示しながら、フォワードの六人に振り返る。その顔はもはや先程までとは別人で、歴戦の魔導師特有のオーラを放っていた。

「俺は絶対に約束は破らない。だからガジェットは全部潰してやる。フォロー役にはなのはもフェイトも、リンもいる」

開き始めたハッチに足を踏み出し、絶対の信頼を抱かせる声でそう告げる。災厄を切り裂く銀刀を携えた守護者の名の下に、一体たりとも逃さず撃破すると。だからと続けて彼は振り返り、再びあの笑顔を見せ、

「自分の好きなように、思いつ切り暴れて来い」

両手を広げて背後に 高々度の空へと倒れ込むように落下していった。

《It is too doing（格好つけ過ぎだ）》

「うつせ。本音だ本音」

逆さまに落下する視界の中、胸元の相棒 銀の十字架を模したネックレスからのツツコミを、俺はやかましいと切り捨てる。実際俺は落ちるつもりも負けるつもりも更々ない。無茶と無謀は違う。無茶は、自ら好んでするものだから。

「…行こうか、相棒」

《Yes Sir》

右手で握りしめたネックレスを、引きちぎるようにして外す。十三年の時を共に歩んで来た相棒を、頭上に掲げその名を叫ぶ！！

「ガーディアン・オブ・アルカディア、セットアップ！！」

《Set up》

瞬間、俺を中心に白銀の光が展開し落下が止まる。体位を変え逆さまの光景を戻すと同時、六課のものである陸士部隊の制服が銀光と共に掻き消え、ハーフパンツ一枚の姿になる。

宙に浮いた銀十字が煌めいた瞬間、刀身、鍔、柄が出現。ヴァイスシュヴァルツの名の由来となった^{白銀}磁力と^{漆黒}重力の輝きと共に合体。柄に拳銃のマガジンに似た弾倉がセットされ、刀身の裏にスライドして来たカバーがセットされる。

《Barrier Jacket / Strike Form》

アクセルの声に応え、周囲の魔力が俺の体に寄り集まる。軍服を基調とした漆黒の軽装を纏い、その上から裾の長いコートを羽織る。手足は一部装甲化したブーツとグローブで固め、最後に一際大きな漆黒ロングコートに袖を通し、右手で銀刀を握りしめる。ストライクフォーム。かつての非可変型バリアジャケットをベースに改良したもの。高速機動を最優先しつつ、防御面も考慮した新形態。

「シュヴァルツ01、天城ナツキ！！行くぞ！！」

アクセルで銀色のフィールドを切り裂きながら、俺は全速力で飛翔。視界の遥か先、航空型ガジェットを捉える。

《Zwei Form / Gravity Saber / Linear Strike》

俺の意図を読んだアクセルが魔法を三つ起動。ツヴァイフォームで二刀流に切り替え、刀身を黒色の刃でコーティング。更に銀色のレールを縦横無尽に、ガジェットの群れの中に生成。そこに乗って加速しながら二刀を振りかぶり、ガジェットを斬撃と共に切り落としていく。磁力のレールによって加速された斬撃は重く、細い刀とは思えない程の威力となる。これが、俺のリミッター時におけるプランの一つだった。

例え魔力の出力リミッターが掛けられていても、それまでに培った技術が消える訳ではない。大量の魔力を費やせない分時間は掛かるが、この程度の相手ならさほど苦勞せずに倒せる。

「まだまだ行くぞ…、アクセル!!」

《Yes , Sir》

斬撃の届かない場所には漆黒の弾丸を撃ち込みつつ、必要に応じてアクセルがレールを生成・分岐。二百程いたガジェットは、僅か二分でその数を半分以下に減らしていた。

「す…」

「あれが…、ナツキさんの力…」

大暴れするナツキとは対照的に、ヘリ内はしんと静まり返っていた。リミッターがあつてなおその華麗な戦闘は舞の如しで、見る者を圧倒する迫力に満ちていた。口だけではない。これなら五分も掛からず全滅させられる。そんな思いと裏腹に、三度警報が鳴り響いた。

「なのはさん!!あれ!!」

外を眺めていたソラの鋭い声に、なのはとフェイトが窓の外、彼女の視線の先を見遣る。そこにいたのは最悪なことに、空を埋め尽くす程大量のガジェット。敵の増援だった。

「あの数はナツキ君だけじゃ無理だ…。フェイトちゃん、出るよ！
！」

「うんっ！！」

さすがにこれはあのナツキでも無理　全滅はさせられるが列車
まで守り切るのは不可能と判断し、隊長二人が出ることに決めた。
メインハッチが開き始める中、ふとフェイトがキャロに歩み寄る。

「キャロ、大丈夫だよ。離れてても通信で繋がってるからピンチの
時は助け合えるし、エリオやアスカもいるから一人じゃない。キャ
ロの力はお兄ちゃんと同じ、みんなを守ってあげられる優しくて強
い力なんだから」

一人浮かない顔をしていたキャロを優しく抱きしめ、そう諭すフェ
イト。温かな感触に包まれて、心なしかキャロの表情も少しだけ和
らぐ。

「じゃ、ちよつと行って来るけど、みんなも頑張つてズバツとやつ
つけちゃおう！！」

なのはが最後にそう言い残し、フェイトと一緒にハッチから飛び降
りる。高々度からのものすごい速度で落下していくが、恐怖は全
くない。

《Get set》

《Standby, ready》

何故なら、頼もしい相棒^{パートナー}が傍にいるから。

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

なのはは胸元のペンダントに、フェイトは右手に握った黄金の三角形に呼び掛ける。十年の時を共に歩んで来た、魔導師の杖と閃光の戦斧に。

「セットアップ!!」

《《Set up》》

二人の叫びがシンクロした瞬間、桜色と金色の光が弾けた。

左側の桜色の空間、同色の羽が舞う中なのはの服が宙に溶け、サイドポニーにしていた髪が解かれる。赤い宝石を天に掲げると同時、それが二回り程大きくなった。金色のパーツと柄とが合体し、レイジングハートが本来の姿となる。

《Barrier Jacket / Aggressive Mode》

そう告げたレイジングハートを左手に取った瞬間、純白の下着^{インナー}がなのはの体を覆う。下から順にシューズ、ニーソックス、ミニスカート^{を身に纏い}、腰のパーツから前開きのロングスカートが伸びる。上半身には十年前とあまりデザインの変わらない上着を羽織り、純白のリボンで髪型をツインテールに。最後に胸元へ赤いリボンを巻き、セットアップ完了。その姿はまるで、純白の天使のようだ。アグレッサモード。軽量で汎用性に優れ、魔力消費を抑えることで長時間の活動に適した形態。八年程前から使用し始めたなのはの

新たなバリアジャケットだ。

一方右側、金色の空間。紫電が進る中フェイトの服とリボンが宙に溶け、一糸纏わぬ姿となる。右手に握った三角形を宙に放ると同時にいくつかのパーツが出現。金色の宝玉に刃がセットされ、更に下部ヘリボルバーと柄が合体、カバーがスライド。バルディッシュが斧へと変貌する。

《Barrier Jacket Impulse Form》

バリアジャケットの起動を告げたバルディッシュを右手に握ると同時に、なのはのと同じデザインの、しかし対照的に漆黒の^{インナー}下着を身に纏う。ナツキのものに良く似た紺色のジャケットを羽織り、右手をグローブ、左手を籠手で固める。下半身はミニスカートとニーソックス、ジャケットから伸びたロングスカートのような裾で覆い、足も左手同様装甲化。長い金髪をツインテールに括り、最後に白いマントを羽織りセットアップ完了。

インパルスフォーム。高速機動補助をベースに防御面にも考慮したバランスのいい形態。かつての面影はあまりなくかなり印象の異なる、フェイトの新しいバリアジャケットだ。

「スターズ01、高町なのは」

「ライトニング01、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン」

「「行きますっ!!」」

同時に変身を完了した二人は、上空を見据え一直線に飛び出す。教え子を、仲間を、何より大好きな人を守る為に。桜色と金色の輝きが流星となって、ガジェットの大群目掛けて突っ込んで行った。

『シュヴァルツ01、スターズ01、ライトニング01、エンゲージ』

増援として飛来して来たガジェットをひたすら撃墜する銀色の流星、ナツキの鋭敏化した感覚がシャーリーの声を捉える。眼下を見下ろすと桜色と金色の弾丸が、ガジェットを撃ち落とすところだった。

「こっちの空域は三人で抑える。そっちは新人達の方のフォローをお願いします」

『了解』

「三人でおんなじ空は、結構久しぶりだね」

シャーリー達管制に指示を出しながらフェイトが隣に上がって来て、なのはが嬉しそうに呟きながらナツキと背中合わせに浮かぶ。まさかここで十年前と同じ組み合わせになるとは思ってもいなかった。

「出来ればおとなしく待っててほしかったけど、なっ！！」

なのは達の身を案じながらナツキが叫ぶと、瞬時に黒槍が形成されガジェットを貫く。それが合図となったように三人は散開し、共闘・撃破する流れとなった。

青いのレーザーをかわして飛翔しながら、なのはがショートバスターを放ち射線上のガジェットを粉砕。砲撃を逃れた数機のガジェットはナツキの弾丸と黒槍が穿ち、それを見もせずナツキはレールを生成。ガジェットが固まった一角を切り崩し、逃した分はフェイトがハーケンセイバーで切り裂く。更になのはが急ターンし、生成し

たアクセルシューターを叩き付け、という光景が凄まじい速度で進行して行き、ガジェットも徐々に減り始める。例えばリミッターが掛かっていようと、この三人を敵に回して魔導機械如きが勝てるはずもない。ガジェット達は皮肉にも自らを破壊されることで、二度と使われないその知識を学習した。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そしてレリックを安全に確保すること。ですから、シュヴァルツ04とスターズ分隊、シュヴァルツ03とライトニング分隊に別れて、ガジェットを破壊しつつ車両前後から中央に向かうです。レリックはここ、七両目の重要貨物室。スターズかライトニング、先に到達した方がレリックを確保するですよ。私も現場に降りて、管制を担当します」

「……はいつ……!」

「了解」

暴走するリニアレールをモニターに映し、おさらいするように説明するリイン。彼女も既に騎士服　はやての騎士服を白くし上着と帽子を取ったような格好に着替えていた。

「さーて新人共。隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!？」

「……はいつ……!」

「当然っす」

ブリーフィングを終えると同時、コックピットのヴァイスから通信が入る。先に降下する予定になっているスバルとティアナが元気よく答え、ソラもニヤリと笑いながら答える。

「スターズ03、スバル・ナカジマ!!」

「スターズ04、ティアナ・ランスター!!」

「シュヴァルツ04、鳳ソラ!!」

「行くっす「行きます!!」」

コールサインを名乗りながら、三人はメインハッチから勢いよく飛び降りる。ナツキさんやなのはさん達も同じ感覚だったのかなと、三人はふとそんなことを考えた。

「行くよ、マツハキヤリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「やるっすよ、アルニカ、ラタトスク」

それぞれの手に握ったデバイスを見て、信頼して全てを賭けるように呟くスバルとティアナ。ソラも覚悟を決めているのか、両手のブレスレットに視線を遣りながら不敵に笑う。

「セ「セットアップ!!」」

《《《Standby,ready》》》

三人と四機の声が響いた瞬間、青とオレンジ、蒼の光が弾けた。中央の青い空間。少しずつ服が消えて行った隊長陣と対照的に、青い輝きを纏ったスバルは一瞬で服を宙に溶かす。左手に沿うように浮いていた青い宝石が消えた瞬間、丈が短く袖のないシャツとホットパンツを身に纏う。左手にナックルガードを嵌め、右手にはマツハキヤリバー。膝にプロテクターを装着し、足は青い宝石が埋め込まれた黒いブーツ。頭にはスバルの象徴とも言える鉢巻きを巻き、なのはのものと似た上着と、腰のバイザーから前開きのロングスカートを身に纏う。ラストにブーツにローラーがセットされ、ローラーブーツ型インテリジェントデバイスたるマツハキヤリバーが完成する。

以前のものとなのはのアグレッサーモードを元に設計されたバリアジャケットを身に纏い、スターズ03としてのスバルが誕生した。一方左側、オレンジ色の空間に浮かぶのはティアナ。六課の制服を宙に溶かし、左手に握った白いカードを放る。回転するカードに映されたティアナの体を、赤と黒でカラーリングされた袖無しミニスカートのワンピースが覆い、それが現実のティアナにフィードバックされる。袖のないジャケットと前開きのミニスカートを羽織り、ニーソックスとグローブで手足を覆い、ブーツとリボンを身に纏う。手中に戻ったカードが変形した、赤いクロスが特徴的な白い銃を両手に構え変身完了。スターズ04のティアナのものも、スバルと同様に設計されたバリアジャケットだった。

スバルの右の蒼い空間、その中でソラは両手を広げた。両手首のブレスレットが消えた途端、彼女の性格を表すように全ての服が一瞬で消える。ティアナのものによく似た、しかし黒と蒼でカラーリングされたそれを身に纏い、ハイソックスで足を覆う。手足をグローブとブーツで固め、漆黒のロングコートを羽織る。ブレスレットを握ると同時、蒼と黒でカラーリングされた拳銃に変化、けだるそうにくるくると回しながらも、セットアップ完了。言うまでもなくソ

ラのものも、ナツキのものを元に設計されたものだった。

「次、ライトニングとシュヴァルツ03！！チビ共、気い付けてな
！！」

「「はいつ！！」」

「…わかった」

次の降下ポイントに辿り着いたのか、ヴァイスの飛ばした声にエリオとキャロ、いつでもローテンションなアスカが答える。が、キャロは高くて怖いのか、表情がやや暗かった。

「…一緒に降りようか」

「…キャロ、行こ？」

「…うんっ！！」

そんな様子を見て、エリオとアスカが両側から手を差し延べる。優しく温かな笑みを向けられて、キャロは頷きと共に両手を取った。

「シュヴァルツ03、神凧アスカ」

「ライトニング03、エリオ・モンディアル！！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！！」

「きゅくるゝ!!」

「『行きます!!』」

コールサインを名乗り上げ、三人と一匹は一緒に飛び降りる。横一直線に並んでスカイダイビングのように、三人は落下して行った。

「ストラダ」

「ケリユケイオン」

「アポロン、アルテミス」

「『セットアップ!!』」

三人が己の相棒の名と起動を叫んだ瞬間、黄色と桃色と朱色の輝きが弾けた。

一番左の黄色い空間。稲妻が迸る空間の中でエリオは赤いシャツとブラウンのショートパンツを身に纏う。グローブの嵌められた右の手首、腕時計の文字盤が起動の並びが映されると同時にいくつかのパーツが現れる。合体したそれらが槍の穂を形作ると同時に刃を展開、柄と連結したストラダが槍の姿を取り戻す。頭上にそれを掲げ純白のロングコートを羽織り、最後にシューズを履いた両足を装甲化。フェイトのインパルスフォームを元に設計されたバリアジャケットを身に纏い、ライトニング03のエリオが誕生した。

真ん中の桃色の空間、柔らかな光の中に浮かぶのはキャロ。左手首のブレスレットの輝きと共にキャロの制服が宙に溶ける。両手をグローブで覆い、体にエリオのものとよく似た桃色のシャツ、純白のロングスカートを纏う。マントを羽織り宝石付きのシューズで足を固め、頭にはベレー帽。グローブに宝石が埋め込まれ、魔力の流れ

を表すように何本かのラインがグローブに走る。ラストに胸元にリボンを巻きセツトアップ完了。ライトニング04のキャロも同様、フェイトのそれを元にデザインされたものだった。

一方右側、朱色の空間でアスカは両手を振るう。胸元のネックレスと制服が宙に溶け、魔力が寄り集まって行く。エリオやキャロと同じデザインの、しかし鮮烈な朱色のそれを纏い、下半身は動きやすいミニスカート。ハイソックスとブーツで足を覆い、両手には黒いグローブ。ネックレスが赤と黄の輝きを放つと同時に、アクセルを縮めたような二本の短刀に変化。逆手に握ると同時、最後に漆黒のロングコートを羽織る。シュヴァルツ03神風アスカ。憧れの兄のものを元に設計されたバリアジャケットを身に纏い、彼女は戦場に降り立った。

「あれ？ね、このバリアジャケットって」

「もしかして…」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちよつと癖はありますが高性能です」

無事列車の両端に降り立ち、改めて自らのバリアジャケットを見たスバルとエリオがそんな言葉を漏らす。実戦での初セツトアップに戸惑う四人に、リインが補足を入れた。他三人も勿論だが、スバルにとっては憧れの人と同じバリアジャケット。思わず感激のあまり全身を眺め回している。が、

「二人共、感激は後っすよ」

ソラがそう窘めると同時、列車の天井が破砕。青いレーザーと共に、
?型のガジェットがわらわらと上がって来た。

《《《Drive Ignition》》》

《《《Variable Barrett》》》

「^{ショット}シュート!!」

戦いの始まりを告げる四機を手に、三人が臨戦態勢に入る。先手を打ったのはティアナとソラ。蒼とオレンジの弾丸が、AMFを展開したガジェットをあつさり撃ち抜いて行く。ソラはともかく、あれだけ多重弾殻の生成に時間の掛かったティアナでさえ、だ。その時点でクロスミラージュの性能の良さが窺える。

「うおおおおっ!!」

更にスバルがロケットスタート。空いた大穴から飛び降りると同時、待ち構えていたガジェットにリボルバーナックルを叩き込む。全体重を乗せられた一撃で、ガジェットは爆発と共に機能を停止する。が、まだまだスバルの猛攻は終わらない。その残骸を右手に掴み、ダッシュと共に加速を付けて放り投げる。レーザーが残骸に突き刺さるも速度は全く落ちないまま、二体目のガジェットが爆砕した。

《Absorb Grip》

レーザーの洗礼を咄嗟に身を屈めてかわし加速。マッハキャリバーの自動詠唱と共にグリップ力が高まり、そのまま壁面を走行して行く。

「リボルバアアアッ！！シューウウウツッ！！」

執拗な追撃のレーザーをかわし、リボルバーナックルを振りかぶる。弾丸どころか竜巻となった衝撃波がぶち当たり、ガジェットだけでなく天井さえも破砕する。

が、威力向上と閉鎖空間内で使用した為か、反動でスバルまで吹き飛ばされてしまう。足場のない宙に放り出されバランスを崩した瞬間、

《Wing Road》

マツハキヤリバーがウイングロードを自動展開。驚きながらもスバルは体勢を立て直し、再度屋根に着地した。

「うわぁ……。マツハキヤリバー、お前つてもしかしてかなりすごい？」

加速やグリップコントロールだけでなく、ウイングロードの自動発動。並のインテリジェントデバイスでもここまでは出来ないだろう。さすがは鬼才^{ユキ}の生み出したデバイス、と言ったところか。

《Because I was made to make you run stronger and faster（私はあなたをより強く、より速く走らせる為に作り出されたから）》

「でも、マツハキヤリバーはAIとはいえ心があるんでしょ？」

デバイスとはいえ心があり、スバルにとっては互いを支え合うパートナー。ならばこう言い換えるべきだ。

「お前はね、私と一緒に走る為に生まれて来たんだよ」

《I feel it the same way（同じ意味に感じます）》

「違うんだよ色々」

堅物なのか生まれたてだからなのかそんな答えを返す相棒に苦笑しつつ、スバルは自らが空けた大穴を見下ろす。既に突入したのかアイナとソラの姿は見当たらない。早く追い掛けなければ。

《I'll think about it（考えておきます）》

付け足すようにそう答えたマツハキヤリバーをぽかんと見下ろし、笑みと共に頷きながらスバルは再度車両内に突入した。

第五話「星、雷、漆黒」 前編（後書き）

…うん、変身だけで文字数稼いでるような気がしてならない。gd
gdだし（オイ

てか何さあれwバカップルじゃんだのw自重www

次回はいよいよ戦闘…、なんだけどあんま自信ないので期待せずお待ちくださいw

第五話「星、雷、漆黒」 後編（前書き）

はい、後編です。キャラクターレター回？ですw
ではどーぞー。

第五話「星、雷、漆黒」 後編

『ティアナ、どうですか？』

「ダメです。ケーブルの破壊、効果なし！！」

『こっちもダメっすね』

暴走するリニアレールの車両内。ティアナとリイン、ソラが通信で報告を交わす。両者の前には破壊されたガジェットが散乱しているが、車両が止まる様子はない。メインコンピューターから直接アクセスしないと止められないようだ。

『了解。車両の停止は私が引き受けます。ティアナとソラはスバルと合流して下さい！！』

「了解！！」

『あいさー』

《One - hand Mode》

リインの指示に従い、ティアナはウィンドウを消して駆け出す。両手に構えていた銃を片手持ちにし、他の二人と合流すべく更に先の車両へ。

「しかし、さすがあのユキさんの最新型。色々便利だし、弾体生成もサポートしてくれるんだね」

周囲を警戒しながら、ティアナは右手に握った相棒に声を掛ける。
多重弾殻の生成はもちろん通信も出来るし、二丁だから手数も上げられる。新たなデバイスとして文句なしの性能だった。

《Yes . Was it unnecessary ? (はい。不要でしたか?)》

「あんたみたいに優秀な子に頼り過ぎると、あたし的にはよくないんだけど…。でも、実戦では助かるよ」

《Thank you》

そんな会話を新たな相棒と交わしながら、ティアナは四両目へと突入した。

『シュヴァルツ04とスターズF、四両目で合流。シュヴァルツ03とライトニングF、十両目で戦闘中!!』

「シュヴァルツ01、スターズ01、ライトニング01、制空権獲得!!」

「ガジェット? 型、散開開始!! 追撃サポートに入ります!!」

ラインの報告と同時に、シャーリーとアルトが現状をグリフィスに報告する。隊長陣は言うまでもなく問題なし、新人達もまずまずといったところか。と、

「ごめんな、お待たせ」

「八神部隊長！！ユキさん！！」

「お帰りなさい！！」

「待たせたわね」

扉が開きはやとユキが駆け込んで来た。シャーリーの出迎えの言葉に答えながら、部隊長席と専用の特別席に腰掛ける。

「ここまででは、比較的順調です」

「シュヴァルツ03とライトニングF、八両目突入！！…っ！？エンカウント！！新型です！！」

が、不意にシャーリーが最悪の状況を報告した。画面に映し出されたのは？型 未確認の球型タイプ、しかもエンカウントしたのは一番戦力に乏しいライトニングF。いかにアスカがいるとはいえども、彼女はまだ12歳の少女。初出勤故の緊張などもあるだろうし、全力を出し切るのは難しいだろう。かなり悪い状態だ。が、前線メンバーではない彼女らが助けに行ける訳でもなく。歯噛みしながらモニターを注視することしか出来なかった。

エリオ、キャロ、アスカ。車両の屋根に立った三人の眼下には、巨像の如きガジェットが鎮座していた。彼ら彼女らの体躯の倍近くの大さを誇るそれは上部からベルト状のアームを射出し、鉄製の鞭が幼き少年少女達を潰さんと振り下ろされる！！

高速で放たれたそれを三人は跳躍と共に下がってかわし、軽々と降

り立ったキヤロは桃色の魔法陣を展開する。

「フリード！！ブラストフレア！！ファイア！！」

ミッド式魔法陣を経由して自らが従える竜へと魔力を送り、受け取った飛竜はそれを火球へと昇華。放たれた業火の球体は伸ばされたガジェットアームの武装目掛けて激突するも、ガジェットはなんとアームで火球を殴り弾き返した。

「おおおりやあああああつ！！」

山岳に激突した火球が爆煙を上げる中、雷撃を纏ったストラダを構えエリオがガジェット目掛けて飛び降りた。全身のバネと全体重を生かし、高所からの力を乗せた渾身の一撃を叩き込む。

「固……！！」

対しガジェットは防御もせず、自らの鋼の体でそれを受け止めた。傷一つ付けられない装甲の厚さと、握った手に返って来る反動にエリオが表情を歪める。？型の装甲程度ならばたやすく切り裂けるが、？型のそれはどうやらかなり固く厚く作られているようだ。

瞬間、その隙を見て取ったアスカが両の短刀を握りしめ跳んだ。背後に回り込みながらガジェットの上に馬乗りになり、ストラダと装甲が火花を散らしている地点に朱色を纏った短刀を叩き込む。が、歪めた表情と傷一つない装甲から、効いていないことは明白だ。エリオ以上に軽いアスカがいくら肉体と武器を強化しようとも、高所から全体重を掛けて叩き込まれたストラダの一撃には及ばない。と、ガジェットの黄色い水晶が二人を捉え煌めいた瞬間、ピンクの奇妙な力場　障壁にも見えるそれを展開する。それぞれの武器デバイスを覆っていた雷撃と朱色が剥がれるように消失し、離れた屋根に立

っているキャラの魔法陣さえも消えた。こんな芸当が出来る力に、三人は一つしか心当たりのない。

「AMF…!!」

「こんな遠くまで…!？」

悔しげにアス力が毒づき、キャラが驚いたように呟きを漏らす。いかに優れた魔法が使えるとしても、魔力結合が消されてしまえば身体能力の高い槍使いと短刀使い、そして何も出来ない少女が残るだけ。強化ありの武器でも不可能なのに、強化なしのそれで装甲を貫くのは無理難題としか言いようがない。まさに八方塞がりだ。

呆然とするキャラをよそに槍の両端をアームに掴まれ、エリオの動きが封じられる。それをカットすべく比較的柔らかいアームの接合部を狙ってアス力が斬撃を加えるが、無情にもそれは弾かれてしまう。いかにAMFの効きにくい身体強化を施しているとはいえ、武器が弱ければ意味がない。例えるならばそれは、剣の達人にカッターを渡して戦えと言うようなもの。下手すればガジェットより先にアポロンやアルテミスが壊れてしまう。

「なっ!？」

「くっ…!!」

が、状況の悪化はそれだけでは終わらなかった。更に追加の?型ガジェットが出現し、唯一動けるアス力が迎撃に向かう。エリオとアス力が必死に戦っているのに、直接的な戦闘能力のないキャラはただ上から見守ることしか出来ない。

「あ、あのっ!!」

「大丈夫！！任せて！！」

自分は何も出来ない。そんな罪悪感に囚われキャラが声を掛けるも、エリオはそう遮り？型に向き直る。アームの拘束が緩んだ隙に宙を飛んでかわしながら、放たれたレーザーを間一髪かわす。天井を貫通して一筋の傷を作ったレーザーを見て、もしストライダーを奪い返せていなかったらと思いつくとする。

そのまま向きを変え再度放たれたレーザーを転がってかわすも、追撃にアームが空気を切り裂き唸りを上げる。防御も出来ずまともに喰らったエリオは壁に叩き付けられ、アス力が心配げにそちらを見遣るがガジェットはまだ全滅させられていない。このまま放置してエリオを助けても魔法の使えないキャラが危険に晒されるかもしれない。その判断の迷いがアス力の動きを鈍らせ、徐々に劣勢へと追い込まれて行く。

「確かに凄まじい能力を持つてはいるんですが、制御がロクに出来ないんですよ」

「竜召喚だって、この子を守ろうとする竜が勝手に暴れ回るだけでとてもじゃないけど、マトモな部隊でなんか働けませんよ。精々、単独で殲滅戦に放り込むくらいしか…」

「ああ、もう結構です。ありがとうございました」

大人の人達の声を遮って、黒い髪の男の人がもうたくさんだと言わんばかりに呟く。管理局最強と称されるその人の声に大人達が僅かに慄き、窺うような視線を送る。

「この子は予定通り、私が預かります」

その人の連れである金髪の女性の予想だにしない声を受けて、私は思わず顔を上げる。どよめく大人達を黒髪の人が追い払い、私は外に連れ出された。

「私は、今度はどこへ行けばいいんでしょう？」

「それはお前がどこに行きたくて、何をしたいかによるな」

そんなことを尋ねる私に、黒髪の人はいくわかない答えを返す。自分のマフラーを私に巻いてくれた金髪の人も視線を合わせて、ニコリと優しく微笑んだ。

「キャラはどこへ行つて、何をしたい？」

考えたこともなかった。私の前にはいつも私がいちやいけない場所があつて、私がしちやいけないことがあるだけだったから。だけど、あの時二人が

「ぐあああああつ！！」

エリオ君の絶叫を聞いて、過去の回想から現実へと戻される。視線を戻すと気を失ったエリオ君がアームに掴まれ、宙へと放り出されるところだった。なんとかガジェットを破壊したアスカちゃんがダッシュして手を伸ばすけど、その手は空をすり抜けて。エリオ君は深い谷へと落下して行つた。

蘇る、過去の記憶。何度も私を助けてくれて、私を支えてく

れた幼き騎士。

「エリオ君…」

ドクン。

「エリオくうううんっ!!」

気が付けば私は駆け出して。彼を追って飛び降りていた。

『ライトニング04…、飛び降り!?』

『ちょ、あの二人!? あんな高々度でのリカバリーなんて…!!』

飛び降りたキャラをモニターで見ていたのか、ルキノとアルトが慌てたように叫ぶ。確かに冷静に考えれば、それはただの自殺行為だろう。

普通の、陸戦魔導師なら。

『いや、あれでええ』

『発生源から離れば、AMFも弱くなる』

「使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が!!」

はやてが頷きながら判断を褒め、対AMFの定石を告げユキが不敵に笑い、なのはが笑顔で結論付ける。今のキャラなら使える

あの魔法が！！

「守りたい……」

落下して行く中、キャラは静かにそう呟く。今の彼女には何も見えていない。ただ見るのは守りたい人^{エリオ}と己の力のみ。

「優しい人を……私に笑いかけてくれる人達を……」

脳裏を過ぎるのはあの二人。彼女を施設から連れ出してくれた、自分の好きにしていいたいと言ってくれた最強と最速の二人。

「自分の力で……守りたい……」

《Drive Ignition》

エリオの手を握った瞬間、ケリユケイオンが桃色の輝きを放つ。想いに目覚めた主人^{マスター}に応え、その真の力を発揮せんと強く強く輝く。桃色の空間に包まれて、二人の落下が止まった。キャラは優しくエリオを抱きしめ、眼前を飛ぶ飛竜を見遣る。

「フリード、不自由な思いさせてゴメン。私、ちゃんと制御するから。行くよ、竜魂召喚……」

キャラの叫びにフリードが頷くと同時、桃色の空間の周囲に極大環状魔法陣が展開される。目を覚ましたエリオが声を掛けようとするも、輝きを更に増した空間内に展開された召喚魔法陣に気付き絶句する。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜

フリードリヒ。竜魂召喚!!」

キャロの詠唱とケリユケイオンの輝きがシンクロした瞬間、魔法陣から巨大な竜が現れ産声を上げる。桃色の空間を弾き飛ばし、それが姿を現した。

キャロの数倍以上の大きさを誇り、広げると二十〜三十メートルにも及びそうな翼。首に二人を乗せ雄叫びを上げながら、力強く羽ばたいて行く。

白銀の飛竜、フリードリヒ。キャロの竜魂召喚によって、それは本来の姿を取り戻していた。

『召喚成功!!』

『フリードの意識レベル、ブルー!!完全制御状態です!!』

『これが…』

『そう、キャロの竜召喚。その力的一端や』

『あれが…、チビ竜のホントの姿…』

『カッコイイ…』

『すごいっすねえ…』

初めて見るキャロの竜召喚に、ロングアーチだけでなくスターズとソラも感嘆の溜め息をつく。人の姿しか取らない龍神ミサオを見てもピンと来ないが、竜の巨大な姿は見る者全員に衝撃と感動を与えていた。これが、伝承や神話で語られるあの竜なのだ。

「…………あ、う、ごめんなさい!!」

「う、うん!! そんな、こっちこそ!!」

そんな周りとは対照的に、未だエリオを抱きしめたままだったキヤロが頬を染めながら慌てて離れたり、エリオも真っ赤になつて礼を述べたり。何と云うか、隊長に似てマイペースな二人だった。

「あつちの三人にはもう救援はいらないですう。さ、レリックを回収するですよ」

そんな二人を見て苦笑しながら、リインがスバル達三人を促す。残り一体となつた? 型ガジェットも屋根に無理矢理出て来て、相対すべき白銀の飛竜を見遣る。こうして、対? 型ガジェットのニラウンド目がスタートした。

「フリード、ブラストレイ!!」

キヤロが叫びながら右手を振りかぶつた瞬間、桃色の光が環状に弾けた。フリードの口に生成された炎と混じり合い、巨大な球を形作つて行く。

「ファイア!!」

環状魔法陣で加速・強化された業火の奔流が、放射状に広がり瀑布の如くガジェットに襲い掛かる。が、間髪を容れずガジェットはバリアを展開し辛うじて防御。コードやアームを焼かれ炎の大河の中に取り残されるような形になりながら、本体は無傷で堪えていた。

「やっぱり固い…」

「あの形状は、砲撃じゃ貫きづらいよ。僕とストラダがやる」

ブラストレイが通じなかったことに歯噛みするキャロに応え、鞍から立ち上がりストラダを構えるエリオ。通じない？倒せない？知ったことか。一度でダメならもう一度。それでもダメなら何度でも通じるまで、倒せるまで、挑み続けるだけ！！

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

《Enchanted Field Invalid》

従えし白銀の飛竜の上、頷きと共にキャロは左手のケリユケイオンを振りかぶる。フィールド貫通の効果を持たせるブーストを掛けながら、更にキャロは右手を振るう。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《Boost Up Strike Power》

打撃力強化のブーストを追加で掛けながら、キャロはゆっくりと両手を広げる。ケリユケイオンが両手用グローブなのは決して飾りではない。片手に付き一つずつ、つまり同時に二種類のブーストを掛けられるのだ。

「行くよ、エリオ君！！」

「了解、キャロ！！」

翳した両手の先にケリユケイオンから現れた二つの球体を構えたキヤロの言葉に、威勢よく答えながらエリオが駆け出しフリードの頭から飛び降りる。槍を構えた騎士の視線の先、ガジェットを穿つべく重力を味方に速度を上げていく。

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク!!」

《Empfang（受諾）》

キヤロが叫びと共に両手を前へ。桃色の軌跡を描きながら宙を走ったツインブーストは一瞬でエリオへと追い付き、ストラーダの刃と同化。確かに受け取ったと告げる声と共に刀身に桃色の輝きを纏い、エリオは得物を振りかぶる。

「はあああああっ!!」

《Stahlmesser》

掛け声と共に気合い一閃。伸ばされたアームとコード目掛けて、黄と桃の二色を纏ったストラーダを全力で振るう!!

《Explosion》

一瞬でそれらの全てを切り裂きながら、エリオは軽々と着地。振りかぶったストラーダが主の命令に答え、カートリッジロードを告げる。

「一閃必中……!!」

二発の弾丸をロードすると同時、槍の穂先からロケットのように魔力を放出する。足元にベルカ式魔法陣を展開し、青い稲妻を迸らせるストラーダを構える。

最後の抵抗とばかりに一筋のレーザーが放たれるが、エリオは微動だにせずそれを見守る。何故なら自分は一人ではない。キャロだけでもない。まだもう一人、信頼出来る仲間がいる。

レーザーがエリオに当たる寸前、高速で投擲された短刀がその軌道を逸らす。くると回転しながら跳ね上がったそれを宙でキャッチした少女　アスカがガジェットの水晶、レーザーの発射部分に短刀を突き込む！！

全ての攻撃手段を失ったガジェットのボディーを蹴ってバク転、微笑んだ少女に頷きを返したエリオは全力で突っ込む！！

音速とまではないかないものかなりの速度で突き出された槍はガジェットを貫通、エリオはそのままストラーダを両手で握りしめ、

「でええええりゃああああああっ！！」

全力でストラーダを振り上げる！！

急激な加速と静止　それによって全身を襲うはずだった衝撃を全てストラーダと両手に回し、縦一文字にガジェットを切り裂いた！！
爆砕・炎上するガジェットの背景に、二人が己の得物を振るい攻撃の余韻を振り払う。上空から見守っていたキャロも、一安心したようだ。

「車両内及び上空のガジェット反応、全て消滅！！」

「シュヴァルツ04とスターズF、レリックを無事確保！！」

『車両のコントロールも取り戻したですよ　今止めまゝす』

「ああ、ほんならちようどええ。スターズの三人とリインはヘリで回収してもらって、そのまま中央のラボまでレリックの護送をお願いしよかな？」

相次ぐ状況の好転報告に、管制室のロングアーチ一同もようやく緊張を解く。危機は去った。レリックも確保。初任務にしてはこれ以上ない出来と言えるだろう。部隊長であるはやても枕を高くして眠れそうだ。

『はいですう』

「ライトニングとシュヴァルツはどうします？」

「現場待機。現地の職員に事後処理の引き継ぎ。よろしくな」

グリフィスの質問に答えながらフェイトとナツキに通信を飛ばし、モニターへと視線を戻す。全員が任務成功にホッとする中、フリードの上に乗った年少三人組は仲良く微笑みとハイタッチを交わっていた。

薄暗いラボの中、そんな光景をモニター越しに見ている一人の男がいた。紺色のスーツに白衣を着た、紫色の髪をした若い男だった。

『刻印ナンバー？、護送態勢に入りました。追撃戦力を送りますか？』

「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ」

別のモニターに映し出された薄い紫色の髪的女性からの質問に答えると、そうですかと彼女は物憂げな顔。白衣の男の指示に何か不満でもあったのだろうか。

「どうかしたのかい、ウーノ？浮かない顔だね？」

『いえ…。あまりあの方を待たせると、八つ当たりのように妹達がセクハラされるので…』

そう思い彼女　ウーノに尋ねてみるも返って来た答えはそれは別の、言うなれば天災染みた事象に対する諦めの溜め息だった。

「だがまだ向こうに気取られるのは避けたい。こちらが待たせているのは事実だし、悪いが好きにさせてやってくれ」

『はい…、わかりました…』

白衣の男の指示に頷きながら、ウーノは通信を切断する。彼女のセクハラ被害に遭っていない女性は、今ここにはいないと確実に断言出来る。そこそこの時間を共に過ごしている為か、セインに彼女の性癖が感染しつつあるのが虚しさに拍車を掛けていた。良くも悪くも彼女は、ここに様々な影響を及ぼしている。AMFが完成したのだから、元を糾せば彼女の助力によるところが大きい。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に…」

それらを頭の片隅に押しやり、画面に展開されていた魔導師達

なのはやキャロ、スバルにナツキが映っていたそれらを消し、新たな映像を映し出す。宙を舞いながら金色の鎌でガジェットを切り裂くフェイトと、？型を一刀両断したエリオの動画を見て、白衣の男は歪んだ笑みを浮かべる。

「この子達、生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから」

プロジェクトF 十年前に一人の女性を悲劇に走らせ、一人の少女を絶望に叩き落とし、間接的に何十人もの天才魔導師達を死に追いやり、一人の少年が名前を捨てるきっかけとなった事件のキーワードのプロジェクトFの名を呟き、白衣の男は狂ったような高笑いを上げる。無人のラボにその哄笑はいつまでも残響して、淀んだ空気を震わせ続けた。

第五話「星、雷、漆黒」 後編（後書き）

はい、今回はここまでです。

第一部？的な五話までが終わった& a m p ;ストックが尽きたので
これからしばらく間が開きます。

続きはいつか未定ですが気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8624p/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS Another

2011年4月5日18時05分発行